

---

# 俺は学生になった

城 未来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は学生になった

### 【Nコード】

N5119E

### 【作者名】

城 未来

### 【あらすじ】

大学生になった18歳の俺。年の離れた兄貴、同じ年の妹、そして、規格外の鬼婆ことお袋との4人家族だが、俺の17年間は何ぞか普通ではない生活だった。よく似ていると言われる双子の妹だが、資質も性格も大違い。勿論、学校の成績は対照的。スポーツなんでもOKな俺と優秀な妹。サッカーで泣き、スキーで笑い、バイクでは苦汁を舐めた俺の青春。いや、青春はこれからも続く。まじめにやっつけてもなぜかコメディになる、不思議な可笑しい家族達を紹介しよう。

## 変な家族（前書き）

この物語はフィクションです。  
登場する人物は何処にでもいる奴らです。

## 変な家族

俺の名前は小柳レオ。

4月に私立大学に入学した18歳。

バリバリの大学生だ。

俺は鬼婆ことお袋と二人暮らし。

この婆さん、実に規格外。

行動パターンは予測不能。

面白いなんてもんじゃない。

婆のおかげで我が家は普通じゃない。

俺の家族がほかとは違うことに最近になって気が付いた。

お袋と二人で暮らしているけど、一人っ子じゃない。

希少価値の高い、3人兄妹の真ん中だ。

7歳上の兄貴に言わせると「一番、影の薄い存在！」失礼な奴だ。

お袋は「希少価値が高い次男坊」という。

理由を聞いたら、一人娘と結婚できる最高の条件だと！

まあ、影が薄いよりはましだろう。少子化も進んでいることだし。

怖い兄貴は渡米中。おそらく、当分は帰国しないだろう。

上手くすれば青い目の嫁さんを同伴するか、米国に永住するか？

そして、目の上のタンコブ、邪魔な妹のレイラ。

奴は某国立大学医学部の一年生。そして18歳。

なぜか、俺と妹は同じ年。つまりツインズ！

それなのに一方は国大医学部、こちらは三流私学の社会学部。どうゆう遺伝子を受け継いだのか、勉強の成績は対照的。

「お前なんか生まれてこなきゃ良かったんだ！」

俺が怒鳴ると泣いていたのは昔の従順だった妹。

最近「レオが余分でしょ!？」と言り返す。ますます婆に似てき

た。

兄貴がナオ、俺がレオ、妹がレイラ。どうゆう命名だ？

「こんな名前をつける親の顔が見たい！」と言つと

「こんなんだよお！」と婆さんが自分を指さす。

漫才をやりたいわけじゃない！

俺がキレても、相手になる家族は居ない。孤独な俺！

やっぱり、影が薄いのだろうか？

親父は昔、居たらしいが俺は知らない。

俺がなんで社会学部に進学したのか？

もともと、社会系科目が好きじゃなかった。

それどころか、勉強自体が好きじゃない。

小学校から通ったエスカレータの私学が一番広い門を選んだ訳だ。

「狭き門から入れ」が正しいが、まあ同じようなものだろう。

俺の成績でも入れたのだから大学のレベルは高くない。

進学という選択の場で俺が一番楽な道を選んだ。

高校生の俺にはやりたい事も好きな仕事も特に無かった。

「安易さ」を基準に選んで、何が悪い！

兄貴は俺を文系と呼ぶが、婆は体育会系という。

確かに一度は体育大学への進学も考えた。

運動は好きだがシゴキや地道なトレーニングは嫌いだ。

俺は自由気ままな大学生活をエンジョイしたかっただけだ。

俺が兄貴や妹に勝てるのは体育だけ！それも全種目パーフェクトだ。

兄貴や妹は俺よりはるかに運動音痴。それでも水準以上かなあ。

俺達兄妹の得意な種目はスキーと水泳だ。

俺の場合はそれにサッカーとバスケットが加わる。

婆に言わせると「スキーは全国大会、水泳は県大会レベル」だと！

どうしてあの鈍い連中が代表になれるのか不思議だ。  
しかし、俺達のタイムは婆の言うとおりのレベルだった。

兄貴は「お前の滑りは反射神経と勘だけだ」と言っている。  
何も考えずに滑る方がタイムが良いのだから仕方ない。  
妹までが「レオの頭は筋肉だもんね！」と軽蔑顔。

俺の頭が筋肉だと言われるには訳がある。

小学生時代に俺は少年サッカーチームのキャプテンをやっていた。  
ある対抗試合にレイラが婆と応援にやって来た。兄貴も来ていた。  
その頃は知らなかったが、婆さん、サッカーの経験もあるらしい。

応援していた婆が「頭を使って！」と怒鳴った。

俺は大声で「ヘディングか？」とこたえた。

「バカ！使うのは頭の、な・か・み！」

得点もしていないのにチームの応援席がどっと沸きあがった！  
それ以来、俺の頭は筋肉だからかわれる。

スキーをやっていると3学期は学校に行く暇が無い。

お陰で、中学高校の成績は散々、進級するのがやっとという有様だ。  
ところが、一緒にスキーに出かける妹は不思議に成績が良い。

学校のレベルも俺は3流大学の付属高校。

あいつは、ダチが知れば大騒ぎになる某有名お嬢様学校だ。

学校のレベルも高いが、奴の成績もトップクラスだ。

奴は関西の国大に合格して家を出て行った。

「何で関西なんだよ〜！」と言ったら、あのやろっ・・・  
「だってT大は難しいんだもん」だと、ふざけるなあ〜！  
一人暮らしがしたかったと大喜びだ。ちくしょう!!!

「何で俺だけが鬼婆と暮らすんだ〜あ！」と文句を言ったら・・・。  
「独り立ちしたいなら、就職すれば？」と婆にいわれた。

兄も妹も学費が安いと婆は言うけど、兄貴こそ社会人になれよ！！

双子と言うのは不思議な存在だ。

居るのが当たり前、居なくなると不安定だ。

しかし、時としてとても邪魔な存在となる。

永遠のライバル！・・・と思っっているのは俺だけか？！

双子でも俺達は性格、資質がまったく違う。

なぜか、姿は似ているらしい。

保育園時代に俺とレイラで洋服を取り替えた事がある。

当時は俺の方が強かった。妹を脅してお袋をだましたわけだ。

洋服を取り替えた俺達にお袋は全く気が付かない。

レイラには俺の緑のカバンをもたせ、俺には赤いカバンをかけた。

何時もとは逆に俺を自転車の前に乗せ、レイラを後ろに乗せた。

婆だけではない。朝の騒然とした中で保育園の先生も気が付かない。

先生を騙した事で、大満足の俺だったが、そうは続かない。

立ち小便ができずにレイラが泣き出し、悪戯がばれてしまった！

保育園の先生は俺を叱ったあと、連絡帳にせつせと書いている。

婆に怒られる！俺はドキドキだった。

ところが、婆の反応は・・・。

「保育園の先生、面白い事を考えるねえ！！」

レオとレイラが洋服変えたって直ぐに判るのにねえ！！」

どこを見ているんだか・・・？

雪国育ちではない俺達がスキーをやるのは婆のせいだ。

婆は大学スキー部のマドンナだったらしい。本人の話だから信頼性は低い。

後輩達の合宿があると、OGとして参加していた。

俺達は赤ん坊の頃から荷物と一緒に運ばれた。

鬼婆は「立てれば、歩けなくてもスキーができる。」と考えた。

仮説を立てると、直ぐに実験をしたがるのは理系の人間の悪い癖だ。実験材料にされたのは勿論、俺だ。俺は一歳の誕生日を前にスキーを履いた。

何で、レイラでなく俺なんだ！

兄貴が赤ん坊の時は背負子に入れて背負ったまま大学生にスキーを教えたという。

流石の婆も俺とレイラをまとめて背負うのは難しかったようだ。

俺達は早い時期から道具を与えられ、ゲレンデのスターになった。

スキー場では、不思議なことに俺達は女の双子に間違えられた。

婆の手抜きで髪の毛の長さも同じぐらい、洋服も下着以外は兼用が多かった。

兄貴のお古も二人で交互に着ていた。

俺達が女に間違えられるのは、イマイましい髪の毛だ。

細くて柔らかい髪の毛は、婆の遺伝でクルクルの巻き毛だ。

赤ん坊の頃の俺とレイラの写真はキューピー人形とそっくりじゃないか。

ゲレンデでは二人を見た女子大生に「かわい〜い！」と言われる。妹は大喜びだが、俺は屈辱で顔が赤くなった。

俺やレイラが5歳になると大学生もたじたじだった。

ゲレンデではチョロチョロと好き勝手な方に飛んでいく！

以心伝心、俺の考えはレイラに伝わる。

好き勝手にカットブ俺達に奴らが追いつけるものか！

こっちは曲がった事が嫌いだぜ！一直線で下降する。付いて来てみる！

俺とレイラの子守当番をさせられた学生は確かに上達した。

婆は俺とレイラのヘルメットに無線機を仕込む技を使った。追いつくのがかったるいので無線でリモート操縦しようと言う腹だ。レイラは別として、俺をコントロールするのは大変だったと婆が言う。

「レオが一番、右と左を覚えるのが遅かったから・・・」ほっといてくれ！

俺もレイラも一応、入試に合格して別々の小学校に入学した。私立の小学校は入試がある。小学校受験用の予備校だってあるんだ。面接の時に電話番号を聞かれた俺は、祖父母の家の番号を答えた。誰も居ない自宅に電話をかけることは無い。家の電話番号など知るわけがない。

でも、合格したのだから、結果オーライだ。俺は兄貴の卒業と同時に、その私立小学校に入学した。兄は隣の中学校舎に移った。

「お前が合格したのは俺の成績が良かったからだ」と兄貴は言う。それは本当かも知れないと俺も思う。

レイラは間違いで有名な私立のお嬢様学校じょうしやうがくに入学した。俺と張り合っていたレイラが、お嬢様じょうしやうがくになれるわけがない！予想どおり、奴は学校の普通でない生徒になった。多くの親は子供が普通でないと、大変に気になるらしい。婆はそんな事は考えてもみない。そもそも婆の辞書に「普通」という規格がない。

婆が規格外であった事で、俺はどれだけ救われたか・・・。学校からの親の呼び出しもしばしばあったと記憶する。

「お宅のお子さんはチョツと元気が良すぎて」と言う先生に、

真顔で「ハイ、元気だけが取り得の子です。」と言つてのけた。  
先生は何のために婆を呼んだか失念したらしい。

学校に呼ばれて先生に何を聞いて来ても、婆は俺に説明を求めた。  
俺は正直に婆に説明した。俺は嘘がつける程、頭が良くない。  
最後まで話を聞くと婆は、最後に「それで？」とたずねた。  
俺はどうしたら良いかを自分で考えるしかなかった。

婆からはスキーだけでなく、水泳も習った。

俺達が婆の中に住んで居た時も兄貴と泳ぎに行つたという。

「だって、二人も入つていたら、重くて運動できないから……」  
妊婦にんぶつて運動するものなのか？俺は経験できそうも無いけど……？  
奴の運動は半端ではない。

婆が俺達に泳ぎを教えたというが、俺の記憶にはない。

俺達が1歳になる前から、婆は水泳の特訓とくくんをしたらしい。

「日本は島国なんだよ！四方を海に囲まれているのに！泳げないな  
んて許せない」

だからって、1歳にならない俺達を水に放り込むか？

婆は学生時代に子供に水泳を教えるバイトをしていたとか！

「ベビースイミングってあるんだよ」と婆はいう。

兄から聞いた俺たちの水泳トレーニング方法とは……。

兄貴が俺、婆がレイラを抱き、プールに入る。

第1ステップ、1・2・3で抱いたまま潜る。

最初は水を飲んだ俺達も慣れると息を止めるようになる。

第2ステップ、兄貴と1m離れて向き合う。

1・2・3でお互いに抱いた赤ん坊を相手に渡す。

だんだん、兄貴と婆が離れる。

俺もレイラも向こうにたどり着かないと溺おぼれる。

必死で俺は婆に向かって進み、レイラは兄貴に向かう。  
俺達は小学校に行く前に泳ぎを覚えた。

小学校に行くようになると、俺達は兄の通うスイミングに行った。  
放課後は学校から学童保育がくどうほいくに行き、レイラと合流して夕方まで過こす。

夕方になると、迎えに来る兄貴と一緒にスイミングに向かう。  
たかが、一時間の練習だか、休まずに泳ぐ一時間はかなりの距離だ。  
俺もレイラもクタクタだ。晩飯を食いながらウトウト眠り込む。

「俺たちのスイミングは婆の仕事時間を確保するためか？」  
中学生になった俺がレイラに言う。「レオ、知らなかったの？」  
おかげで俺もレイラも兄貴と地域の水泳大会に出場し、何枚かの賞  
状を貰った。

水泳は一年中、スキーは雪のある季節。  
それだけでは物足りず、俺は少年サッカーチームに入った。  
二人同時に生まれた為か、俺もレイラも体が小さい。  
大きな奴らを出し抜いて、小さい俺が飛び出すとファンが歓声かんせいをあげた。  
俺はサッカーチームのエースになった。

水泳の試合は夏が多いが、出場したのは低学年の時だけだ。  
夏休みにスキーキャンプに参加するようになったからだ。  
俺とレイラは兄貴の参加するニュージールランドキャンプに同行した。  
兄貴の出発を送りに行き、俺が成田で泣いてゴネタのが理由と言わ  
れる。

おかしい、泣いてゴネタのは俺だけではない。レイラもだ。  
俺は自分も行きたくて泣いたが、レイラは兄貴と離れるのが寂しく  
て泣いた。

結果は同じじゃないか。

兄貴が最年少の参加者だったキャンプに俺達が加わった。婆に言われて引き受けたコーチも変人だ。俺とレイラの奔放性<sup>ほんぼうせい</sup>を知らないな！

俺達はペンションのオーナーの子供達と意気投合<sup>いきていごう</sup>した。

当<sup>あや</sup>時を思い出す<sup>あや</sup>が、あの時に俺達が何語で話していたのか、記憶が怪<sup>あや</sup>しい。

俺もレイラも英語は知らない。彼らも日本語を知らない。それでも遊ぶ<sup>あそぶ</sup>のには支障<sup>しじょう</sup>がなかった。

TVの英会話のCM、あれは嘘<sup>うそ</sup>だ。日本語で「あそぼう」といえば子供には通じる。

子供と大人では勝手が違う。ゲレンデで兄貴やコーチとはぐれると迷子になる。

俺とレイラは決して離れなかった。いつも、双子のように一緒に居た。

コーチのおもわく通り、俺とレイラのコントロールは海外では安易であった。

気が付くと俺もレイラも片言の英語を話していた。

俺は婆と離れて暮らす、夏の一月間を寂<sup>さび</sup>しいと思わなかった。

兄貴もレイラも一緒だ。何が寂しいものか。

大人と一緒にの練習に参加して、俺もレイラもへとへとになる。ペンションに戻ると飯を食ってベットに潜<sup>もく</sup>り込む毎日だ。

朝まで記憶がない。レイラも疲れからか、元気がない。

ある夜、夢か現実か、俺は胸が痛くて飛び起きた。

何か変だ。気が付くとレイラが毛布<sup>かぶ</sup>を被<sup>かぶ</sup>って泣いている。

「来いよ！」俺はレイラを呼んだ。

俺のベットでレイラは俺にしがみついて泣きじゃくった。

寂しかったのか？ゴメン、気が付かなかった自分が情けなかった。幼い頃、出張するお袋が俺達を祖父母に預けた事がある。

昼間は元気だったレイラも俺も夜になると無性に心細かった。

あの時もレイラは兄貴ではなく、俺にしがみついて泣きながら眠った。

俺は昔を思い出し、俺を頼るレイラが愛しかった。

次の日、レイラは元気になった。

高3の夏は、流石さすがの俺も受験時期と思い、キャンプを断念だんねんした。

それまで俺とレイラは毎年、8月をニュージーキャンプで過ごした。進学の関係で兄がキャンプに参加しなくなると俺とレイラは更に結束を固めた。

先日、ふと思いついて、レイラに言った。

「夏のニュージーってさあ、俺達を追い出す婆の作戦かなあ？」と俺。

「夏は里子に出してユツクリ仕事できるって！ママ、喜んでるよ」とレイラ。

何だと！知らなかったのは俺だけか！憤慨ふんがいする俺にレイラが言った。

「どっちだっていいじゃん、お陰でスキーは上手くなるし、英語も喋しゃべれるし」

うーん、そりゃそうだが・・・。

水泳は早い時期に県大会が精々だと俺は悟さとった。

本気でやればもう少し良いタイムが出るとは思うが、その気力も無かった。

早朝練習、放課後の練習が夜中まで続く選手コースを見ていて思った。

地道がトレーニングが嫌いな俺はトップスイマーにはなれない。

それでもトレーニング代わりにスイミングは続けていた。

でも、俺にとってサッカーは違う。俺は本気だ。  
俺達の少年サッカーチームは強かった。同期のメンバーは粒揃いだ  
った。

俺達は地区大会で順調に勝ち進んだ。

準決勝がスキーの国体予選とぶつかった。

俺は兄が部長をしている中高のスキー部に加わり毎年、国体予選に  
参戦していた。

国体は高校生にならないと出場できないが、県予選は滑れる。

小学生の俺は高校生相手に本気で勝負していた。

「レオ、決勝は必ず出てくれよ！今回は俺達に任せろ！」

副キャプテンで親友のミノルが熱く語った。奴は鉄壁のキーパーだ。

「レオ、高校生に負けるな！頑張つて来い」

チームメイトの激励をうけ、俺はスキーの試合に出場した。

国体予選を通過した兄貴には負けたが、良いタイムだ。

高校生と互角のタイムに大満足で戻った俺を待っていたのは……。

「レオ、ゴメン！負けた」目を真っ赤にしたミノルだった。

ミノルは俺と違って、体がでかい。俺は彼の肩にも届かない。

鉄壁のキーパーとして、ミノルは各チームの監督にも一目置かれて  
いた。

無失点記録を更新してきた彼の、たった一点の失点で負けた。

小さな俺と大きなミノルは肩を抱き合って泣いた。

ミノルは俺に「ゴメン」と謝り、俺はミノルに「ゴメン」と詫びた。

俺達の引退試合の日が来た。毎年恒例のチームイベントだ。

卒業する6年生と、引き継ぐ5年生の対抗試合だ。

終了後に余興イベントで父母との試合も行われる。昔は父兄との試  
合だった。

現役げんえきのサッカー部の兄が出場して問題になり、父母チームに変わった。

去年は引退試合いんたいしあひで挑戦者ちょうせしやの俺達が6年生に勝つという番狂わせばんくるが起こった。

「奇跡きせき的に」とコーチは言ったが、実力だと俺達は思っていた。

今年の俺達に番狂わせはあり得ない。

俺達は5年生チームを手玉に取り、右に左に振り回した。

ミノルのゴールは鉄壁てつぺきだ。後は俺が点を入れればよい。

俊足しゅんそくのタカと俺はチビのツートップと言われ恐れおそられている。

多くの場合、タカのアシストで俺がゴールを決める。

この試合で俺はハットトリックを達成たっせいした。

5-0だった。後の2得点はタカだ。

二人でのハットトリックを狙って、後半は俺がアシストした。

後、5分あればダブルでハットトリックが達成たっせいできたらう。

5年生のキーパーのカイトが泣いているのを見て心が痛かった。

「お前に後を頼むんだ」俺はカイトに言った。

イベントの父母戦のメンバー表を見て、俺はぶっ飛んだ。

婆が出ている。それも希望者がでないキーパーだ。

「何で出るんだよ！皆も親父がでているんだぞ！」

「だって、父は居ないし、兄も出られなくなっただでしょ！」

「でも、キーパーなんてできるのか・・・」

「走り回るの疲れるジャン！」

俺は呆あきれて言葉がでない。

試合が始まった。運動不足と言っても大人は手ごわい。

体もでかくて、歩幅すたんすも広い。体当たりをすれば此方がぶっ飛ぶ。

ミノルがゴールに居る。頑張がんばってくれミノル、試合後半は敵がバテる。

俺達は極力、親父達を走らせる作戦でパスを回した。

後半に入ると狙い通りだ、親父達が息を切らせ始めた。

ボールを目で追いながら、止まって肩で息をする姿を横目にパスを回す。

何度かボールがゴールに向かって飛ぶが運悪く得点にならない。

俺のシュートもゴールの上、ゴールの右と外れた。

婆は動かない。動けるわけがない。キーパーは簡単じゃないぜ！

そもそも、婆はキーパーって何をするのか知っているのだろうか？

これは決まったと思った、マサシのシュートが婆に当たって跳ね返った。

そろそろヤバイ、時間がない。点を入れないとドロウでは赤っ恥だ。

俺はゴールの右を狙って懇親のシュートを放った。

やった！次の瞬間、俺は『バシッ』という音とともに恐ろしい光景を目にした。

俺の放ったシュートは正面で受け止めた婆の両手に収まっていた。

ワーと歓声が上がった。何時の間に移動したんだ。

ヤバイ、俺とタカは焦った。点を取らなきゃ、時間切れだ！

親父達は付いて来れない、パス回しとドリブルでディフェンスは振り切れる。

タカからの絶妙のパスが来た。ナイスアシスト！

俺は「食らえ！」とゴールの左隅を狙って絶妙のシュートを叩き込んだ。

思ったコースにボールが弧を描く。

『バシッ』、横に飛んだ婆がボールを手に落下した。

立ち上がって、パンパンとズボンの泥を払い、ボールを蹴る婆の姿。俺の目にはスローモーションで写っていた。

まるで、本物のゴールキーパーみたいだ……。

ピーーイ！！試合の終了を知らせる無情のホイッスルが遠くで聞こ

えた。

俺の青春が終わった。

その後のお別れ会パーティーはブルーだった。

俺達はぼろ負けした、5年生よりも落ち込んでいた。

去年は6年生の鼻をあかし、有頂天になっていたお別れ会。

今、俺達にも去年の6年生の気持ちができる。

帰りの車の中でレイラが俺に寄りかかった。

寝たふりをしているが、呼吸で判る。レイラが俺を気遣っている。

「何も小学生を相手に本気にならなくても・・・大人気ないなあ。

キーパーをやっていたんだろ、中学時代にサッカー部で！」助手席の兄が言った。

「違うよ、中学は水泳部よ、冬は練習できないからサッカー部やっていたけど、

でもね、相手が真剣なのに本気でやらなきゃ失礼でしょ。わざと負けて喜ぶ？」婆が言った。

確かに、婆は俺達に手加減をしない。幼い頃から、厳きびしい。

ゲレンデで大人と接触しそうになったときも幼児の俺はバツチり叱られた。

大人がよけるのは当たり前だと思っていた俺に婆が言った。

「スキーでは上手な方が譲ゆずるの。レオには充分によける技術がある。

下手な人がコースを変更するよりも上手な方がよければ安全だ。

婆は俺に大人に言うように説明した。一つの事をするのに大人も子供もない。

俺もレイラも幼い頃から婆からは一人前に扱われていた気がする。

## 双子ヘッインズ《：二分の一の青春（前書き）

俺たちはそれぞれの学校で普通の中学生になった。

ごく当たり前に過ごしてきた中学時代に俺達が経験した事は・・・。  
鬼婆のサバイバルキャンプなどを紹介しよう。

## 双子ヘッインズ《：二分の一の青春

俺が中学生になるとレイラも中学生になった。

俺達はごく普通の中学高校時代を過ごした。

・・・と思っていたが、それでもないらしい。

俺は中学校に入るとサッカーへの夢を捨てた。最初の挫折だった。

「レオ、本当に良いの、サッカーやめちゃうの？」レイラは気付いていた。

「だって、俺のシュートが婆に止められたんだぜ！」

「だって、ママも昔、サッカーやってんだよ、キーパーだって」

「俺にもプライドはある！」ずたずたになった俺のプライド。

レイラの目が潤む。泣きたいのはこつちだ！

今になって思えば、小学生の俺はなんて未熟だったのか？

少年チームで観客（かんきゃく）に騒がれた位で有頂天になって恥ずかしい。

ユースからのスカウトだって夢じゃないと思うほど世間知らず。

今おもえば婆に目を覚まされた（叩き起された）ってところだろう。いいさ、サッカーは楽しめれば・・・。

スポーツをやるからには「勝利」が目的、というのが俺の基準だった。

俺の中でサッカーは「楽しむ」ためのスポーツに変わった。

中学生になったからといって、勉強が好きになるわけではない。

しかし、学校は大好きだ。登校拒否をする奴の気持ちが判らなかつた。

「俺さあ、勉強がなかったら学校って最高だと思つよ」「飯を食いながら、つい、うっかり口にした本音。」

箸を止めたレイラの冷たい視線<sup>しせん</sup>。

中学になるとクラスが増えて俺には沢山の友達<sup>ともだち</sup>ができた。毎日が楽しくて仕方ない。

「明日は早く家をでるよ。朝、グラウンドでサッカーやるんだ」

「レオって、遊んでばかり！大丈夫なの勉強は？」

婆は何も言わないのに、レイラがうるさい。

ふと気が付けばレイラがでかくなっている。身長も体重も抜かれた。相変わらず、チビで身の軽い俺。最近<sup>さいきん</sup>は婆よりも口うるさい！

妹に見下ろされてたまるか！俺はセッセと牛乳を飲んだ。

ほんの僅かだが奴の胸の辺りも膨らんで見える。

俺達が中学生になると婆は羽を伸ばし、安心して遅くまで仕事に没頭<sup>ぼつとう</sup>した。

腹が減ると、我慢<sup>まんまん</sup>ができない奴が飯を作る。自然の法則だ。

我が家一、大食らいの兄貴<sup>あにいもうと</sup>が飯を作った。

女のレイラは全く、料理に興味<sup>きょうみ</sup>が無い。大丈夫か？

嫁に行ったらどうするんだ！気をもむのは俺だけだ。

兄貴も婆もそんなレイラを全く気にしていない。勿論<sup>もちろん</sup>、本人も……。

俺達は今話題の『ゆとり教育』を受けた年代だ。

土日<sup>にちようび</sup>が休み。授業時間が少ない。俺は最高の中学・高校生活を送った。

保護者である婆は「単価の高い授業料を納めた生徒達、学校のお得意さま」という。

「お前達、浪人するなよ、教科書が変わると入試<sup>きつ</sup>は厳しいぞ！」  
入試<sup>きつ</sup>を乗り越えた兄貴には脅<sup>おど</sup>されるが、俺には実感<sup>じつかん</sup>がない。

私立の中学は受験がある。受験して入ってきた外部進学組。

エスカレータの俺達は内部進学組。学力差があるのは当然だ。

中学では授業の進行速度も加速し、間違いなく落ちこぼれる予感が・・・。

婆はバリバリの技術者らしい。

仕事の話させると、目を輝かせて訳の判らない呪文を唱える。

俺はやばい話題から遠ざけたい場合を省けば、婆に仕事の話させない。

考えてみれば、兄貴もレイラも数学が得意だ。

俺は考える事が嫌いだ。数学は直感で答えを書く。

やっぱり、俺は我家の異端児なのか？

婆は女だてらにバイクに乗る。マシンを触ると大人しい。

ガレージにはスキー送迎用の車と一緒に数台のバイクが並ぶ。

夜中にガレージで音がするのでのぞくと・・・。

エンジンオイルの交換！エンジンプラグを磨く！バイクチェーンの調整！

工具を片手に油に汚れたつなぎ姿で子供の様に目を輝かせた婆を見る。

俺はガレージを「魔物の住む巣窟」と呼んだ。

感染力の強い婆のウィルスは兄貴にも感染し奴も魔物となった。

中学生になったレイラが魔の巣窟に出入りしていると知り、俺は愕然とした。

帰宅部のレイラは早く家に帰る。

私服に着替えて、俺の待つスイミングクラブに現れる。

放課後タイムを有効活用しに学校に通う俺は毎日がサッカー、テニス、バスケット忙しい。

当然、水泳クラブには学校から直行して汗を流す。

レイラは帰宅後の数時間で兄貴から洗脳せんのうされたらしい。  
家に俺が居ないので寂さびしかったのだろう。  
恐ろしい事にウィルスはレイラにも感染かんせんした。

兄貴は16歳でバイクの免許を取った。

学校では禁止だが、婆が取らせた。

理由は「大きくなった兄貴を後ろに乗せると重たい。」だった。

その代わり、婆は兄貴に「免許の事は誰にも知られるな!」と命じた。

自分が同行する時以外の単独走行を許さなかった。

兄貴は親友、教師にバイク免許の事は高校卒業まで隠かくしておした。  
俺も早く免許が欲しい。早く16歳になりたい。

休みには兄貴と婆の後ろに俺達が積まれてツーリングに出かける。

俺はバイクに乗ると眠くなる。バイクのエンジン音が眠気ねむけを誘う。  
婆は俺やレイラが体内に居る時期もバイク通勤つうきんした兵だ。

「普通、妊婦にんぶがバイクには乗らないだろう!」と尋ねたことがある。

「悪阻つわりが酷ひどくて、電車に乗れなかったから・・・」フーン!!

「何時まで乗っていたの?」

「兄貴の時は6ヶ月の終わりだけど、君達の時は5ヶ月!」

「気を使ってくれたんだ。俺達、双子だから!」

「いんや、お腹がタンクにつかえてハンドルに手が届かなくなったから・・・」

「バイクに乗るならスキーもやったの?」

「いや、スキー靴が履けなかった・・・お腹が邪魔じゃまで・・・」

冗談じゆたんの応酬おうじゆう、楽しい家族と思うだろうが、お互いに真面目まじめに会話している(念のため)

普通ではあり得ないが俺がバイクに乗ると眠くなる理由だ。胎教たいきょうつてやつだ!

小さい時はタンデム用に婆が手作りしたカンガルー袋で背負われバ

イクに積まれた。

袋に入れてタンDEMシート（後部座席）に乗せ、運転者にベルトで固定する仕組みだ。

アウトドアが好きな婆は俺達をキャンプに連れ出した。キャンプといっても便利な機材を持ち込む、ビツプなキャンプではない。

婆は俺達にサバイバル教育を行った。

石を積み上げて竈かまどをつくる方法。牛乳パックで薪まきに火を移すコツ。

飯盒飯はんごうめしの炊き方。山菜の名前、見分け方も覚えた。

溪流釣けいりゅうつりりで釣った魚を始末し、竹串に差して塩焼きにする方法も。

家では料理をしないレイラもサバイバルナイフを握り調理に加わる。俺達が中学生になる頃には設営せつえいも飯炊めしたきも一人前になっていた。

レイラがキャンプ場で俺を頼るのは夜のトイレだ。

「レオ、トイレに行く時は一緒に行こうね」と言われ、俺は付き合っただ。

レイラは婆や兄貴でなく、俺に声をかけた。

婆も自分が女だからトイレとシャワーなど設備のあるキャンプ場を選んだ。

大きくなってもしレイラは暗いトイレは怖こわかったらしい。俺は喜んで見張りに立った。

夏休みは兄が参加しないニュージランドキャンプに二人で参加した。婆えんせいが遠征の費用を出す条件は、夏休の課題を終わらせる事。当たり前前の事だが、これが厳きびしい。

一日のトレーニングが終わり、道具の手入れが終わるとクタクタだ。俺達は大人たちがビール片手に雑談するのを横目で見ながら課題を開く。

勉強道具を開いた途端とたんに猛烈もうれつな眠気おそが襲おそってくる。「明日やろう！」俺達や数人の学生は8月をレーシングキャンプで過ごす。

社会人は1週間から10日間の参加だ。

練習がオフの日はスタッフが観光地を案内する。

ニュージージーランドは火山があり、温泉がある。

日本と同じような地形だが、緑がずつと多く、人が少ない。

道路を羊の群れが横断すると、車は停まって羊の群れを見守る。

温泉では水着を着用する。外国では普通の話だ。

どうも、裸の付き合いは日本の温泉だけみたいだ。温水プールもある。

俺とレイラは愚かな大人を相手に水泳で勝負を挑んだ。

小学生時代から水泳を続けている成果で全種目、何でも来いだ。

アスリートは競争好き。俺達は何度もステークにありついた。

ニュージージーランドのキャンプでは色々な選手に知り合った。

俺達より上手な選手も多かったが、そうでない人も参加していた。

コーチよりも年上の小父さんにコースラインを相談されたことがある。

話をしている、小父さんの息子の方が俺より年上だと知った。

でも、聞かれれば俺は自分の考えと答えた。

スポーツの世界では年齢は関係ない。技量の序列だけだ。

俺達は小学生の頃から一人前の選手として扱われていた事に気が付いた。

年下の俺に丁寧な言葉でたずねる年長者に俺は敬語を使うように気をつけた。

冬になると俺たちはスキーシーズンに入る。

俺達の場合、学校所在県が違うので俺とレイラは別の県代表だ。

大きな大会になると、俺とレイラは所属県が違うから兄妹と知られない。

小学生時代とは変わり、男子と女子で試合日程が違うことも幸いだつた。

二分の一だった俺もレイラも、夫々が一人の選手だった。俺は全国

に友達ができた。

俺の学校もレイラの学校も中学と高校が合体している。

中高一貫教育と呼ばれている仕組みらしい。

俺達は中学の卒業式にはかろうじて出席できたが卒業礼拝そつぎょうらいはいは失礼した。

スキーの試合と重なったためだ。俺は担任の努力で高等部へと進学した。

命へのいのち」：「チョツとだけ、手伝って」(前書き)

初めて参加したボランティアキャンプ。

忘れられないアキラとの出会い。

世話をするつもりで教えられた、大切な出会い。

命の重さを知った俺とレイラだった。

命へのち」：「チョツとだけ、手伝って」

ゆとり教育で与えられた土日の休暇を俺達は有効に使っていた。アウトドアやツーリンク、旅行にもよく出かけた。

しかし、俺たちは遊んでいただけじゃない。それなりに人生経験を積む機会を得ていた。

俺達は教会がバックアップする障害児キャンプにボランティアで加わった。

戦力になる年齢に達したと判断した婆に連れられてスタッフとして参加するようになった。

婆も兄貴は参加経験があり、すでに重要なポジションだ。

俺やレイラは初心者で何も判らない。お荷物にならないように必死である。

キャンプといっても本物のアウトドアではない。自然に囲まれた研修施設などが使われる。

キャンプでは障害のある子供が親と離れて自然の中の生活を楽しむ。障害のある子供達に自然に触れ合う場を提供するキャンプだ。

少人数の学校の場合は実質上の修学旅行になるケースもある。

障害と一言で言っても、視力に障害のある子供達。

聴覚障害者、肢体不自由児、心身障害のある子供と障害の程度も内容もさまざまだ。

1回のキャンプには同じ種類の障害を持つ生徒や児童が集まる。

俺は聴覚障害のある中学生に外泊は初体験と聞き驚いた。

婆も兄貴も俺達も担当する役割は違うが、婆と兄貴は開催準備の仕事が多い。

俺とレイラは参加者の付き添いのサポートが割り当てられた。

参加者の多くは学校の先生に引率いんそつされて来るので、引率の先生を手伝いをする。

俺たちはキャンプに参加した子供達から沢山のことを教わった。

俺とレイラの通った保育園は合同保育ごうごうほいくを行っていた。

婆が保育園を選択した基準は二つ。

キリスト教保育と特色ある保育への取り組みだ。

俺は合同保育という言葉は随分ずいぶん後に覚えた。

合同保育とは、障害児しょうがいじと健常児けんじょうじと一緒に保育する取り組みだ。

当時の俺には何が障害なのかがよく判って居なかったように思う。

しかし、幼い俺でも仲良しだったタクは人と違うのが直ぐ判った。

足が無いのだ、手も短く、指の数も違う。

彼の病名が「四肢欠損症ししけつそんしょう」ということの後で知った。

俺はタクと気が合った。彼は活発で何でも一緒にやった。

タクは短い足でズルズルと良く走った。

運動会では彼だけがコースの半ばからスタートした。

それでもゴールに着くのは最後になった。

俺たちはタクがゴールに入るまで声をからして応援した。

クラスでは彼の特異とくいな個性こせいは直ぐに忘れられた。

彼にはチョツむすかと難しい事がある。という認識にんしきしか俺達には無かった。

給食も一緒に食べた。タクは絵の長い専用のスプーンせんようを器用きように使った。

タクがスプーンを落とすと、拾った子が洗いに行つて彼に渡した。

ごく自然のことだった。

手の短いタクにできないのはトイレの始末しまつ（パンツの上げ下げ）だけに見えた。

俺は知らなかったが、タクはどれだけの努力をしていたのだろう。

タクが俺と同じことをするために多くの訓練くんれんを受けていた事を後で知った。

俺達は障害者を区別して考えることをしなかった。婆に幼いころに言われた「チョツとだけ、手伝って」という言葉が少しわかった。

幼い俺達に障害について婆は個性だと説明した。

走るのが人より遅い人、目が悪くてメガネをかける人。

誰でも得意や不得意がある。長所も欠点もある。

欠点が普通の範囲を超えると障害があると言って皆で助けるの。

でも、普通かどうかと言うのは人が決めた事なの。

障害を持って生まれた人は選ばれた人なの。使命を持って生まれてきたの。

背が低くて届かなければ、背の高い人が手伝えばいい。

目が悪くてよく見えなければ、見える人が教えてあげればいい。

でも、頑張ればできることは自分でやらないと駄目なの。

少しずつ頑張れば、できることが少しずつ増えるの。

できないことは「チョツとだけ手伝って」後は本人がやればいいの。

婆は障害を個性だと言った。個性でも長所もあれば短所もある。

指が短い人も居る。指の足りないタクの目を引く身体も俺にとって

は個性だった。

婆は障害児キャンプでは俺達をスタッフとして厳しく扱った。当たり前前か！

障害のある子供達には常にスタッフが気を配る。

危険がないように、スタッフの気の緩みは事故に繋がる。

キャンプ参加者が到着する準備をするのは経験豊富なスタッフだ。

俺達は参加者が到着する前に障害者の支援方法の簡単な講習を受けた。

聴覚障害者とのコミュニケーションに手話は欠かせない。

しかし、急場は無理だ。覚えるのは簡単な挨拶だけだ。後は書けば

良い。

キャンプ参加者が視覚障害者の場合は誘導の方法。

肢体障害者の時は介助方法や車椅子の取り扱い。

普段は知ることの無い、知るべきことを俺たちはたくさん覚えた。

聾学校に通う聾唖の子供達から、俺は手話を習った。

全盲の児童と知り合い、点字を触った。これを読む、彼らの指先の感覚に舌を巻いた。

脳性麻痺の子供と一緒にトランプをしたが、彼らの記憶力のよさに驚いた。

失った機能を埋めるために彼らは他の機能を使った。とても器用だった。

院内学級の生徒が参加したキャンプは記憶に強く残った。

院内学級とは長期入院をする子供達が通う病院の中にある学校である。

参加人数は少なかったが、スタッフは緊張していた。婆は俺達を呼んで言った。

「今回の参加者は努力をしないと命を保てない子供達だからね」俺たちは介護がないと生活のできない子供達について教わった。

ベテランのスタッフや看護師のスタッフがそれぞれの児童を担当した。

俺とレイラはその補助を努める。事前の打ち合わせも難しい専門用語が飛び交う。

発作を起こす可能性のある子供達の場合は複数で担当し、決して目を離さない。

俺とレイラが付き添ったのはアキラという小学生だった。来年は中学と聞いて驚いた。体が小さく小学校低学年にしか見えな

い。俺も、小さい事にかけては自信があるが、確実に負けている。

アキラはきらきらと光る目で俺達を見つめ、色々な事をたずねた。

俺は当時、高校生でだったが、自然科学に関する彼の質問は高度だ

った。

恥ずかしい話だが、俺には答えられない質問が多くレイラに助けを求めた。

理系のレイラとは意気投合し、二人で会話を楽しんでいた。

色白のアキラの頬が少し赤くなり、彼は一生懸命、持論を語り続けた。

彼の声が突然、途切れ、水から出た金魚のようにパクパク喘いだ。

自分で胸を叩きながら、喘ぎ苦しむアキラを目にして俺たちの時が停まった。

「レイラ、先生呼んで来い！」俺はレイラを走らせアキラを抱いて床に寝かせた。

気道を確保しなくては・・・俺は水泳の救急指導で習った気道確保の姿勢をとらせた。

水谷医師がレイラと一緒に走って現れた。

アキラの車椅子に積まれた機器を操作して彼の鼻にチューブを入れた。

ゲフッゲフツと小さく咳き込んだのと、ガルガルズズズズという機械音がした。

フウ、アキラが肩で息をした。

「ごめんなさい、驚かせて・・・」苦しい息の下からアキラが言った。

「いや、謝らなきゃいけないのは僕らだよ、ゴメン、直ぐに楽にして上げられなくて」

話に夢中になったアキラがうまく痰を出せずに窒息しかかったのだ。アキラをベットに休ませ、水谷医師から状況の説明を聞いた。

「目を離さないで、何か様子が変わったら直ぐに知らせてね」担当ナースからは言われていた。

様子が変わるって・・・生死を分ける変わり方じゃないか！

俺は担当ナースに文句を言おうと探した。そこでまた、俺の未熟さを知ることになる。

「この子達は毎日が戦いなの！頑張らないと生きていられないの、一時も油断できないの」  
「ナスから言われ、俺の胸は張り裂けそうだった。こんなに素直ない子達が、小さな体で毎日戦っている。俺は生きている事に感謝するなど考えもせず、不満をいい、自由気ままを求めている。」  
レイラが俺の肩に顔を伏せた。肩が生ぬるく濡れている。  
「レイラ、泣くな。子供達に笑顔を見せろ、俺達にできるのは楽しい時間を作る事」

俺たちは彼らが喜ぶことを真剣に考えた。

「僕、家の外で星が見たい」アキラが言った。

「見た事無いの？」「家の窓から何時もみているよ！」

「今夜、見ようか？天気が良かったら」「本当に見に行くの？外で見るの？」

「先生に頼んでみるから！」「きつと、駄目って言うよ！」

俺達の会話を聞いていた医師が笑いながら近づいてきた。

「駄目！って言おうかなあ」「えっ、先生、聞いてたの？意地悪だなあ」

「ちゃんと、安静時間を取って調子が良ければ良いよ。天気も味方すればね！」

アキラの喜びようは半端じゃなかった。俺とレイラは星空が見える事を祈った。

夜、約束どおりにアキラを施設の外に連れだした。

「うわー、凄く沢山、星だらけだね」空を見上げたアキラが感激している。

「あれがアルタイル、こつちがベガ、七夕の話は知っているだろ！」理科の苦手な俺も何故か星座は詳しい。アウトドアの実績がこのよくな形で出ようとは……。

「小さい時に本当に彦星が天の川を渡って織姫星に近づくって兄貴に騙されたよなあ！」

「ウン、レオと私と二人で何時、動くのか夜中まで見ていたよね」「あはは、本当に動くところ見られたの？」アキラはニヤニヤしている。

「いや、ベランダで二人で眠っちゃった」「後でおにいちゃん叱られたみたい」

3人で声を上げて笑う。

「明日はゲームがあるから、ソロソロ、休もうか？」

明日のお楽しみがあるから無理はできない。

アキラも満足したのか頷いた。

俺達が戻るのを水谷先生がベランダで見っていた。レイラに突かれて気が付いた。

先生はずつと見守ってくれたんだ。先生の優しさに感激した。

次の日は晴天だった。

車椅子で『後ろの正面だ〜れ』など、ゲームを楽しむ。

「鬼ごっこしたい」とサキコが言い出した。アキラは寂しそうに横を向いた。

自力で少しでも走れる子は動きたいのだ。病院ではなく、自然の中で……。

俺は水谷医師に許可を仰いだ。

顔色が変わったり呼吸が乱れたら直ぐに連れて来るよう言われ交渉成立。

俺はアキラを抱き上げた。驚くアキラに、「さあ、逃げるからつかまってるよ」

アキラを抱いて俺は走った。ひどく揺れない様に気遣いながら……。

「キヤー」鬼につかまりそうになり、身をかわすと、アキラが歓声を上げる。

アキラを抱きしめ、走りながら俺は涙が出そうだ。

軽いのだ、アキラが……。幼児を抱いているようだ。

看護師の三輪さんに松井先生が捕まり、鬼になった。

松井先生は女の子ばかりを追いかけている。

それでも俺はアキラと走った。アキラが俺の胸に顔を付けた。

「苦しいの？」俺は慌てて停まった。

「違う、嬉しいんだ。僕、生まれて初めて走ったの！」アキラの目に涙が溢れた。

そうか、走った事なかったんだ。

俺は走った事が無い子が世の中に居る事を、知らずに今日まで生きてきた。

俺は無性に恥ずかしかった。

お別れの時が来た。

迎えに来た両親に「あのねえ！僕ね、走ったんだよ」アキラが頬を染めて報告している。

何を言われたのか、戸惑っていたお母さんだったが、事情を知ると目から涙がこぼれた。

「ありがとうございました。この子にとって素晴らしい思い出ができました」

お父さんに挨拶されると、身の置き所が無いほど、恥ずかしかった。俺たちは健康を当たり前だと思い、感謝した事も無かった。

俺はアキラから多くのことを教わった。



## 美人の妹を持つ兄の宿命（前書き）

高校生になった俺はやっとレイラより背が高くなった。

俺はフットサルのチームをつくり熱中した。妹のレイラは水泳を辞めて習い事を始めたらしい。

妹の短いスカートも気になるが・・・美人の妹を誰にも見せたくない気分だ。

## 美人の妹を持つ兄の宿命

俺の高校生活は順調だった。勉強を省けば……。  
バスケット部に混ざって練習試合に参加し、水泳部には勝負を挑んだ。

サッカーはパスだが、フットサルのチームを作り、試合では活躍した。

夏休みは南半球のニュージーランドでレーシングキャンプに参加し、国際大会にも出場した。

俺もレイラもスキーで、全国ランキングに入っていた。

インターハイも冬季国体も出場するのが当然だと思っていた。

一貫教育の中高では高校生になっても変化が少ない。

一つ、違うのは……中学の時は黙っていても進級できたのだが……。

高校では留年という仕組みがある。単位制の高校では3科目落とすと留年する。

5段階評価の『1』という数字があると、その科目は単位が取れない。

3学期に学校に行かない俺としては年度末の成績がもっか、不安の種類である。

高校生になって、スイミングスクールを辞めた。

兄貴のナオは俺達に付き合っ、高3の夏まで続けていた。国大受験組の癖に……。

奴は流石に夏休のニュージーランドキャンプは参加しなかったが、正月は……。

「勉強も正月ぐらいは休まなきゃ！」とクリスマスから正月を山で過ごし、そのまま県大会に優勝。

冬のインターハイや国体に出場して、国大にも合格するという快挙を遂げた伝説の人だ。  
私立の学校では転校、転入がない。同時に教師も移動がない。  
・・・という事は、兄貴も俺も同じ先生に教わることになる。  
俺は小学校の時から、心無い教師から「君のお兄さんは・・・」と言われた。  
これだけ兄貴を引き合いに出されて、よくも不良にならずに素直に育つてものだ。

俺も暇があれば毎日、シャワー代わりに水泳を続けても良いのだから・・・。  
フットサルの練習をナイターコースに切り替えたい。  
夕方は餓鬼が多くて、煩い。大人と勝負がしたい。

レイラも年頃になり、セットが気になる。髪を濡らすのが嫌だと言  
い出した。

俺もレイラの水着姿をあまり同年代の男共には見せたくない。  
高校進学とともに俺たちは9年間も毎日通った水泳を引退した。

レイラは日本文化に触れるとか、別の習い事を始めたらしいが、俺  
はフットサルに熱中した。

俺たちのチームは草大会で優勝するレベルになっていた。  
毎日の放課後に、俺は水泳ではなくフットサルに通うようになった。  
社会人が多いのでクラブハウスにはシャワールームも完備されてい  
る。

高校生になると急に俺の身長がぐんぐん伸びた。  
あつという間にレイラを抜き、兄貴に迫る勢いだ。  
流石にレイラは体つきも女らしくなり、俺でもまぶしいと思う時が  
ある。

レイラの通う学校は女子校だが、俺は共学だ。

服装には煩い女子高なのにレイラのスカートはあまりに短い。

当然、俺は兄貴として注意をうながした。

素直な？妹は部屋に入り、制服を着えたのか直ぐに現れた。

「このくらい長ければいいの？これ以上長いとスケ番みたい！」

うん、レトロ感の漂うスタイルである。長いスカートは芋臭い。

「いや、やっぱりさっきのほうが良い」

レイラは俺の前でするとスカートを巻き込み短くした。

何と言う早業。どういう仕組みなんだ？驚く俺にレイラが言った。

「校内では長くしていないと服装検査で叱られるけど、往復はこっ

じやなきゃ！恥ずかしいでしょ！」

「でも、気をつけないと階段で覗かれるぞ！」

「レオ、見て！」レイラがいきなりスカートをひらめかして回った。

「バカ！やめろ！」

「わあ〜！レオったら赤くなって、純情！！ちゃんと履いてます！

残念でした！」

俺は知らなかったが、見せるためのパンツがあるらしい！アホクサ

！！

俺のクラスは男女比がほぼ同じだが、女を扱うのはめんどくさい。

妹がいるからといって、女の子の扱いが上手いわけではない。

どうも、女子の考えている事は理解しにくい。

しかし、判っている事は一つ。一人を敵にするとクラスの女子全員

が敵になる。

クラスで妙な噂が流れたらしい。俺が美人の彼女とデートしていたんだと！

「小柳君、彼女が居るんでしょ！」クラスの女、数人に囲まれた。

「ウン、沢山いるけど・・・」「ふざけないでよ！どこの高校生？」

「えっ、それぞれ違うけど・・・何番目の彼女の高校を知りたいの？」  
「俺は誰と一緒にいたところを見られたんだろう。何時なんだ？」

「よくよく、聞きだしてみると・・・俺の彼女は藤沢学院のA子（本人の為に本名は控える）らしい。」

「スキーの試合に行き、A子を迎えに来た車に、帰り道は乗せてもらった。」

「試合が遠方になるうえに荷物が多い、スキー仲間ではよくある話だ。お互いに送迎時に乗せたり、乗せてもらったり、助け合っている。」

「あの時、車中に帽子を忘れ、A子に横浜まで届けてもらった。」

「あゝ、アイツか！美人だろ！」

「事情を説明するのも面倒だ。A子には気の毒だが、噂は聞こえないだろう。」

「クラスの女子はぶいっと不機嫌に立ち去った。」

「無視すると怖い、相手をして機嫌が悪いんじゃ、どうすればいいんだ？」

「女子も面倒だが、クラスの男達が最近、レイラのことを聞きたがる。」

「美人なんだろ、お前の妹！」

「いや、俺に似てるから（もちろん美人さ）・・・、ところで明日の試合だけど・・・」

「俺はさりげなく話題をそらす。お前達には絶対に紹介しないぞ！」

「レイラは兄の欲目抜きで美人だ。きっと、もてると思うのだが・・・」

「本人は、「だって、外で調達しなくても、兄貴で間に合うから・・・」

「俺は間に合わせか？・・・まあ、虫が付くより良いか・・・」

「兄貴に週末、コンサートに誘われたんだ！」「ええっ！俺は聞い

ていないぞ！」

「だって、レオはクラシック苦手でしょ！」

確かに、兄貴のナオもレイラも幼い時からピアノを習っていた。

俺もレイラと一緒にレッスンに通ったが、直ぐに飽きてレッスンを放棄した。

レイラと一緒にレッスンには行く。ともかくピアノの前に座つていられない。

早々に逃げ出して、レイラのレッスンを見ているうちに夢の世界に……。

兄貴もレイラも楽器が好きだ。ピアノだけではなく笛やトロンボーンも鳴らす。

二人とも絵を描くのも好きで、二人で休日に美術館にでかけたりするらしい。

俺は付き合っても、科学技術館や科学博物館ぐらいだ。

だいたい、土日はフットサルが忙しい。俺は社会人との試合に明け暮れていた。

夜の練習が早く終わり、9時半過ぎに家に帰ると誰もいない。

自分が遅くなる時は気にしない癖に、レイラの帰宅の遅いのが気になる。

携帯メールをうつと、直ぐにレスが返ってきた。

『もう直ぐ、駅に着く』

俺はランニングがてら駅まで走ることにした。

一人で家に居ても手持ち無沙汰だし、妙にレイラのがことが気になる。

家までは駅から1キロ弱の距離だが、商店街とは逆側で住宅地だ。夜になると静かで人通りが少ない。

たっ、たっ、たっ、おれは気持ちよく走り続けた。

直線コースのはるか向こうにレイラらしき姿を発見した。

物陰から男がレイラに近づく……というより、行く手を遮ぎる。

様子がおかしい！俺は全力疾走に切替えた。

男がレイラに抱きつこうとした。チキシヨウ！何者だ！今、助けてやる！！

・・・と次の瞬間、男が宙を舞った。

何が起こったのだ？駆けつけた俺は道路に倒れた男を更に押さえ込んだ。

息が切れているが、どさくさにまぎれて2、3発、パンチをくれてやる。

「ひゃひゃ110（百十番）だ！」息が切れて、声にならない。

レイラが携帯で警察に通報する。

「大丈夫か？」「ウン」答えるレイラの声が震えている。

直ぐにサイレンが聞こえ、パトカーが現れた・・・。

「署でお話を聞かせてください。」

俺たちは容疑者とは違う、2台目のパトカーに乗り警察に向かった。これじゃあ、俺達が補導されたみたいだ。

俺は思わず周囲を見回した。

閑静な住宅地、サイレンが聞こえても誰も様子を見に出てこない。

「一緒に歩いていて襲われたんですか？」

「いや、俺は妹を迎えに来て、現場に出くわして・・・」

「お手柄でしたね。お兄さん！」

「・・・そうゆう訳では・・・」

警察でレイラと俺はいきさつを聞かれた。事情聴取という奴だ。

「学校帰りとしては、遅い時間ですが、どこからの帰りですか？」

「習い事をしているので・・・」

「何を習っているの？」

「合気道です。」なにいろ！！聞いてないぞ！

抱きつこうとして男はレイラに投げられたわけか！

メモを取っていた警官達は手を止めて、大いに盛り上がっている。

男を調べていた警官から聞いたところ、物取りではなく、痴漢らし

い。  
痴漢を働こうとして投げられた間抜けな奴。  
投げられた容疑者が気の毒だと！  
ふざけるな！大事な妹になんてことをするんだ。許せない！

「被害が無くてなによりです。静かな道だから、気をつけてください  
いね」

俺たちは迎えに現れた婆に引き渡された。

「いや、あ、勇敢なお嬢さんで・・・」

警官が婆にまでレイラの活躍を報告している。

「武道も、日本女性のたしなみですから・・・」婆は平然と答えた。

帰りの車の中で、レイラが俺の手を握った。

震えている。俺が肩を抱くと俺に寄りかかって肩に顔を埋めた。

肩がしつとりと濡れるのが判った。

「遅い時間に一人で歩くのは、やめた方が良いわね。」

バックミラーでレイラの姿を見ていた、お袋が言った。

「レオが来てくれたから・・・」

レイラが俺にしがみついてしゃくりあげた。

「レオ、助かったわ、レイラ一人だったら危なかったわ。本当にあ

りがとう。

反射的に投げちゃったみたいだけど、その後、立ちすくんで動けな

かったでしよう？」

婆に言われて俺も気が付いた。

レイラが男を投げた事だけに気を取られていたが、妹は動転して  
いた。

確かにその後、逃げる事もできず、助けを呼ぶこともできなかった  
レイラ。

迎えにいった良かった。俺はかけがえの無い妹の震える肩を抱いた。

レイラは水泳をやめてから、クラシックバレエを習おうと考えたらしい。

しかし、バレエを始めるのは年齢的に遅い。

お袋に勧められて武道を試してみたのだという。

お陰で助かったのだが、俺は何も聞いていない。俺に内緒で・・・俺だけか、と思ったらナオも知らなかった。ホッ！！

ショックだったのかレイラは食事も殆ど取らずに部屋に引き上げた。何時もにぎやかなレイラが無口になると、家中が火の消えたみたい寂しい。

兄貴も俺も今回の事件はショックだった。

一番ショックなのは勿論、レイラだろう。何時も音楽が流れている部屋から、物音も聞こえない。

お袋と相談して、レイラの帰りが遅い日は誰かが待ち合わせる事にした。

俺達が遅い時はお袋が車で拾うという。レイラから帰宅時は全員にメールさせよう。

美人の妹を持つと大変だ。

しかし、かけがえの無いかわいい妹だ。兄貴として、守ってやらなくっては・・・。

そのうちにレイラもボーイフレンドを連れて来るのだろうか？

何時か知らない男を好きになるのだろうか？許せん！ぶん殴ってやる。

将来、妹が恋をするのかと考えただけで、切ない。

世の中の父親達の気持ちがチョツと判った気がする。

初恋：チヨツと大人になった俺（前書き）

同じクラスに居たことも気付かなかった大人しい女子。

チヨツとしたことで、言葉を交わすようになった。

妹レイラは俺を鈍感だというが・・・俺には女子の考えている事は予想もつかない。チヨツと大人になった俺達

## 初恋：チヨツと大人になった俺

案の定、高一の3学期は悲惨<sup>ひざん</sup>だった。

高校生になると試合数が増える。

競技<sup>きぎょうぎ</sup>スキーの場合はほとんどの試合が1〜3月に集中する。

正月の県予選から始まって、関東大会、インターハイ、国体と大きな試合が連続する。

一月に数回の試合が連続<sup>れんぞく</sup>するが、試合と事前練習を回ると家に戻<sup>もど</sup>る暇<sup>ひま</sup>は無い。

俺は身が軽いから、他県から試合に招待<sup>しょうたい</sup>されると素直<sup>すなお</sup>に喜んで飛んでいく。

北海道、青森、秋田、山形・・・北国の試合に妹レイラと二人で出場した。

高校生になると兄貴やお袋<sup>ぶくろ</sup>が試合に同行する回数が減る。

手配だけはお袋がしてくれるが、新幹線や飛行機で二人で現地に入るケースが増える。

レイラのレースでは俺がコーチ<sup>つと</sup>を務め、俺の試合ではレイラがコーチだ。

公式レースの場合、男女で試合の日程が違つ。

ちよつと忙しい<sup>いそが</sup>が、お互いに協力すれば相手のコーチ役も無理ではない。

インターハイが終わり、冬季国体に移動した。国体が終わって戻ると2月も終わりだ。

勿論、3学期の登校は殆ど<sup>ほとん</sup>無い、授業を受けたのは数日だ。

スキーでは全国大会に出場して、高一としてはまずまずの成績だった。

中1の時、体の小さな俺は「大人と子供の試合だね」とよくからかわれた。

高校になると3歳の違いは、背丈ではあまり変わらない。しかし、高3の中にはコーチか先生かと思うような、オヤジまがいの選手も居る。

中学ほどではないがやはり一年生にとって、3年生との勝負は厳しい。

特に軽量の俺としては辛いものがある。

・・・と言ってもスキーで体重の影響が大きいと理解したのはつい最近だから自慢にはならない。

「レオ、体重勝負と気付かずに戦っていたの？」とレイラに馬鹿にされた。

「ハイハイ、どうせ俺は物理は苦手です。数学も・・・」

「でもね、レオ！体重が重いほうが早いって事、小学生でも知ってるよ！」

「だって、ニュートンさんは重さに関係なく落ちる速さは同じだって・・・」

「違うよ、レオ、斜面をスキーで降りるのだから摩擦を無視しても、力は二方向に分解されて・・・」

紙を取り出し、図を書こうとしたレイラを、俺は静止した。聞いても無駄だ。

奴は物理が得意かも知れないが、俺は数学や物理には近寄りたくないタイプだ。

レイラのように計算してコースを取って滑るようなことはできない。俺は体の反応に素直に従う。多少は頭も使うけど・・・。

冬季国体が終わると2月も末になっていた。

久しぶりに学校に行ってみると、案の定、俺は浦島太郎になっていった。

授業で教科書を開いても、全く話が判らない。開いた事のないペー

ジが数ミリの厚さになる。  
ヤバイ！来週の試験に間に合うはずが無い。試験範囲も分からない。  
3教科以上の単位を落とすと落第する。俺は青くなつた。  
ダチからノートを借りるにも試験前になつているから書き写す暇が無い。  
試合に行つて夜になると教科書を開いていたレイラの姿を思い出し、後悔するがもう遅い。

放課後、担任に呼び出され、たまりに溜まつたプリントを手渡された。  
試験前で部活も休みなので皆、帰りが早い。教室には誰も残っていない。  
ノート借用を頼もうと思つていたのに気の利かない先生だ。

答えの書いていないプリントを山ほど受け取つたつて、今更どうしろというのだ。  
担任だったら回答も書いておいてくれ！  
置いてきぼりを食らつて、静まり返つた玄関で上履きを履き替えた。

「小柳君！」

「あゝびっくりした、山崎、まだ居たのか？」

薄暗い玄関でイキナリ声を掛けられて俺は驚いた。クラスの山崎ヒマワリである。

ヒマワリという花が持つイメージとはちがい、クラスでもあまり目立たない、静かな女の子だ。

スポーツ関係の話題が多い俺は、部活に熱中する女子とは話があうのでよく喋る。

ヒマワリとはあまり話したことが無い。俺だけでなくクラスの男子、誰もがおなじだろう。

「びっくりさせてごめんなさい。これ！」と俺に紙袋を押し付けた。  
「これって・・・？」声をかける隙も与えず、ヒマワリは走り去つ

た。  
俺はちよつと戸惑って彼女の後ろ姿を見ていたが、紙袋をそのまま靴に放り込んだ。

家に帰り、紙袋を靴から取り出したが、空腹を解消するほうが優先だった。

冷蔵庫をあさり、チキンを発見した。電子レンジと戯れているとレイラが現れた。

「レオ、何これ！」目ざとく、紙袋を発見する。  
綺麗な色の紙袋だ、奴の目に付くのは仕方ない。

「フン、ホレ・・・女子に貰った」チキンをかじりながら答える。

「で・・・中身はなに？」

「未だ見ていない」

「うそ〜！普通、先に開けるよ。チキンをかじる前に・・・」

「だって、腹へって死にそう！」

俺は仕方なく、食べかけのチキンを皿に置き、袋を逆さに振った。テーブルの上に中身がバラけて飛び出した。

中からは大量のコピー用紙とピンクの包みが転がり出た。

「乱暴なんだから・・・」といいながら、レイラはコピー用紙を集め、ピンクの包みを俺によこした。

ピンクの包みを開くと中身は小箱に入ったチョコレートだ。

「これやる！」

「レオったら、何を考えているの？」俺はレイラに睨み付けられた。

レイラの好物のチョコレートが入っていたからやったのに、何を怒られてるんだ俺は・・・？

「レオ、これってバレンタインのプレゼントだよ！鈍感なんだから・・・。バレンタイン！知ってる？」

「馬鹿にするなよ！俺だってそのくらい知ってるさ、この前、ゲレ

ンデでチョコレートを配ってただろ！」

「だいたい、2月はスキーで忙しくて、バレンタインデーを下界で過ごした事がない。」

「毎年、お前と一緒に居るだろうが・・・ブツブツ。」

「レオ、このコピー見て！凄いよ！」

レイラに言われて、コピーを見ると、授業中のノートのコピーが揃っている。

「あいつ、おれにノートのコピーをくれたんだ。」

「凄いね！丁寧にまとめてあるよ！ここのところなんか・・・」

俺はレイラからコピーをもぎ取るとチョコと一緒に部屋に逃げ込んだ。

ヒマワリのコピーを見ると、確かに丁寧に作ってある。

自分のノートをコピーして、蛍光マーカーで印を付け、更に鉛筆の書き込みもある。

ノートと教科書のページが一致するように後で、ページも書き込んだらしい。

「どうやら、期末試験の範囲が全て揃っているようだ。」

「サンキュー、ヒマワリ！」

俺はヒマワリのコピーをありがたく利用させてもらうことにした。

正直なところ、ヒマワリのノートが無ければ留年確定、お先、真っ

暗だ。

試験前はヒマワリのノート内容を教科書と照らし合わせ、確認するので精一杯だった。

終わってみると、ヒマワリのノートが試験範囲の要点を上手にまとめてあった事が分かった。

結果は判らないが、とりあえず、試験は終了だ。

ざっと思い返すと、数学がヤバイ、数1、数A共に点数が取れていない。不安だ。

国語は得意科目だと手を抜いたのが災いして古文が危ない。大体、今回の試験では漢文が全範囲になっていた。3学期になって習った漢文を俺がわかるはずがないのである。俺にとっては初めて見る漢文だ。手も足もでない。ヒマワリのノートで一夜漬ける予定が、睡魔に勝てず・・・完敗である。過ぎた事は仕方ない、即、気持ちを切り替える事もアスリートの適性条件である。

試験修了の翌日は1日寝ている予定だった。

俺は早々と電話のベルで起こされた。

一度は無視しようと布団を被ったのだが執拗にベルが鳴り続ける。

時計を見ると、まだ、11時過ぎ、昼前である。

「ファイ！」俺の声は非常に不機嫌だ。

「港町東駅ですが、小柳レイラさんのお宅ですか？」隣の駅から何の用事だ？

「レイラは俺の妹ですが、何か？」定期でも落としたかドジな奴（心の声）

「レイラさんが車内で気分が悪くならね、駅で保護しています。迎えに来ていただけますか？」

「はい！」俺の眠気はすっ飛んだ！

お袋にも兄貴にも電話が通じない。とりあえず、迎えに行くことをメールする。

俺はお袋から非常用資金と言われている袋から金を取り出し、ポケットにねじ込んだ。

チャリで駅に向う。この時間だと電車が少ないから近道をチャリで走る方が早く着く。

チャリは駐輪場に置いておけばよい。

俺が息を切らせて駅に着くと、レイラは駅長室のソファに寝かさ

れていた。  
睡眠不足と疲れで貧血を起こしたらしい。レイラの顔色は真っ白だ、  
血の気が無い。

電車の中で気分が悪くなり、ホームに下りて座り込んだところを保護された。

確か、レイラは今日まで期末試験だと言っていた。

昨日は晩御飯にも下りて来ないで、部屋に閉じこもり、勉強していた。  
ひよっとすると全く寝ていないかも。

俺は「早く家に帰って休みたい」というレイラを抱えるようにして支えて駅を出た。

急行停車駅でないので何時も使う駅のようにタクシー乗り場が無い。「一寸、待っていられるか？」レイラの体重は半分を俺が支えている。

手を離すと座り込んでしまいそうだ。

しまった、先にタクシーを停めてから連れ出せば良かった。

高校の制服を着た女の子を若い男が抱えているのだから目立たない方が無理。

遠巻きに様子を伺う、買い物らしき主婦達がいる。しょうがない助けてもらおう。

心を決めて、見回すと……。

「あっ、ヒマワリ！」

「どうしたの？大丈夫、その方は……？」

「ワリイ、タクシーを停めてくれない」

「ウン」

ヒマワリは駅前のロータリーの先の広い道まで走っていった。  
通りかかったタクシーを止め、こちらに誘導してくれる。

「助かった、ありがとう。」

俺はヒマワリに礼を言い、レイラを車に押し込んだ。  
「じゃ!」「気をつけて」

家に連れ帰ったレイラをベットに座らせ、着替えている間に俺は特性のココアを作った。

「ああ、美味しい」レイラは俺の特性バター入りココアを両手で抱えて飲み干した。

ベットに横になったレイラは間もなく寝息を立て始めた。

ふと見るとレイラの制服が椅子に置いてある。

何時もは俺が脱ぎ捨てた制服まで俺の部屋に来てハンガーに掛けているレイラだ。

よほど辛いのだろう。俺は初めてレイラの制服を手に取り、ハンガーに掛けた。

レイラを一人しておくのも心配だった。

俺は自分用にコーヒーをいれ、レイラの部屋に戻った。

お袋と兄貴には携帯メールで様子を知らせた。

レイラの寝顔を見ているうちに俺もベットに寄りかかって眠り込んでしまったらしい。

「レオ、風邪ひくよ、レオったら!」レイラに起こされて気が付くと18時だ。

「どうだ、気分は?」「もう、大丈夫、ゴメン、心配させて!」

「良かった。」

「私、お腹が空いた」

「ハイハイ、お姫様、何をお持ちしましょうか?」

「もう、レオったら、自分で作るよ。大丈夫だから!」

俺達はキッチンに下りて、冷蔵庫を開いた。

俺が特性チャーハンを作っている間にレイラがワカメスープを作った。

「ねえ!これって昼ごはん?夕食?」レイラがたずねた。俺には今

日初めての飯だ。

「夕食かな？婆が帰ったら晩御飯を食べよう」

俺のメールを見て、お袋も兄貴も普段より早く帰宅した。

お袋は駅にお礼に寄って来たらしい。

兄貴は俺が置き去りにしたチャリに乗って帰ってきた。

食事の時にレイラが珍しく叱られて、いや、注意を受けている。

「レイラ、気をつけないとホームから落ちたりしたら新聞に載るぞ

！」と兄貴！

「頑張るのは良いけど、食事はキッチンと取らないと体に良くないわよ。」

特に女性の場合は体調の変化が大きいから「お袋がやんわりと注意する。」

「それって、生理のことか？」思わず余計な事を口走った。

「バカ、レオの馬鹿、無神経！！」俺はレイラに睨み付けられた。

「レオ、お前、ご婦人方の前でそのような単語を話題にするとヒンシユクをかうぞ！」

兄貴にまで叱責される。

「そうね。広い意味ではレオの言う生理で正しいのよ。」

大人の女性の場合は一ヶ月の中でホルモンバランスが変わって体調が変化するの。

人間の摂理ね。子供を生むための準備は中学生ぐらいから始まるけど、最初は不安定なのよ。」

大人になると安定するのだけど・・・。」

婆がホローした。

いつの間にか俺が叱られている。

まあ、良いか！レイラより俺の方が叱られ慣れている。

若いレイラは次の日には元気になっていた。

俺達は予定通り、群馬県の選手権に出場するべく移動した。

試合が終わり、登校日に玄関の近くでヒマワリに会った。

「この前はありがとう」

しまった、レイラにバレンタインのお返しを準備するように言われて忘れていた。

群馬で土産を買うつもりだったのに……。

「これ、やるよ！」咄嗟なげに俺が取り出したのは胸ポケットに入っていたボールペンだ。

「書きやすいんだ！これ！」駅前の英語教室せんでんで宣伝せいでんに貰った物だ。教室の名前が印刷されている。でも、書きやすいのは嘘うそでない。

「あ、ありがとう」

お礼など入れられる様なものではない……言葉を捜さがしていると……。

「小柳、やばいぞ！」とダチに声を掛けられた。

呼び出しが張り出されたらしい。皆と走って、掲示けいじを見に行った。

「以下のもの本日、H3-1教室に13時に集合する事」

と書かれた下に名前が並ぶ。俺達のクラスでは8名の代表者の名前が書かれている。

俺の名前があることをしつかり、確認し、近くにヒマワリの名前が並ぶのを見つけた。

驚おどろいた。何でヒマワリの名前があるんだ?!?!どうしたんだ?

見回すと、ヒマワリが少しはなれたところで一人、うつむいている。声を掛けようか一寸ちよつとだけ迷ったが、声を掛ければかえって注目を浴あびると考え直した。

いずれにしても呼び出された者は基準以下の赤点があるということだ。

単位の取り直しか、補講か？追試か？最悪の場合は留年じゆねん（落第らくだい）である。

すっかり、ブルーになった俺は食欲じしょくも無くなった。

学校の食堂でラーメンと焼肉定食を食べて13時の運命の時を待た。

(補足説明：食欲が無いから何時もの大盛を注文していない)

すっかりブルーに染まった俺たちは卒業して使われなくなった3年の教室に集合した。

ヒマワリが一番後ろの隅の席に座っている。俺は一つ席を空けて同じ最後列に座った。

学年主任と教頭、全クラスの担任、学科担当の教師が全員集合した。教頭が今年の一年生は張り出された人数が多いと嘆いている。

例年よりも出題の難易度が高かったのか？ゆとり教育で学力が低下しているのか・・・？

教科毎にレポート、補講、追試、最履修と試験結果により指示があると説明された。

つまり、補講としておまけの授業を受ける。追試としてもう一度、試験を受けさせてくれる。

最高の特典として、来年、もう一年間の授業が受けられる。と言う得点が俺達に与えられる。

「細かい話は後で聞くから、早く、結果を教えてください！」

俺達は同じ思いで長々と続く説明を聞かされた。

そして、一人ずつ、封筒が手渡される。

ゲゲツ！やっぱり。最悪だ。

数1、数A、古文と3教科が封筒の中から出てきた。

落第するかも・・・！？血の気が引くのが判る。

俺は教員のコメントを一つずつ読み始めた。

手元を本やノートで隠して読んでいる奴も多いが、気にした事ではない。

俺は堂々と資料と回答用紙を広げた。

まず、古文である。

教師のコメント欄らんに一年を通して古文は比較的理解ひかくてきりかいできているが漢文ぶんが全くできていない。

課題かだいを提出ていしゅつし、追試を受けるように書かれている。

だいたい、漢文かんぶんは3学期に初めて習っているのに殺生せつせいである。

万一、一度も授業を受けなかった俺が満点を取ったら先生が困るのではないか？

待てよ！この文章を読む限りまだ、単位を落としたわけではない。追試の結果で決まるわけだ。

そして、数学はダブルである。

数1は補講ほこうと追試。数Aは課題の提出と追試である。

よく見ると、数学の補講は今日から3日間。

今日からだつて！教科書も持って来ていない。

明日、明後日と試験休みを返上して午前中9時から12時半まで補講があり、午後は自習である。

3教科とも試験は終業式の前日、嘘うそだろう！

3学期なので一年間の集約として成績が出されている。

全教科が審査対象しんさとなるのだが、一科目だけ引っかけた奴やつは何人いるのだ？

最多では5科目で赤点を取った、豪傑ごうけつが2人いると説明があった。

今までの先輩方も、5科目で赤点を取って、追試で合格した前例がないという。

数学の補講と国語の補講があるが、両方落とした奴は、好きなほうに出れば良い。

早い話が一方は諦あきらめて来年、再さいチャレンジしろと言う事か！

3科目全てに本気で取り組むべきか？一科目を捨てるべきか悩なやまし

「い。  
二兎を追うなということわざがあるのに、三兎を追って大丈夫なの  
か???'」  
試合の場合でも条件が悪いと回転競技を捨てて、大回転だけに掛ける  
事もある。」

数学の補講を受けに俺は教室を異動した。  
振り返るとヒマワリが後ろから付いてくる。

「お前も数学を落としたのか?」

「うん」

「お前のノート、良くまとめてあったのに……。」

「駄目なの数学、3学期は必死でノートを書いたから少し、点数が  
あったけど……。」

普段なら直ぐに眠くなる数学の補習を俺は本気で聞いた。

午前中に数1を受けた午後は自習と称して先生に数Aを聞きに言っ  
た。

数1の連立方程式は勘の良い俺は何とかなる。

参ったのは3学期に習ったという三角関数だ。

一度だけ授業に出たが何の話をしているのか全く理解ができなかつ  
た。

試験が終わってから補講を受けて、やっと少し判った。

二日間の自習でほぼ、数Aの課題はかなり進んだ。

明日までにノートを整理して、分からないところを明日、質問しよ  
う。

ヒマワリも丁寧にノートをまとめている。

「チョツと貸して!」勇次が声をかけた。

「イヤッ!」珍しく、大きな声を上げたヒマワリの方を皆が振り返  
った。

筆記用具を借りようとした勇次が驚いている。

「何だよ!」「ゴメン、こっちを使って!」ヒマワリは決まり悪そうに別の筆記用具を渡した。

「このボールペン、借りちゃいけなかった?」

「ウン、チョツと大事にしていたから・・・」

「だって、英語スクールでくれる只のボールペンだろ!」

「書きやすいから気に入っている・・・」

もしやと振り向くと、例のボールペンだ。

俺は身がすくむ思いだ。無料で配っている宣伝のボールペンなのに・・・。

俺が、ヒマワリに咄嗟に渡したボールペンを彼女は大切にしている。女って不思議だ、たかがボールペンを大事にするなんて、俺はどうすればいいんだ。

俺は家に帰り、事の次第をレイラに説明した。

「レオ、最低!彼女の気持ちも考えずにヒドイ!許せない」

レイラは蔑むような目で俺を睨みつけた。

間の悪い事にお袋が帰ってきた。

「あら、どうしたの喧嘩でもしているの?」

「レオったら酷いの!女心を弄んで・・・」

「おい、弄ぶは無いだろ!」

・・・俺は久しぶりに母親に自分の悪事を白状する羽目になる。

俺の話聞いた婆は俺に尋ねた。

「レオはどうすれば良いと思うの?」

「プレゼントを用意してボールペンと取り替えてもらうかなあ」

「プレゼントを準備するのは良いけど、取り替えては相手を傷つけると思うわよ。」

貴方から貰ったボールペンを大切に使ってくれるのでしょ」

ボールペンと言われるたびに俺は身が縮む思いだ。

「もしま、レオ。そのヒマワリさんってレイラが倒れた時に手を貸してくれたお嬢さん？」

「ウン、そうだよ」

「嫌だ！レオ、どうして私に先に言ってくれないの！」レイラが割り込んだ。

「先につて、お前は会っているじゃん。俺、ヒマワリって呼んでいたよ！」

「だって、あの時は気分が悪くて家に帰ることしか考えられなくて！私もお礼しなきゃ！・・・ねえ！私にプレゼントを選ばせて！」

私もお友達になりたい。家にお招きして良いでしょ！私、レオとまとめて勉強を手伝ってあげる。兄貴も協力してくれると思うよ！」

レイラが一人で計画をまくし立てる。

「私もレイラがお世話になったお嬢さんにお礼が言いたいけど・・・

レオがどうするかを決めなさい。相手のお嬢さんの気持ちを良く考えてね！」

勿論、ヒマワリさんが来てくれるなら歓迎するわ」  
婆がレイラを静止するように引き取った。

その夜、兄貴からも家庭教師を引き受けるから、彼女を連れてこないかと言われた。

俺は取りあえず、兄貴が家庭教師をやってくれるから、勉強しに来ないかとヒマワリを誘った。

お互いに背に腹は変えられない状況だ。

ヒマワリはチョツと考えて「ご迷惑で、無かつたら・・・」と小さい声で言った。

俺は明日の土曜日に駅まで迎えに行く事を約束した。彼女は自転車で来るといふ。

帰りにレイラと待ち合わせてプレゼントを選ぶ。

レイラは小さなガラス細工の宝石箱を選んだ。

オルゴールが仕込んである。曲は「星に願いを」である。

レイラはラッピングにも注文をつけている。

土曜日の朝、俺は隣町までヒマワリを迎えに行った。

港町東駅に5分前に着くと、ヒマワリは既に来ていた。

俺は後ろから付いてくるヒマワリを振り返りながら家まで案内した。

家族が皆で出てきたら内気なヒマワリが驚くからと俺は家族を説得した。

家族も気を使って、兄貴が一人で玄関を開けて出迎えてくれた。

俺はヒマワリをお袋の書齋に案内して兄貴に勉強を教わった。

食事の時に皆を紹介すれば良い。

飲み物は缶のジュースを冷蔵庫から運んだ。

兄貴は俺よりもヒマワリにレベルを合わせて丁寧に説明していた。授業に出ていないから判らないという俺の場合は説明すれば何とかなる。

真面目に授業を受けて、ノートを丁寧にとっているヒマワリである。それで判らないのは理屈を考えるのが苦手な数学に対する拒否反応が出ているのだ。

兄貴は数字を書き連ねるのではなく、冗談や雑談を混ぜて公式の利用のやりかたを説明した。

公式に数字を当てはめる事だけを覚えようとすると、何がなんだか判らなくなる。

よく使う公式を例に取り上げて、ユックリ丁寧に繰り返し説明してくれた。

本当ならばレイラも応援に呼べば良いのだが、まさか妹に教わるの

では外聞が悪い。

あっという間に時間が過ぎる。

「お昼にしようか？」兄貴に言われるまで、俺もヒマワリも夢中で数学に取り組んでいた。

リビングでは、普段は口数が少ない大人しいヒマワリが、初対面のお袋にきちんと挨拶をしている。さすが女子だ。

「いらっしやいー！」

「お邪魔しています。」

「どう、勉強は順調ですか？」

「はい、お陰さまで・・・。」

「こんにちは！」レイラに声をかけられ、ヒマワリが固まった。びっくりして、目をまるくしている。

「私、帰ります」突然、ヒマワリが俺に囁いた。

「どうしたの、急に？」「だって、お邪魔だから・・・。」  
俯いて涙ぐむ、ヒマワリ！どうしたんだ？俺はどうしたら良いんだ？

そんな事は気付かずに婆がヒマワリに話しかける。

「ヒマワリさん、先日は娘のレイラが助けていただいて・・・。」

「えっ?」

「あら、紹介していなかったの?」

「こつちがレオの妹のレイラです。妹と言っても同い年だけどね。」

「ヒマワリさん、兄のレオがお世話になっています。」

「ごめんね。鈍くて、気がきかない兄で・・・。」

硬くなっていたヒマワリの顔が少しほころんだ。

「嫌だ！私。レイラさんのこと、レオさんの彼女かと思って・・・。」

「えっ！ヤダあゝ！私、レオの彼女に間違われたの！」

二人で声を揚げて笑っている。

食事を食べながら、追試対策が話題になるのでは消化に悪い。しかし、俺もヒマワリも切羽詰っている。今日のところは仕方あるまい。

ヒマワリが、家庭科でレポート提出と聞いてレイラが驚いた。

「だって、レオが戴いたチョコレート、手作りでしょ！」

「私、お菓子やお料理を作るのは好きだけど、消化酵素とか言われると……」

「そう、消化酵素って名前が長くて覚えるの大変よね！」

「実習も作品提出もできているからレポートだけ出せば良いって言われました。」

「私、手伝うわ！」

「本当？教えてくださる？」

レイラとすっかり話が弾んでいる。

「僕の生徒さんたち、午後の授業を始めるよ！」

兄貴に促されて、俺とヒマワリは勉強を再会した。

夕方までに、一通り、数1も数Aも今回の課題のポイントは見直しができた。

レイラはヒマワリと明日、家庭のレポートを書こうと相談したらしい。

俺は自転車でヒマワリを送る。

彼女の家は隣の駅の直ぐ近くらしい。

「ありがとう、この辺で大丈夫です。」

ヒマワリは駅の近くで自転車を止めた。

「あの、これ！」俺はレイラが選んだプレゼントを手渡す。

「開けてみてくれる」ヒマワリはそっと、包みを開き、ガラスの小箱をじつと見つめる。

「何がいか判らなくて妹に選んでもらったんだ」俺は言わなくても良い事をべらべら喋った。

「妹もお礼がしたいからって！俺とレイラから君に！」

「でも、オルゴールは俺の好きな曲なんだ」ヒマワリは何も言わずに下を向く。

「気に入らなかった？ゴメン、趣味がわからなくて・・・」ヒマワリの瞳から涙がこぼれる。

俺は焦った。何か悪い事を言ってしまったのだろうか？

レイラに良く無神経とか鈍感とか言われるが、気付かずに言った言葉で彼女を傷つけたのか？

ヒマワリが何か言ったが声が小さくて聞こえない。

「えっ？なんて言ったの？」

「嬉しいって言ったの？すごく、嬉しい。ありがとう。大事にする！」

俺はヒマワリの笑顔を見て、チョッと暖かい気持ちになった。

俺もバイクに乗りたい(前書き)

バイク免許を取るには我家の基準をクリアするのが条件。それは試験場や自動車学校の基準よりもはるかにハードルが高い。優等生の兄貴や妹のように俺にできるわけがない。俺もバイクの免許証が欲しい!!!

## 俺もバイクに乗りたい

高校2年の春がおとづれた。5月の連休で国内のスキーシーズンが終わる。

進級した俺は文理系コースを選択し、ヒマワリと同じクラスになった。

つまり、俺も彼女も兄貴のナオと妹レイラの応援で追試がクリアできた訳だ。

レイラは無論、理系に進むようだ。

5月に入ると妹のレイラがバイクの免許を取ると言い出した。

3月生まれの俺たちは16歳になるのが高2になる寸前だ。

双子で生まれて、ただでさえ体が小さいのに3月生まれば最悪だ。

以前、俺はお袋にそのことで文句を言った。

「4月に生まれるはずだったのに、貴方たちが早くでてきたんでしよう」

と婆は言っただけだ。

クラスには既に学校には内緒でバイクの免許を取得した者が数名いる。

俺の通う高校は勿論、免許は禁止である。

レイラと俺は兄貴が通った自動車学校に入校申込書を取りに出向いた。

5月半ばの日曜日、夕食時にレイラが切り出した。

バイクの免許を取りに自動車学校に通いたいと言いだしたレイラに婆が言った。

「貴女の学校ではバイクの免許取得について校則で禁止はされていないわ。

でも、単独走行は認めない。ナオの時と同じ条件よクリアできるか

しら。

高校一年の成績は立派だったけど、自動車学校に通って大丈夫なの？  
両立は厳しいと思うけど、学校の成績は維持できるのね？」

確かに俺の学校と違って、レイラの通うお嬢様学校にはバイクに関する規制はない。

バイクに乗ろうという生徒もいないから、規制の必要がないのだから。

兄貴は16歳になると高2の春に免許を取った。無論、学校に内緒である。

真面目な兄貴の唯一の校則違反である。

単独での走行は認めてもらえず、婆と常に一緒に走っていた。

走りながら、色々とアドバイスをもらっていたようだ。

レイラは停車した時に婆と兄貴が交わす会話をタンデムシートで聞いている。

俺は後ろに乗っていても多くの場合は眠っているので何を話しているのか知らない。

学校の成績を維持するのもレイラならば大丈夫だろう……。

まてよ！これはヤバイかも知れない。

俺は恐る恐る訊ねた。

「俺も一緒に自動車学校に行って良いよね？」

「どうして？」

婆に切り返されて俺は焦った。

「レイラが行くなら俺も行きたい！俺も免許が欲しい！」

「いくら双子だからって、レイラと貴方が同じである必要はないわ！」

レイラは約束を果たした上で要求しているのでしょー！」

俺は助けを求めべく、兄貴の顔を見た。

兄貴は難しい顔をして口を開かない。

レイラは驚いたように婆の顔を見ていた。俺と目がアウト涙が浮かんだ。

確かに、我家ではバイク免許取得には「学校の成績は基準以上を維持する」という条件がある。

その基準は、兄貴やレイラにはたいしたことは無いかもしれないが俺には厳しい。

上位10%という基準だ。もともと、これは婆が決めたわけではない。

兄貴が免許を取るときに、自分で言い出した条件だ。

確かに兄貴もレイラも共に学年で片手に入る順位を維持しているようだ。

俺はどう見ても中の上というところだ。勝手に宣言した兄貴が恨めしい。

その夜、落ち込んでいる俺の部屋に兄貴が現れた。

「レオ、お前だって、本気で頑張れば十分に数値目標をクリアできると思うが・・・」

「簡単に言わないでくれよ、俺が上位10%に入れるわけがないだろ！」

「だって、お前は国立受験クラスではないだろう。私大受験コースじゃないか！」

医学系でもないわけだし・・・偏差値は低いはずだ。」

俺は返す言葉も無く下を向いた。

高2になると、兄貴が卒業した時代から変わらず、学年200名がほぼ2つのグループに分かれる。

国公立の大学を狙うグループと私学を受験するグループだ。

兄貴は国立受験クラスで理科系を選択していた。一番、偏差値が高いクラスだ。

医学系と理工系で学年のトップ30がこのクラスに席を置く。

私学受験グループの中でも俺のいる文理系は内部推薦で上の大学を狙う、ノンビリ屋が多い。

その中で10%に入れないのか？と兄貴が言うのである。  
正直、入れそうもない俺は更に落ち込みスピードが上がった。

兄貴が去るのを待っていたようにレイラが現れた。

「レオ、一緒に免許を取ろうよ！」

「俺だってそうしたいさ。でも、俺にどうしようと……」

「学校の成績を上げれば良いんでしょ！」

「簡単に言っちなよ！それができれば苦労はしない」

「次の試験でトップを狙えば……！」

「何？お前は学年トップを狙っているのか？」

「えっ！レオはトップを狙わないの？」

「一番じゃなきゃ意味がないって、いつも言っているじゃない」

「それは、スキーの試合での話だろ！」

「同じじゃない。目指すはトップでしょ！ママを説得しようよ！」

レイラの理論は滅茶苦茶だ。俺が勉強でトップだと……！

俺の成績の何処を見て言っているんだ！

「無理！無理だったら無理！」思わず、俺の声がデカくなった。

レイラの目が丸く見開いた。次の瞬間、ポロポロと涙がこぼれた。

駄目だ、俺は奴の涙に弱いんだよなあ！奴は気が付いていないよう

だが……。

レイラに泣いて頼まれるとどんな無茶でもOKしてしまっ！

「判った、泣くな！やってみるから！頑張るから！」

俺はとんでもない約束をレイラをする事になった。

レイラの気合の入れようは……凄まじかった。

兄のナオまで巻き込み、二人がかりで俺の試験勉強を徹底的にサポ

ートした。

だいたい、俺は定期試験の前日にならないと試験勉強などはしない主義だ。

どうせ、一週間も経てば忘れる事を数日前に覚えるなど無駄だと思

っていた。

レイラと兄貴は違っていた。

奴らは事前に試験準備を整え、前日に重要なポイントを確認すると言った。

俺まで巻き込まないでくれ！と言いたいところだが・・・俺もバイクに乗りたい。

「レオ、諦めて私の後部シートに乗る？」レイラに嫌味をいわれ・・・挑発だとわかっていても俺は熱くなった。

中間試験で俺はクラスの5番と言う、奇跡的な順位を取った。担任だけでなく、各科目の教師が俺を化け物でも見るような目で眺めた。

俺とレイラは二人の成績を婆の前に並べ、自動車学校への入学を願った。

兄貴も今回は支援してくれる約束である。

成績を一目見たお袋はさして驚いた様子も見せず俺達に言った。

「当時のナオの成績には少し足りないけど、レオの頑張りは認めましょう。」

この成績が下がらないように維持できるかしら？」

「勿論、自動車学校に通っても成績は落としません」「俺も！」

「免許取得後も成績が落ちるようなら乗せないわよ！当分は保護者同伴！単独走行禁止！」

学校の友人にも誰にも知られない。誰かにバレたら乗せない。良いわね！」

「ハイ！約束します」

俺とレイラの声がハモル。

何故か、幼い頃から俺とレイラは同時に同じ言葉を発する事がある。  
「入校に必要な書類を揃えなさい」

「ハイ！」

レイラが住民票と入学書類の一式を取り出した。

アイツ、何時の間に……。俺の写真まで準備しやがって！！！！

「ママのサインがここに必要なの！レオも自分の分を記入して！」  
俺よりもはるかに熱くなっている。俺はレイラの気合におされ気味だ。

翌日、俺とレイラは手を繋いで自動車学校の門をくぐった。

（『手を繋いで』はたとえである。念のため！）

自動車学校の入校式は次の土曜日になった。

当日から学科を3時間ずつ受けなくてはならない。

「何だよ！試験が終わったのに、また、勉強か？」

直ぐにバイクの実習を期待した俺は30時間という気の遠くなる科目数にウンザリだ。

「レオったら、何にも知らないんだから！」

レイラに尻をたたかれ、俺はフットサルもしばし休みである。

毎日、学校の授業の後で更に授業を受ける。

俺は詳しく説明を読んでいないが、学科も上手に受講しないと実技予約ができないらしい。

学校の授業も合わせると一日に9時間の授業を受ける事になる。

俺の頭は悲鳴を上げている。

成績が下がれば自動車学校は受講打ち切りと言われ、学校も手を抜けない。

いったい、どの授業で居眠りができるんだ〜！！！！

流石に8時間目、9時間目になると集中できない。

ストレスで俺が爆発しそうになったところレイラが言った。

「レオ、実技の予約をしなくちゃ」  
「ええっ！いいよいよバイクに乗れるのか？」  
「最初はシュミレーターでしょ！」

コンピュータ画像を見ながらバイクの操作をするシュミレータ。  
俺はゲーム感覚で楽しんだ。

ゲームが得意でないレイラが心配になった。  
チラリと様子を見ると、奴は実にスムーズに操作しているではないか！  
頭を嫌な予感が横切った。

俺の不安は的中した。  
実技が始まると、流石にバイクの取り回しでは力のないレイラが苦労している。

更にセンタースタンドをかけるのはレイラの体重では難しい。  
しかし、エンジンをかけると・・・、俺がエンストを繰り返す間に  
奴は・・・。

レイラはスムーズにバイクを発進し、コースに出て行く。  
チキシヨウ！！！！！！

「レイラ、無免で練習したろう！」  
「していないよ、何でそんなこと聞くの？」  
「だって、お前の方が上手いじゃん！」  
「それは、レオが理屈で理解しないからでしょ？」  
夕食の時に俺達が言い争っているのを聞いていた兄貴が俺達を呼んだ。

兄貴はガレージで俺達にブーツ、グローブ、ヘルメットをつけるように言った。

車をガレージの前に出して空間を造るとロードコーン2本を離して

置いた。

二本のロードコーンを8の字のように押し回れと言う。  
バイクの取り回しの練習である。俺とレイラは交互に兄貴の指導でバイクを押す。

センタースタンドをかける練習では、レイラが何度もバランスを注意された。

「怖がるな！」

センタースタンドの両側の足が接地していないとお前の体重じゃ上がらない。

バイクの重心位置を覚えるんだ。」

兄貴に怒鳴られてレイラが唇を噛む。

センタースタンドを掛ける練習がひとしきり続いた後で兄貴はもう一台並べるように俺に言った。

2台のバイクが並ぶと、センタースタンド掛けたまま乗るように言われた。

「エンジンをかける！」

俺とレイラはセルを回す。

「ローにギアを入れてクラッチを繋いでみる！」

なるほど、俺は兄貴が何をやらせようとしているのか分かった。

「もっと、ソフトにクラッチを繋ぐんだ！」

俺は兄貴に何度も言われるが、加減が良く分からない。

「レオ、エンジン音を聞いてご覧！」

後タイヤを見て回りだす時のエンジン音を覚えなさい」

いきなり、後ろから婆に声をかけられて俺は驚いた。

ずっと見ていたのか？！

婆は俺の肩に手を掛け、ぎゅうと掴んだ。

俺は婆の手から方に伝わる力に合わせるようにクラッチを操作した。  
ギユツと握ったクラッチをそつと緩める。

エンジン音が高くなりタイヤが回り始める。

「レオ、クラッチが繋がるとタイヤに力が伝わる仕組みなの良いね。実際に走るときは重量のあるバイクを動かすのだから力がある。

発進時にはアクセルを開き加減にして、エンジン音を高めにする！音を聞いて、感覚を覚えて！」

アクセルを握る手にお袋が手を添える。

「音で半クラッチの位置を覚えて！」

半クラッチは力が伝わりきらずに滑っている状態」

そうか、音か！俺は自分のバイクの音だけを聞き分ける。

「ローでクラッチを繋ぐ時はユツクリ繋いで。セコンドは素早く。クラッチのつながり目でアクセルは戻す。」

肩に伝わる力とアクセルの微妙な操作、婆の実施指導は続く。

クラッチの繋ぎ方もギアによって違うことを俺は初めて知った。

日曜日に俺とレイラはお袋と兄貴のタンデムシートに乗った。

お袋と俺のタンデムは久しぶりだ。

俺が急に重たくなってからは、俺はもっぱら兄貴とタンデムだった。

「エンジン音を聞いて！」お袋は俺に声を掛け、バイクをスタートさせた。

「直ぐにセコンドにギアを変える」

「ギアチェンジのタイミングを覚えて！」

お袋が次々《つきつき》と声をかける。

停止する前にカンカンとギアダウンする。

早朝の湘南を走り、ファミレスで小休止をとった。

モーニングを注文して、熱い珈琲を飲む。

珈琲が凄く美味しい。

「どうして、今まで乗り方を教えてくれなかったんだよ！」

お袋に俺は抗議した。

お袋だけでなく兄貴とレイラの冷たい眼差しが俺に向けられる。何なんだ？この雰囲気は……。

「レオはいつも寝てたじゃない！」とレイラ。

「だって、バイクに乗ると眠くなるから……」

答えながら俺はハツと気付いた。

俺がタンDEMシートで気持ちよくウトウトしているときに奴は……。

「もしかして、お前はずっと、運転のポイントを教わっていたの？」「当たり前じゃない。16歳になったら免許が取りたかったもの……」

レイラは停止することに、前で運転するお袋や兄貴に話しかけていた。

そんなことは全く考えずに俺はウトウト快眠を楽しんでいた。

俺は無性に自分が腹立たしかった。アイツが上手い訳だ。

そして俺の中からメラメラと負けず嫌いが頭を持ち上げる。

レイラのように技術的な仕組みを理解する気はないがコツならば判る。

お袋は技術的なことを難しい単語を使わずに説明した。

俺は一言も漏らすまいとお袋の言葉を受け止めた。

婆と兄貴のバックアップで、俺もレイラも順調に過程が進んだ。

「レオ、明日の試験勉強してる？」

「実技の試験勉強するのか？あ？イメージトレーニングか？」

「何いつてるの、学科試験よ！」

何だと！自動車学校でも試験があるのか！？

俺はレイラの特訓で一夜漬けで学科試験をクリアした。

結局、お母様、お兄様、妹様のお陰で俺は運転免許証をゲットしたのである。

勿論、期末試験もお兄様、妹様のご支援を持って何とか順位を下げずにクリアした。

俺の運転免許証はリビングのキーケースの所にレイラの免許と並んで置かれていた。

俺達の公道デビューの日を夢見て、免許証を見ると思わず顔がニンマリする。

そのときの俺はこれから行われる鬼婆の猛特訓の事など想像もしていなかった。

## バイク運転、丸秘テクニク（前書き）

レイラと俺がバイク免許を取得すると同時に始まった、鬼婆のもう特訓。

バイクに乗る人は必見のテクニクの紹介。

バイクに乗らない人も知って損はしないと思う。

ツーリングを楽しみたいライダー集合！

## バイク運転、丸秘テクニク

俺とレイラは自動二輪免許を取得した。ホツと安心するのもつかの間、婆の特訓が始まった。

確かにバイクは生身で乗るもの、いざと言う時に身を守る箱がない。スキーでも、転倒すれば十分に痛い。

雪の上でも高速で転倒すれば怪我に繋がるケースがある事を見て知っている。

アスファルトの上で転倒したら、痛いに違いない。大怪我の可能性もある。

婆から叩き込まれたライディングは学校で習うのとは違う。明らかに実践編である。

最初に服装については厳しく申し渡された。体を守る衣服を身に付けること。

夏でも長袖を着用、ハーフパンツなどもっての外だ。

可能であれば皮製のウエアを身に付ける。

バイクの場合は転倒時に擦過傷を受ける事が多い。

皮は擦過傷を防ぐ効果が高いだけでなく、火傷を防ぐ効果もある。

バイクのエンジンは高温になる。皮のウエアはその意味でも安全だ。足首を保護するブーツを履くこと。手袋は必ず着用すること。

ヘルメットは夏はジェットヘル。冬はフルフェイス。

靴紐は靴の中に押し込む。ステップに引っかかる口の広がったスポンは厳禁。

我家のツーリングは早朝発と決まっている。

俺たちは朝も暗いうちから起きだした。

俺たちは兄貴と婆に前後を固められて晴れてツーリングに出発した。

先頭に兄貴のナオ、二番手にレイラ、3番手が俺、ラストは婆である。

レイラは兄貴に、俺は婆に厳重に？監視される。

ライディングポジションは勿論であるが、  
走るときのコース取り、操作、マナーとビシビシ、鍛えられた。

道路を走るときは車の轍（タイヤの通る位置）を通行する事。

ドライバーからルームミラーで見える、前の車のタイヤの位置を目安とする。

バイクが複数台で走るときは間延びしないように車間距離に気を配る。

先頭車が左の轍にポジションを取ったら二番手は右の轍。

3番手は左、4番手は右。先頭が右に位置を取ったら逆になる。

自分が前のバイクからミラーに映るよう、位置をキープしろ！

相手のミラーで前のライダーの顔が見える事！

バイクの真横はお互いに死角になりやすい。併走は厳禁である。

信号待ちでは、できるだけ車の前に抜け出る。

停止する時は並列に停まるなど場所を取らない。

スタートする時にバイクの加速と車の加速では特性があるため、前からスタートする方が安全で邪魔にならない。

その代わり、スタートでもたつくな！と厳命される。

スタートしたら、速やかに加速して、車の集団から離れる！

車の近くをバイクがチョロチョロするとドライバーが運転しにくい。

停止した車の脇を抜けて先頭に出るからにはドライバーに気を配れ！  
婆にいわせれば、前に抜け出しておいてグズグズしてはドライバーに失礼だ。

婆や兄貴が信号待ちでニュートラルにギアを入れる。

俺がマネをしたら・・・。

「初心者は早めにスタートの準備をする！」と声が飛び、停止するときにギアがローに戻っていないと、「準備が悪い！」と叱られる。

ニュートラルからローにギアが入らず、もたもたすると「遅い！」俺は自分の事でシドロモドロと精一杯でレイラを気遣うところではない。

交差点の右左折は原則としてギアはセカンド。交差点に入る前に十分に減速する！

速度調整ではブレーキだけでなくクラッチを有効に使う。

セカンドでバンクをしながらクラッチを繋いでアクセルを開く。

言われる事は判るが、操作が思うようにいかない。

右手と左手、左足がちくはぐである。

停止からの右左折もローでスタートして、直ぐにセカンドに入れてバンクする。

バンクをしながらクラッチを繋いで加速する。原則は変わらない。

兄貴もお袋もスムーズに走るが俺とレイラはジタバタしている。

何度もウインカーを消し忘れて怒鳴られる。

(バイクは車と違って自動でウインカーが消えない)

ウインカーに気を取られると余計にギクシャクする。

「レオ、自分でウインカーをキャンセルするタイミングを決めて癖にするの！」

私はセカンドでコーナーを回って加速して、直線になったところで操作する！

同時にする必要は無いから！

ウインカーを出す位置は道路交通法で決まっているけど、消す位置

は自由！！」  
危険な交差点は速やかに通り抜け、ユックリ操作しろとアドバイスだ。

ギアのチェンジは速やかにいき、早く、定速にもって行け！  
定速になったらギアをトップに入れる！

何時までもサードでグズグズ走るな！

アクセルはグズグズ開くな。  
走りにメリハリをつけよ！

バイクでは車線変更などをする時はオーバーアクションを起こせ！  
車にも周囲のバイクにも、自分がアクションを起こす事をしらせる！  
予期せぬ動きはお互いに危険である。

いきなり、車線変更をされると後続車が慌ててブレーキをかけ、事故に繋がる。  
バイクの急ブレーキは車よりも危険度が高い。

バイクでは前の常用車との車間を狭目にとり、後ろはろを広めに取る。  
バイクの停止距離と車の制動距離が違う事を認識せよ！

車に比べてバイク同士の車間は短めに取る。

中途半端に車間距離を取ると、バイクは小さく見えるので錯覚で広く感じる。

車線変更の車を誘惑するような、魅力的な車間距離を取ってはいけない。

ナオが右にポジションを移動した。レイラが左により俺は右に寄る。基礎スキーでチーム種目に求められるフォーメーションの動きに似ている。

兄の右ウインカーに習って俺達もウインカーを出す。

兄が右車線に移り、レイラ、俺と続く。婆はいつの間にか俺の後ろに居る。  
車線変更もスムーズになった。・・・と思っていたら・・・（後で知ったのだが）。  
兄貴より先に最後尾の婆が右車線に移り、俺達の車線変更を助けていた。

俺もレイラも夢中で兄貴の後ろを追いかけていた。  
いつの間にか海が左手に広がる。

体育館のような建物の前で兄貴が停車した。

兄貴とお袋に言われて、歩道橋の下にバイクを押し移動する。

「ここって、江ノ島？」レイラが尋ねる。

「そう、江ノ島のヨットハーバーだよ！」ナオが答えた。

俺は自分が何処を走って、どうやって此処に着いたか記憶にない。

ヨットハーバーに立ち寄り、海を見ながら缶コーヒを飲んだ。

まだ、レストランは開いていないが、ヨットマンは朝が早い。

既に出航する艇もある。

「此処までのコースを覚えている？」とお袋に聞かれた。

夢中で走って来たので、疲れは感じないが、何処を走ったのか記憶にない。

レイラも首をかしげて・・・「北鎌倉を通ったかなあ・・・」と怪しい。

「鎌倉街道から原宿線に入って、北鎌倉を通過したよ！」とナオ。

そう言われても地図が頭に入っていないから俺には良く分からない。

「帰ったら、地図を確認しなさい」とお袋に言われた。

「特にレオは車に乗せても、バイクに乗せても寝ていて前を見ていないのだから！」

確かに車の好きなレイラは助手席を好み運転操作も詳しい。

俺は車内は睡眠場所すいみんばしょと決めている。

「レオ、貴方は車の脇わきを抜ぬけるときギアをローにしていけない？」

「低速だとローにしているけど・・・」

「ローはトルクがあるからコントロールしにくいよ！

発進だけローを使つて直ぐにセカンドに上げる事。

レイラは低速走行時に前ブレーキを使わない」

「えっ、何で？」

「前ブレーキを低速で使うとふら付くからすり抜け時は危険きけんでしょ。足ブレーキで微調整びちようせいして！判った？」

「ハイ！」

俺たちは来たコースを引き返した。

もつとも、江ノ島は橋で繋がつながっているから渡らないと帰れない。

兄貴が次に向かったのは鎌倉のはずれにある長谷寺はせでらである。

駐輪場にバイクを止め、寺に入る。

四季を通じて花の美しい寺だと聞くが、庭が美しい。

レイラは庭の花々を美しいと喜んでいますが、俺は展望台からの眺めなが

が気に入った。

眼下がんがに海を見下ろし、ベンチに座る。

少し、大きな通りから入っただけで静かだ。

心の落ち着きを感じる。

庭内には洞窟どうくつもあり、中には石像せきぞうが並ぶ。

俺も兄貴も真つ直ぐ立てずに、腰をかがめて中を進む。

修行のなかでこの石造を刻んだ僧侶そうじゆたちはどれだけの時間をかけて

一体を彫り終えたのだろう。

石造の持つ顔の表情が柔やわらかく、眺める者に安心感を与える。

お袋が俺達に「お茶しに行こうか？」と声をかけた。

美味しいコーヒーをご馳走ちせうしてくれらしい。

次の目的地に向かつて、今までとは逆順に並ぶ。  
俺は二番手となりお袋の後ろを走る。

信号で停まり、発進する時の加速が早い。数秒でお袋に距離を開けられる。

俺は意識してアクセルを開き、ギアチェンジを行うが置いていかれる。

お袋の加速に翻弄ほんろうされているうちに、報告寺ほうごうじに到着とちやくした。

竹の寺として有名なしいが、庭内は無数の孟宗竹もうそうだけが茂り、石塔が点在する。

庭に入った途端とたんに竹に囲まれ、緑の世界である。

庭内の東屋あずまやに入ると竹の庭に向けて作られたカウンター席が作られている。

並んで座った俺は庭を見ながら、お袋の加速のタイミングを思い返していた。

「お待たせしました。」出てきたお茶を一目見て、俺は絶句ぜっくした。

うーん、これがお袋の「お茶に行く」なのか！

俺の目前にお抹茶と鳩の落雁らくがんが二粒、並んでいる。

お抹茶の飲み方など知らない俺は、横目でレイラと兄貴あやむすを盗み見る。

「硬かたくならなくてもいいんだ、器の正面を外して味わっていただけ」  
兄貴が小声で俺に言った。

器を左手の上に乗せ、右手で少しまわしてそれから口をつける。

流石にお嬢様学校に通うレイラは優雅だ！

皮のツナギを着ているのに、お茶をいただく姿は洗練せんれんされていて美しい。

思わず、見とれてしまった。

普段は音をたてて飲むと注意をするお袋やレイラが音を立てて啜すすっている。

俺は面白くなつて「ずずず」「つと音を立てた。  
濃厚のちゆうなお茶の香りと苦味が口の中に広がる。

うへへえ、この苦味！と思ったのは一瞬いっしゆんで、苦味が爽さわやかさに変わる。

これがお抹茶の味なのか、俺には新鮮しんせんな出会いだった。

報告寺を後にする時に、お袋が俺達に指示した。

ここから、次に指示するまではコーナーが多いから、車間距離を広めに取る。

車の轍わだちを意識せずに、片車線を自由に使う。

コーナーワークはスキーマの経験を生かして自分で考える。

決してセンターを割る事（対向車線にはみ出す）がないように注意せよ。

道路の凹凸あせで焦あせらないようにニーグリップをしっかりと意識するように……。

自分の力量にあったスピードコントロールを行う事！

俺達に指示を与えるとお袋は俺を見てにやりと笑った。

スタートしたお袋のあとを俺は追いかける。

間もなく峠たけにかかり上り坂を右に左にと心地よいコーナーせまが迫る。

俺はお袋のブレーキングにならない、減速、バンク、加速を繰り返す。

一つのコーナー毎に、車間距離が広がる。追いつく間もなく次のコーナーだ。

ブラインドコーナーではカーブのRえんこ（円弧）が判らない。充分に減速する。

俺はお袋を意識するよりも自分のバイクとの一体感を感じるようになった。

下りにかかるとお袋はブレーキングを強化しギアを落とす。

上りよりも低速でコーナーに入る。加速が上りよりも明らかに速い。

なる程、このための大げさな減速なのか！

下り坂はエンジンブレーキを意識して、ギアをコントロールしている。

俺はコーナーワーク、ギア操作とお袋の走りを見ながら後ろを走った。

峠を下った信号で俺達は停止した。

「レオ、良いな〜あ、ママの後ろを走って！」レイラが俺に声をかける。

スキーでも良くやる手だがフリーで滑る時は意識して自分より上手な選手の後ろをマークする。

コース取りや速度のコントロールを覚えるためである。

レイラはそのことを言ったのだろう。

俺が忠実にお袋の走りを取りピートできればレイラも同じコースを学習できる。

今の俺には忠実にお袋の走りを取りする技量がない。

「畜生、上手いなあ〜」俺達の会話が聞こえたのか……。

「当たり前でしょ、ナオが生まれる前から走っているんだから！でも、貴方達にも胎教で教えたよ！」

何が胎教だ、俺達が体内に居るのにバイクで飛ばしていたんだろうに！！

大きくなったお腹がタンクにつつかえるまで乗ったとか……。

『だって、ハンドルに手が届かなくなったから……』と語る婆は餓鬼みたいだ。

全く、信じられないお袋の神経だ！

一般道でもお袋を必死でリピートしようとするのだが、信号で停車するとスタートで水をあけられる。

「レオは年寄りくさいスタートをするねえ！」と嫌味をいわる。

国道16号から少し、入ったラーメン屋で飯にありついた。  
無我夢中走っていた。

ラーメンの匂いがした途端に猛烈に腹が減ってきた。

「大盛りラーメン、餃子にライス」と兄貴は平然と注文する。「俺も！」

呆れた顔をして俺を見たレイラもラーメンと餃子を注文している。  
風を切って走るのと思ったよりも体も冷えている。

ラーメンが腹にしみこむ。これほど美味しいラーメンを食った事がない。

初回のツーリングでは初歩のライディングテクニックの手解きをつけた。

更に婆の講義は続く。

### ライダー必見の中級編

数台先の車の動きに目を配れ！早めに次のアクションが準備できる。

右折車が数台前にいれば、後ろがブレーキをかける。

早めに察知して備えるのが危険回避に繋がる。

道路ミラーは事故などが発生した危険なところに設置される。

気が付かないT字路や思わぬ合流場所にミラーがある。

交差点に頭を出す前にミラーを確認せよ！

ミラーを目印にするのも有効だ。

車のルームミラーはドライバーのテクニク判断の目安。

ミラー越しに目が会わないドライバーは危険。

バイクの存在を認識する余裕が無いと思え。

追い抜きは直線で行え！

カーブのコース取りは予想しにくい。  
左カーブで寄せられたり、右カーブで膨らんだり  
カーブで車と併走するのは危険だ。

追い抜きは加速して瞬時に完結せよ！

車と併走するのは危険な状態、短時間にすべきだ。

加速時は直進性も高く、安定する。

追い抜きは直線で加速しながら行え。

右左折の車の死角に入るな！

前の車が左折する時はルームミラーに映《打つ》る位置にまず移動  
しろ！

次に対向車から見えるように右に出ろ！

左折車に合わせて対向車が右折する場合がある。

自分が対向車に見える位置に出ないと右折車に直進で突っ込む事  
になる。

バスの停車ランプを確認しろ

バス車内の停車ランプは重要な情報源だ。

次の停留所で停まるなら無理に追い抜く事はない。

停車場で速やかに抜かすために早めに右に移動できる。

対向車の動きを無視するな！

対向車線での駐停車は進行方向の車の流れに影響する。

センターライン近くの右折車を避ける為に左にラインを取る。

車の左を併走していると寄せられて危険。

風の強い日はトンネルの出口が要注意！

バイクは軽いから流される。

トンネル内では前後左右に空間をとれ！

歩道の自転車に気を配れ

歩行者を避ける為に車道に飛び出す事がある。

自転車はミラーがないので道路脇をはしるバイクを意識していない。  
相手は交通弱者！こっちが避けるしかない。

通勤・通学のバイクには道を譲れ！

通勤、通学のライダーは道に慣れているから道を譲るのが礼儀。

彼らが減速するときは習え！

脇道や駅の近くで横断者が多い場所。

取締りの名所も彼らは良く知っている。

事故の8割は交差点付近で起きる。

交差点は緊張して速やかに通過しろ！

早く離れる！交差点付近では右左折以外のアクションを起こすな！

自分のバイクのハンドル位置とドアミラーの位置に注意せよ！

高さが同じ車は車種を記憶せよ！

すり抜ける時に目安にんなる。

休日は同乗者の多い車に注意せよ！

ファミレスの出入口は要注意！

突然、駐車場に入ろうとする車両がある。

停滞する車の隙間から駐車場めがけて右折する車がいる。

雨の日はマンホールと白線を踏むな。

特にブレーキは最悪。滑るので転倒の恐れあり。

黄色い線は白よりも更に滑る！

あれえく??????

雨の日にはブレーキランプが高い位置にある車の後ろを走るな。  
ヘルメットのシールドに付いた水滴にブレーキランプが反射する。  
前の車がブレーキを踏んだ途端とたんに世界が真っ赤になり何も見えない。

自動車学校で教官に運転が上手だと言われて有頂天うちよつてんだった俺。

バイクの運転もスキーと同じだ。

自動車学校で習うテクニクはスキーで言えば5級か4級。

一人でゲレンデを滑れる程度と判った。

スキーもライディングもテクニクが高いほど余裕よゆうが生まれ安全だ。

試練…とんでもない夏休（前書き）

俺とレイラは高2の夏も地球の裏側で冬を過ごしていた。試合に向  
った先に届いたとんでもない知らせ。

お前はレイラを守れ！俺に与えられた重い使命。

## 試練：とんでもない夏休

高2の夏休も俺達は地球の裏側で冬を過ごしていた。  
恒例のニュージランドキャンプである。

今年もFISの大会があり、俺とレイラはエントリーをしている。  
通常のトレーニングは南島中央のマウント・クックで行っている。  
試合は島の南端で行われる為、キャンプを離れてクイーンズタウン  
に移動する。

日程によっては、試合に参加して、そのまま帰国する事もある。  
ニュージランドは小さな島国だが、日本と同じような感じだ。  
細長い国なので島の中央部から南端までといっても飛行機移動であ  
る。

俺とレイラは試合の3日前、キャンプ宿舎を早朝に出発した。  
宿の親父さんが空港まで俺達を送ってくれる。

クライストチャーチからクイーンズタウンへは国内線で飛び、ホテ  
ルの送迎バスに乗る。

試合が4日間と事前のトレーニングで2日、約1週間の滞在予定だ。  
事件は試合の初日に起こった。

初日としてはまずまずの結果に満足して、俺とレイラはホテルに戻  
った。

ホテルのフロントで伝言があると言われ、俺はレイラを呼び戻そう  
とした。

俺よりレイラの方が英語のヒヤリングが正確だからだ。（英語がで  
きるってこと！）

レイラに声を掛けようとする俺を遮ってホテルマンが言った。

「レオさまだけ（only）にお伝えするようにと聞いています」

俺だけに（only me）???「誰から」「ナオ様からのメッセージです」

兄貴が俺だけに伝言というのは、想像が付かない。

レイラに内緒で、という成績が悪くて学校から呼び出しがあったとか……。

それにしても夏休も終わりの時期に……。

メッセージは達筆のメモである。

俺がぶつぶつと声を出して読んでいると、見かねてマネージャーが説明してくれた。

「急いで連絡したい事があるので、レイラさまには内緒でお兄様に電話をして欲しい」という内容かと思いません。

マネージャーの言う英語は俺にも理解できたが、何があつたんだ？メモの内容ではそれ以上は判らない。

フロントが受けた電話では、ナオは弟にだけ伝えるように頼んだぞうだ、

妹には気付かれないようにと言われたようだが……何故？

クエスチョンで頭が爆発しそうになった俺は一旦、部屋に戻った。

着替えだけ済ませ、「腹が減った！何か軽いものを買ってくる」と部屋を出た。

ホテルで国際電話用のテレホンカードを購入し、公衆電話からナオに連絡する。

兄貴のナオから聞いた話がこれまた、よく訳の判らない話である。

どうやら、お袋が倒れたとか遭難したとか言うのだが……。  
兄貴の日本語も俺には理解が難しい。お袋の所在地も不明確だ。

鬼婆（お袋）の夏休は短い。技術屋の宿命だと本人は諦めているよ  
うだ。

夏休には電波の届かないところに逃亡する事が以前から多かった。

絶対に呼び戻されない山に登るとか、海外も僻地へきちに出かける。今回もそのケースなのだろう。

スキー場でも電波が届く便利な世の中になった。

電波の届かない場所を探すのも最近は難しい。

電波の有無は別として、鬼婆の好むのは人里はなれた山間僻地さんかんへきちが多い。

「ちよつとバイクで温泉に行ってきた」

ちよつと行った先が薬研温泉やっけんおんせんという本州の北の果てしもきたはんとう（下北半島）であつたり、

「バイクで夜景を見に行つた」

夜景を見に行く先が神戸の裏山、六甲山であつたり……

時間が無いと飛行機を使って現地でレンタカーを借りて走っているらしい。

近年は世界遺産せいかいざんに興味を持っているらしいが、出かけるのは難しいようだ。

休みの日程も急に決まる事が多く、ツアーを予約しても変更が必要になることが多い。

「変更が大変だからツアーよりも個人旅行のほうが安い」と婆は言う。

タイのアユタヤやカンボジアのアンコールワットには何度か出かけたようだ、

アンコールワットが大変にお気に入りのようだ。

時間の都合つうごうで、東南アジアに出かけるのが無難ぶなんなのだろう。

インカの遺跡いせきに行きたいと口癖くちくせのように言うが夢は適かなっていない。

「今回はカンボジア（アンコールワット）に行つたらしい！」と兄貴は言う。

「らしい、じゃ困るだろう！」「と俺が言う……」

「お袋が何を考えているのか、俺達に理解できると思つか？」と逆襲さしやぶされた。  
気ままで奔放ほんぼうな性格、無理とか無茶という事を考えない。  
よく言くと大胆だいたん、悪く言えば人騒ひとさわがせ……。今回もその例なのだろつ。

「お前にだけは状況を連絡したかった！レイラには言つな！」  
兄貴は俺だけにといいが、俺に何ができるんだ！

「俺は状況によっては現地に飛ぶからお袋は俺に任せて、お前がレイラを守れ！」

状況がハッキリするまでは現在のジョブを遂行すいこうしろ！」  
「ジョブの遂行」???これって、よくお袋が言つ台詞せりふだ。

「情報を手したら知らせる」というスパイのような一言で兄貴は電話を切つた。

全く、皆して勝手のし放題ほうだいなんだから……。俺はどうすりゃ良いんだ！

レイラに内緒といわれると俺には相談相手が居ないということだ。

俺は情報を整理しようと思つた頭のの中身をフルに使いながら部屋に戻つた。

「レオ、何を買つて来たの？」

部屋に入る早々、レイラに声を掛けられ、俺は固まつた。

食べ物を買つと言つて部屋を出たんだっけ？！

うるたえる自分に落ち着けと言ひ聞かせながら俺の頭脳うのすはフル回転している。

「やめた！」汗が出るほど頭脳を動かして返した言葉がこれだ！

「なんで？」レイラの質問に更に追ひ詰められる俺！

「な、あれ食いに行かないか？」思わずでまかせ……。

「あれじゃ判んないよ。レオなんか変だよ！疲れているの？」

「そりゃ、俺だつて疲れることもある！」何となく会話になつてき

た。

「早めに食べてチューンして、早く寝る？」

「ウン！」「ところであれって何なの？」

「ほら、お前の好きな親子丼！」いいぞ、素直に言葉が出た・・・。  
「いいよー！」レイラは好物を食べられると二つ返事だ。

着替えるから待って！・・・レイラは着替えを持ってバスルームに飛び込んだ。

レイラに気付かれるとまずい。俺は記憶に蓋ふたをした。  
一緒の時は考えるのを辞やめよう。

高校2年になつて俺とレイラがツインルームを使うのはツインズだから・・・。

それでは洒落しゃれにならない。中3の時にシングル2部屋を予約した事がある。

俺の部屋を訪ねようとしたレイラが部屋のオートロックで閉め出された。

眠り込んだ俺が起きなかつたためにレイラはスエット姿で数時間を廊下で過ごした。

昨年も今年も奴がツインルームを予約した。英文メールで直接じせく予約をするらしい。

「文句もんくある！」って凄すこまれると、「いえ、ございませんお姫様ひめさま！」  
俺は王子様やナイトではなく、どう見ても執事しやくじである。

俺達はレイラの好物の親子丼を食べに出かけた。

親子丼と言っても怪しげな日本料理？で和食の親子丼とは全く違う。軽くスモークした鮭のスライスとイクラをレタスとライスに乗せたサラダである。

現地の人にはヘルシーさが好まれているが、俺達には安い日本の味である。

レストランというよりもパブに近い、カウンターがメインの店に入

り注文する。

「今年も来たのか!?」と主人が歓迎してくれる。

俺が何時にもなく元気がない、とマスターが食後にホットワインをこ馳走してくれた。

「疲れが取れるよ!これを飲んでぐっすりお休み!」

ホットワインは文字通り暖めたワインに蜂蜜を入れた飲み物だ。

(子供にはアルコールが飛ぶまで加熱する)

体が温まり、少々の風邪なら治ってしまう。日本の玉子酒に似ている。

宿に帰ると体も温まり、すっかり、リラックスだ!

俺って何か深刻な事を考えなくては・・・と思いつつ・・・。

ワックスは明朝と決めて直に眠ってしまった。

明朝、4時に飛び起き、慌てて試合の準備に掛かると・・・。

レイラが俺のワックスも掛けてくれている。

お礼に彼女の分も仕上げることにした。持ちつ持たれつだ!

一人で手を動かしながら、昨日の兄貴の電話を思い出す。

お袋に何があつたのだろうか?

日本とは時差が8時間あるが新しい情報は入つたのだろうか?

日本と東南アジアでは時差があるはずだが・・・。

「おはよう!」後ろから急に声を掛けられて俺は飛び上がった。

思わず、手が滑る。

「あつ!」俺は自分の親指に熱さを感じた。

見ると親指がぱっくりと切れている。

指の真ん中に立てに3から4cmの線が入り、そこから血が出て、赤線が見る間に太くなる。

血が手のひらを流れてぼたぼたと落ちた。

「ゴメン、脅かして・・・ゴメン!」レイラが飛んで来た。

俺の指を一目見たレイラは顔色を変えて、てきぱきと手を動かす。

親指の付け根を工具の中にあつた紐で縛り止血して、ハンカチで傷を抑える。

実に冷静な処置だ。俺は血を見ただけで気分が悪くなるのに……。

「ちゃんと手当てしなくっちゃ！」

俺はレイラに連れられて部屋に戻りレイラに俺の右手を預けた。

レイラは消毒をして傷にガーゼを当て、かなりきつく包帯を巻く。

「どうしよう！病院に行く？」

「大げさだろう！たかがエッジを引っ掛けただけで……」

「でも、血が止まらなかつたら……」

俺は血を見て気分が悪いのだが、レイラは心配で青ざめている。

「大丈夫だから……それより試合に集中しろよ！」

レイラのお陰で試合の準備はほとんどできている。

俺はレイラに助けられてウェアに着替え、試合会場に向うバスに乗り込んだ。

エッジで切るなんて久しぶりだ、集中していなかったからだ。

しかし、時間の経過と共に傷はズキンズキンと鼓動に合わせて痛み出す。

ちよつとやばいかも……。

試合会場に付きコースのセッティングを確認する。

インスペクション（コースの下見）では俺はストックをまとめて左手に持った。

包帯をした右手はウェアのポケットに入れていた。

試合は女子から行われる。レイラの試合では俺は荷物を運ぶ。

「レオ、板は下ろさなくても良いからね！」

試合直前まで俺を気遣うレイラに俺は……。

「良い滑りをしろよ！」と声をかけた。

俺の顔を見てレイラがコクリとうなづいた。

俺はレイラの板とウェアを持ち少し下った急斜面に陣取った。

シード選手に続いてレイラがスタートする。  
スタート順は悪くない。レイラの急斜面の滑りを観察し俺はホツとした。

滑りは安定している。コース取りもまあ良いだろう。

レイラの姿が見えなくなると俺はゴールに急いだ。

「お待たせ！タイムは？」

「まあまあかな！レオ！板は下ろさなくても良いと言ったのに！」  
レイラがウェアを羽織ると直ぐにレストハウスに向った。

俺も準備をしなくては・・・。

「手を出して！」何時になく強い言葉に俺は叱られているみたいだ。  
「ハイ！」血の色が嫌いな俺は右手をレイラにあずけて横を向く。

レイラはそつと包帯を外し、出血の危険を避けるためガーゼはそのままテープピングする。

俺はレイラの手元に見とれる。奴のテープピング技術はプロ並だ。  
グローブに右手を押し込む時には流石に痛みで顔が引きつった。

レイラに知られまいとするが思わず力が入る。

やっと押し込んだもののストックを持ってない。こうなると意地も面子もない。

「レイラ、悪い、ストックもテープで止めてくれ！」

「判った」俺の顔をちらりと見る。

レイラは俺にストックを持たせるとその上からテープを巻いた。

俺はスタートに向った。

俺のゼツケンにはレイラよりも大きいけど男子の中で3割以内に入っている。

それ程、コースも荒れないはずだ。

何時もなら点呼で脱ぐ上着だが、寒気がするのでスタートまで羽織っていた。

スタート前にウェアをレイラに渡し、俺はスタートハウスに入った。レイラがコース脇を俺の板を担いで飛んで行く。俺は深呼吸してスタートに付いた。

俺の頭は妙に澄んでいた。

スタートからゴールまで俺は本能のままに滑っていた。

ゴールで確認したタイムはトップとの差が思ったよりも少ない。

レストハウスに戻り、レイラに手伝わせてグローブを外す。

「アッ！」レイラが声をあげた。右手が血まみれだ。

レイラは俺の手を押さえつけ、消毒、ガーゼ交換を手際よく進める。

「レオ、無理だよ！病院に行こうよ！」

「判った！試合が終わったらな！」

俺たちは2本目の準備を始める。

レイラは俺の板も並べて手入れをしている。

「いいよ、自分で・・・」「駄目！」俺はレイラに怒鳴られた。

このようなレイラに逆らうのはご法度である。

レイラも俺も二本目を無難にこなして兎も角ポイントを獲得した。

ホテルに戻り、近くにある病院に飛び込んだ。

フロントから連絡を入れてもらったので処理が迅速だった。

俺の右手は再度、消毒薬で洗われ、痛い傷口をこすられた。

俺の右手を眺めながら「縫うかな？」と医師がいう。

「でも、試合が・・・」「圧迫帯とテープで止めてみる？」「はい！」

何となく違和感を感じてレイラを見るとクスクス笑っている。

俺ははっと気が付いた。この医者、日本人だ！

いつの間にか俺は英語から日本語にスイッチが変わっていた。

彼は俺の痛い傷口の周囲に薬を塗り付け暫く傷を見ていた。

刃の付いていないメスを傷に入れて切り口を内側に押し込んだ。

傷口を強い力で縦に引っ張り直接テープを張る。

痛いところをグリグリ弄られ、痛い傷を引っ張られ……

我慢の限界にきた所で手が止まった。

「指先は麻酔が効かないんだ。明日、見せに来られる？これが開くようなら縫うから！」

「開いたら、やり直し……」「そうだよ！試合に出るんだろ！」  
俺は体の力が抜けた。

「先生、テーピングの方法を教えてください」

レイラは薄いガーゼを当ててテーピングする方法を教わっている。

痛み止めと抗生剤を受け取り、ホテルに戻った。

ドーピングに引っかからない薬を使うから強い痛み止めは出せないと医者に言われた。

ズキンズキンと頭のでっぺんに痛みが響く。

食欲もなく、動くのが面倒くさい。

俺はレイラが買ってきたクラブハウスサンドを二人前食べてベットに入った。

兄貴の電話……と思いつつながら、薬が効いたのか俺はいつの間にか眠ってしまった。

目覚ましをレイラが止めたらしく、俺は寝過ぎした。

ヤバイ、慌ててチューニングルームに飛び込むとレイラが髪を振り乱して作業をしている。

「レオ、どう？大丈夫？」レイラが俺に気付いて顔を上げた。

「ウン、落ち着いたから大丈夫だよ！」

俺がチューン用具に触ろうとするとレイラに怒鳴られた。

「もう、終わっているから触らないで！」

何だって……？一人で何本の板を整備したんだ。

確かに、試合用も予備の板も整備が終わっている。

レイラにせかされて部屋に戻り、サンドイッチとコーヒード朝食。食べるにも、着替えるにも何時もよりも時間が掛かる。

何時ものバスに乗る。今日からはスラローム（回転競技）だ。大回転とは違い、ストックを使う割合が大きい。

「傷が開いたら二本目は駄目だからね！でも、レオはいつも二本目が無いよね！」

通常、小回りのスラロームは完走率が低い。俺は一本目で失敗する事も多い。

失敗すれば二本目は滑れない。レイラは完走率の低い俺に嫌味を言ったのである。

しかし、今回のレースは俺は絶対に完走したかった。

消息がわからないお袋が無事であることを願って完走を誓った。

俺が全部を完走する奇跡を起こせばお袋が笑って帰るような気がしていた。

女子、男子と試合が開始され、俺達は一本目を無事に滑り終えた。

「レオ、今日の滑りは大人しいね！痛みが酷いの？」

レイラが傷を気遣ってくれる。

スラのストックはガードが付いているのでテーピングがやり難い。

レイラが器用にグローブとストックをテープで巻き固定した。

俺は痛みを我慢してストックをテーピングしたまま手袋から手を抜いた。

傷の押さえは直張りのテープである。ガーゼがないので指が細い。テーピングしてもグローブに収まる指の太さである。

昨日の無理やり押し込んだ痛みを思い出して思わず身震いする。

レイラは実にかいがいしく俺の世話をする。

「レオは此处に座っていて！」

食事を取りに行くことも止められた。

俺の怪我に責任を感じているのだろう。

レイラが可哀相だが、考え事をしていたとも言えない。言えば兄貴との約束が怪しくなる。

二本目を滑り終わると流石の俺も疲れてぐったりした。

ホテルに戻り、病院に行つて、食べて、薬を飲んで・・・

俺は何も考えずにレイラの指示するままに動いていた。

「後一日、終わつたら帰ろう。」俺はレイラに言った。

「ウン！その心算で昨日、飛行機の手配しておいた。」

レイラは帰国便の手配も済ませていた。

週一本しかない、直通便に飛び乗る心算らしい。

終わつたら帰れる。

「良い滑りをしなくては・・・」

最終日、レイラは自分に言い聞かせてスタートに立った。

俺は何も考えずに体の反応するままにコースを滑った。

俺の分まで板の整備をしてくれたレイラの気持ちに応えたかった。

俺もレイラも記録を残した。年齢を考えれば上々の出来だ。

俺が滑り終わると試合結果の正式発表を待たずにホテルに戻った。

ホテルのフロントでホテル宛送られてきたという兄貴からの e - mail を渡された。

e - mail をホテル宛てに送り、宿泊者に渡してもらおうサービスがあるらしい。

俺が怪我したため、レイラが用具を管理している。

先にフロントに行つてキーを貰うのが幸いな事に俺の仕事になっている。

前回、電話をしたときに兄貴がフロントで聞いて、早速、利用しようだ。

兄貴からのメールには、お袋の雇った案内人から得た情報が書かれていた。

俺は自分が試合で全てのレースを完走した時にお袋の無事を確信していた。

兄からの連絡はお袋の無事を知らせるメールではなかった。

俺は何となく、神様に肩透かしをされたように感じた。

メールに目を通すと、帰国便をフロントに告げ、兄にメールで知らせるように頼んだ。

部屋に戻り、荷物をバックに放り込んでいるとレイラが戻った。

俺の着替えを手伝ってくれる。とりあえず、荷物を全部突っ込むしかない。

フロントから聞いた、バスの時間も迫っている。

レイラは髪をとかすこともせず、自分の荷物を仕上げ、俺を手伝った。

部屋がノックされた。出てみるとベルボーイが立っている。

俺が怪我をしている事を知っているフロントが手伝いに手配してくれたいらしい。

「ありがとう」緊張で顔が固かったレイラに笑顔が浮かんだ。

ベルボーイが手伝ってくれたお陰で、俺たちは飲み物を買ってバスに乗る余裕ができた。

空港へのバスの中で兄貴のメールを思い出していた。

後でレイラに見つからないように読み返そう。

「現地の案内人から次の連絡が来たら、情報を元に、俺も現地に向う。」

確か、メールの最後に兄貴が書いていた。現地って何処なんだ！！

俺は荷物も運べない不甲斐なさと、気になるメールを読めない事で苛立っていた。

空港に着くとバスの運転手が荷物を手押し車に積んでくれる。

ベルボーイが頼んでくれたらしい。俺が礼をいってお互い様だとにっこり笑った。

レイラが一人で走り回って、手続きを進めている。俺にできるのは荷物の番人、全く役にたたない。出発までの時間が思ったよりも短い、何時もだと時間を潰すのに苦労するのに……。

レイラに連れられて、荷物を預けた俺たちは出国ロビーに向った。

機内に入り、座席に着くとレイラがホツとした様子で俺を見た。

「間に合わなかったらどうしようかと思った！」

確かにタイトなスケジュールだ。通常は2時間前に空港に着く。この便に乗るならばバスも1本前が妥当だ。一時間程度で出国は慌しい。

空港でも何人かスキーを運ぶ選手が居たが、何れも女子選手だ。

男子は試合が終わるのが遅い。  
男子は試合が終わるのが遅い。  
離陸すると直ぐに機内食が出て来た。

狭い座席で右手は固定されている。機内食を開く事もできない。

思うようにならずにイライラする！

レイラは自分の料理を全て開き、一口大に切ってから俺のとトレイごと交換した。

スプーンだけで食べられるようになってる。

「サンキュー助かった！ 飢え死にするかと思った！」

レイラの顔が少し和んだ。

俺は何時もの通り、一人前を平らげ、レイラの分も手伝った。

食後の珈琲を飲み、リラックスしている俺にレイラが硬い顔で話しかける。

「ゴメンねレオ、あと少しの辛抱だからね！」

「何を謝っているんだ？」 「だって私が……レオに怪我させて……」

「」

「これは俺のドジだろう！俺がお前に迷惑をかけているんだろ！  
疲れただろう。重い荷物を一人で運んで・・・悪かったなあ！」  
「だって・・・、何かしてないと辛くって・・・ごめんなさい。」  
レイラの目から涙が溢れる。俺はいたたまれない気分だ。  
右側に座って良かった。俺はレイラの肩に左手を回した。  
「ごめんなさい。レオ！」レイラが俺の肩に顔を埋める。  
「バカ！お前のせいじゃないって！俺のドジなの！！」  
レイラは俺をびっくりさせて、怪我をさせたと思っ込んでいる。  
俺は確かに驚いたが、心が此処に無かった俺に責任があるのだが・・・。

レイラに何と説明できよう。さてよ！俺は何時レイラに知らせるんだ？  
帰国してから話すのか?????兄貴には帰国便を知らせてもらっ  
た。

だけど、兄貴の動きは俺には全く判らない。  
俺は未知数が多くて絶対に解けない連立方程式を出された受験生の  
気分だ。  
思考が飛び交い、パニックになっている俺は肩にレイラの涙のぬく  
もりを感じた。

食後に飲んだ薬の効果か俺は直ぐに眠り込んだ。  
どのくらい眠ったのだろう。軽食を準備する乗務員の気配で目が覚  
めた。

お茶とブランディケーキかスコーンが出てきた。  
俺は食欲が落ちているが、レイラよりは食べる。  
何時もなら、機内では俺が一人で二人前を食し、レイラが眠ってい  
る事が多い。

一人で食べる事もできないのでレイラが眠らずに俺の世話を焼く。  
レイラの分まで食べた俺は音楽を聞きながらウトウトしていた。

レイラの寝息が聞こえる。

俺はレイラが眠り込んでいるのを確認して兄貴のメールを開いた。案内人からの連絡が箇条書きにまとめてある。

お袋の依頼を受けて、遺跡を案内すべく乗り物を準備して待っていた。

遺跡までの移動距離があり、到着までには2日くらいかかる。

移動の途中（2日目）にお袋が体調を崩した。

引き返すにも時間がかかる。

近くにあった軍の施設に運び支援を要請した。

お袋は軍の手配で都市の病院に運ばれた。

自分は軍に断られて付き添えなかった。

今、収容された病院を探している。

情報がわかり次第連絡をいれる。

俺は状況を把握しようと目を閉じて集中した。

「何なの！」「痛っ！」

レイラに左手のメールをひったくられ取り戻そうと思わず右手が動いた。

勿論、メールは取り戻す事はできず……。俺は青くなった。

ヤバイ！俺は恐る恐るレイラの様子をうかがった。

「・・・」レイラの視線が二度、三度、メールの上を走る。

レイラの顔から血の気が引き、体に緊張が走るのが判る。

レイラの反応は見なくても判る。俺は目を閉じた。

来るぞ・・・思わず体に力が入る。

「レオ君、これはどういうことなのかな？」「・・・」

「判るように説明しなさい。レオ！」「・・・」

俺は左手をレイラの肩に回した。レイラは震えている。

アイツの緊張が俺に伝わってくる。

「判らない！」「えっ？」「俺にもわからない！」「・・・」  
「出発間際にホテルで兄貴のメールを受け取った。  
書いてあるのはそれだけだ。何が起こっているのか判らない」  
「だって・・・」「帰ればもう少し詳しい情報が入るだろう」「・・・」  
「日本に着いたら兄貴に電話してみよう。兄貴も情報が無いと書いてる」

レイラが俺の頭を引き寄せ、自分の額と俺の額をくっつけた。  
幼い頃から、俺たちは二人で何かを考える時に頭脳を合体する。  
頭と頭を寄せ合い、目を閉じると相手の思いが伝わってくる。  
最初に感じたレイラの怒りは直ぐに消えて不安がレイラを満たした。  
「日本についてから・・・」「そう、日本に着けばきつと判る」  
俺たちは声を出さずに会話をしていた。

レイラの不安が溢れる・・・  
「つう・・・」思わずに手を差し伸べようとした俺は痛みに顔が引きつった。  
また、右手を使ってしまった。レイラの不安が心配に変わった。  
レイラは俺の痛む右手にそっと触れ、俺の顔を見てうなずいた。

俺とレイラは並んで座ったままお互いの肩を寄せ、頭をくっつけた。  
俺の左手をレイラの右手の上に重ねる。  
幼い頃からの癖で、こうするとお互いに落ち着くから不思議だ。  
小さい時には俺達は心細い時、困った時こうして一つになっていた。  
俺の頭の左側とレイラの頭の右側を付けて寄りかかり合う。  
何年ぶりだろう、俺はとても懐かしい気分になっていた。

俺の方が背が高くなったので多少、頭の位置が高い。  
当時は背丈も・・・レイラの方が大きかったかも知れない。  
兄が学校のキャンプで留守の日に母の帰りが遅く心細かった時。  
一人では不安なのだが、こうすると相手に寄りかかっている。

俺は目をつぶった。レイラも目を閉じた。

お互いに眠っていない事は判っていた。

機内食が運ばれてきた。

レイラはトレイを受け取ると、俺のために準備をしてくれた。

俺は悩みがあっても食欲は落ちない。「レイラ、これ、食べてみ！

結構美味い！」

ニュージールランド航空の機内食は結構いける！！

レイラは殆ど手を付けずに、俺の為に食べやすくした機内食を俺に回した。

レイラに知られたのが今日であったことを神に感謝した。

もし、知って直ぐに話していたら試合どころではなかった。

成田に着けば、もう少し状況も判るだろう。

食欲のないレイラの分までしっかりと始末した俺は……。

レイラの様子を横目で見ながら成田到着後の手順を考えていた。

まずは入国審査、荷物の受け取り、電話するなら外に出るからか……。

兄貴に電話して……。自宅か携帯か……。

既に現地に向かっている可能性もあるのだろうか？

現地向かうなら、兄貴の事だから航空会社のカウンターに手紙を預けるだろうか？

機体が高度を下げ始め成田が近づく。

レイラの緊張が高まるのがわかる。

定刻よりも20分早く、成田に到着した。出発は10分遅れだったのに……。

レイラが執念で飛行機を急がせたような気がする。

入国手続きがもどかしい。荷物の受取もイライラする。

……と言っても片手の使えない俺は荷物の番人だ。

二人分の荷物を山のように積んだ重いカートをグイグイ押すレイラの後ろに従う。

ゲートを出たら右手に電話があるはずだ・・・と記憶をたどりながらゲートへ！

「レオ！レイラ！」ゲートを出た途端に声をかけられ、俺達の目が泳いだ！

兄貴だ！兄貴が俺を迎えに来ているって事は・・・。

レイラはグイグイとカートを押し、兄貴にぶつけそうになって止まった。

「お兄ちゃん、ゴメン！」レイラの第一声である。

「ごめんって・・・」目を白黒させているナオ。

「ママは？ママはどうしたの？」

レイラは溢れる涙をぬぐおうともせずになオに迫る。

「ママって・・・」焦って、俺の顔を見た兄貴に俺は言葉を選んで言った。

「兄貴が俺達に送ってくれたメールを飛行機の中で読んだんだ」

それだけか？兄貴の目が俺に尋ねた。俺は大きくうなずいた。

兄貴は自分が送ったメールの内容を思い起こしているようだ。

「お袋がカンボジアの遺跡を見に行く途中で倒れて病院に運ばれたって・・・」

兄貴が説明しようとする声を遮り、レイラが迫る。

「ママは？ママは無事なの？」「だから、俺にも情報が・・・」

「ゴメン、私、レオに怪我をさせて・・・」レイラが兄貴の胸に顔を埋めて泣き出した。

あのやるう！俺の時は肩なのに・・・とくだらないことを考えた途端に罰が・・・。

レイラが崩れ落ちる。咄嗟に支えようとした兄貴の手をすり抜けた。間一髪、俺のレシーブが間に合った。双子には別の勘が働く。

レイラが頭を打たないように俺は右手をレイラの下に差し込んだ。

「ギヤー！痛つてーえ！」俺は・・・思わず声を上げたが、レイラは離さなかつた。

「ナイスカバー、レオ！」ナイスじゃないだろう全く。

レオは俺の右手の下に手をいれレイラを抱えあげた。

俺の右手は再度、レイラとナオの挟み撃ちにあう。

「押して来い」兄貴は俺に声を掛けるとレイラを抱いて近くのベンチに向かつた。

俺は握ると押せず、握らないと進まないカートと悪戦苦闘した。

レイラの顔色は真っ青だ。疲れとショックで貧血をおこしたらしい。

俺がカートを操れずに四苦八苦ししているのに気付いた兄貴はやつと俺の右手に目を留めた。

「何やったんだ？お前は・・・？」「エッジで切つた」「試合でか？」

「いや！チューンしていて・・・」「ドジ！」「ウン！」

レイラは・・・俺たちの声が聞こえたのかゆっくり目を開いた。

誰が知らせたのか、空港の係員がやってきた。心配する係員に兄貴が説明した。

「多分、疲れて軽い貧血を起こしたのだと思います。」

レイラが落ち着くのを待つて、兄貴が車を回してきた。

空港係員もカートの押せない俺と足元がふらつくレイラと山積みの荷物の異動は断念した。

車が停車できるよう、表で兄貴の回してきた車を誘導してくれた。

荷物を積み、レイラを支えながら車に運ぶと一緒に後部座席に乗り込んだ。

「ココアが買ってあるから、レイラ！受け取って！」

レイラが缶のココアドリンクを受け取り一口飲み込む。

自分でも何かを口にしたほうが良いと思うのだろう。

兄貴が空港線を途中で逸れた。

「どこかに寄るの？」「ホテルを押さえてある。」「私なら大丈夫よー！」

「無理をしなくてもいいよ！今日は成田で泊ろう」

車を取りに行ったときに予約したのだろうか？やけに手回しが良い。ホテルの部屋は和洋室と呼ばれるファミリールームだ。部屋に入るとレイラをベットに休ませた。

「食事は？」「もう少し、落ち着いてからでもいいかしら？」

「ああ！レオは？」「俺、腹減った！」

俺は兄貴の目配せの意味を察して腹ペコを主張する。

「二人で食べてくれば？私は後で良いから、レオはもう一度、食べれば良いでしょ？！」

「ウン、何か買ってこようか？」「いらない、私、少し眠りたい」

俺と兄貴はホテルのカフェテリアに移動した。

兄貴はピサと珈琲を注文し、俺はスパゲティとアイスコーヒを注文する。

「お前は大丈夫なのか？」兄貴が俺の手に目をやる。

「ウン、切ったときはヤバかったけど、血も止まったし・・・」

俺は自分の手を・・・まずい、包帯に血がにじんでいる。

さつき、レイラを支えるのに捨て身のレシーブをしたからか・・・

「後で、見てやるよ！」兄貴も血のにじんでいる事に気が付いた。

お袋の消息は情報が交錯して現状が把握できないという。

現地の案内人からは「お袋が見つかった」とか「連絡が取れた」と知らせが来たが不明瞭。

飛行機で帰国させるといふ知らせがハノイから入ったが、出所が良く分からない。

ハノイはたしかベトナムの大都市だ。

お袋はアンコールワットに行っているから、カンボジアに居るはず。カンボジアからだタイのバンコク経由が一般的なルートだ。

案内人は英語と日本語とフランス語を酷使して電話で説明するらしい。

・・・それで、兄貴は22時に到着するハノイ便を待ちたいらしい。レイラを連れて出かけるのは無理なので、俺がレイラと残る事に兄貴と話が着いた。

兄貴は友人と会うと行って出かける事で話を合わせる。

話をしながら、何時の間にかスパゲティが無くなり、兄貴のピザにも手を出す。

「相変わらず、良く食うなあ〜」兄貴に呆れたように言われた。

「その手は何時、怪我したんだ？」「連絡を貰った翌朝！」

「何でレイラがお前に怪我をさせたと言っているんだ？」

俺は自分が考え事をしながらチューンをやっているレイラに声をかけられた、

あの朝の一部始終を兄貴に語った。

「怪我の功名かもしれないな。怪我をしていなかったらレイラに気付かれたらう」

確かに兄貴のいうとおりだ。元気が無い事も、滑りが大人しいのも怪我の性にできた。

普段ならレイラが俺の様子に気付かないはずがない。

俺たちはレイラを起こさないように部屋に戻った。

兄貴がパソコンを取り出し、ネットワークに接続してメールをチェックする。

もし、お袋が本当に今日帰国するなら本人から電話かメールがあるはずだ。

ハノイからの通知というのが良く分からない。

あまり、上手くない英語で電話があったらしい。

若い女性らしい声で「飛行機に乗せるから」とだけ・・・？

「戻ってたの？」レイラの声に兄貴が慌ててパソコンを操作する。

「どうだい！調子は？」「ウン、眠ったら、落ち着いたから・・・」

大丈夫！」

「何か軽くでも食べた方がいいな！ルームサービス頼もうか？」

「レオ！どうしたの？手を見せて・・・」

俺は思わず、右手を後ろに隠した。

「ああ、レイラ、俺が見てやるから大丈夫だ！一寸、動かしたから・・・」

ナオがホローしてくれた。

「どうする、食事に行くならしたくしろ！俺はレオの包帯を交換する」

俺達はお袋の勧めで一応、日赤の救急講習を受講している。

でも、自分の傷を手当てするのは難しい。

「和食が食べたいかなあ〜！」レイラが起き出し、荷物をかき回している。

着替えと一緒に医療セットを取り出し、ナオに渡す。

「手を出せ！」レイラと違って兄貴は手荒だから・・・。

「優しくね！そつと！」馬鹿！何がそつとだ！ドジした癖に、バ

カだなあ〜」

包帯をぐるぐると手荒く外したが、ガーゼは消毒薬をしみこませて外れるのを待つ。

俺は力ずくで引き剥がされるかとヒヤヒヤしたが、それはなかった。

「ほお〜う！綺麗に真っ直ぐ切ったなあ、逸れたら腱がやられたぞ！」

「やられると、痛いってこと？」指が曲がらなくなるって事ですよ！」

俺はぞくぞくして来た。確かに見事な深い傷だったけど・・・。傷口をそつと見ると第一関節よりも下は殆ど細い線になっている。指先の膨らんだ部分、丁度、ふくらみの頂点部分が1cmくらいの長さで開いている。

「良かったな、これなら消毒して傷の固定テープで大丈夫だろ！」

しかし、俺が抱きとめられなかったのによく、レイラを受け止めたなあ〜」

「そりゃ、レイラの動きは直に伝わるさ！」

「えっ！レオが受け止めてくれたの？」

「そ〜だよ！この右手で！」言っただけからしまったと思うがもう遅い！レイラの目に涙が・・・「ゴメン、レイラ！悪かった！もうしません！こめんなさい！」

レイラが泣きそうな顔で笑った。「ありがとう」

「寿司か、天ぷらか、とんかつか・・・」俺がホテルのレストラン案内を見ていると、

「蕎麦そばという選択せんたくし肢しはないの？」とレイラ！

「えっ、蕎麦？」俺は情なさけない声をだした。

「わーい！嘘うそだよ！レオが蕎麦そばで足りるはずないよね！」兄貴とレイラが俺の顔を見て笑っている。

「いいよ！蕎麦屋そばやだって、俺はカツ丼を食べるから！」

「レイラは何を食べたいんだ？蕎麦そばか？寿司か？」

「私、天ぷらが食べたい！」

レイラのお陰で俺はホテルの名店街にある老舗しにせの天国てんぐにで天ぷらにありついた。

部屋に戻ると、「俺、友達に会いに出かけてくる」と兄貴が言い出した。

予定通りの会話だ。

「私も行く。連れて行って！」想定外そつていがいの一言に俺は慌あわてた。

「お前は調子が良くないのだから、俺とホテルでゆっくりしようぜ！」

「レオは行きたくなければ待っていたら？嫌いやなの何かしていないと・・・不安ふあんなの」

「だったら、トランプとか・・・」「レオの馬鹿！」

「判った！但し、便名があやふやだから空振りかもしれないよ！」  
「ウン！」

レイラは何かを察しているのだろうか？俺は勘の良いレイラが怖くなつた。

「レオ！お前はどつするんだ？」  
「行くよ！勿論、此処にいても腹が減るだけだから・・・」

「お前は食べる事ばかりだなあ！」

俺達はシャワーを浴びて、空港へと兄貴の運転で引き返した。

定刻よりもハノイ便は30分遅れている。これでは23時を過ぎるだろう。

空港へは22時過ぎに付いたが、コーヒーショップで時間を潰す。話すことがないのでニュージーの話題に・・・。

「ナオ！聞いて、レオったら4試合完走なの！新記録だよねえ」

「本当か？暴走族のお前が・・・？」

「人間き悪いなあ。俺だって、完走するつもりで滑れば・・・」

「じゃあ、何時もはDF（Don't Finish）のつもりで滑るの？」

「違つよ！勝負を掛けるんだ！」

「奇跡を狙つても、技量以上の滑りはできないだろう！」

どうも分が悪い。

「待ち人は男？女？」俺は思いつきり意地悪な質問をしてやった。

「女性だ！」兄貴がきつぱりと答える。今度は俺が焦つた。レイラも驚いている。

「その方、美人なの？」  
「勿論！お前ぐらい美人だ！」

「ええっ！恋人なの？」  
「大切な人だ！」

俺は兄貴とレイラの会話をはらはらして聞いた。

「そろそろ行かない？」  
23時近くなり、店も人が少ない。

俺達が席を立つと、待っていたようにウェ이터が片付けに来る。

俺達は入国ゲートで、出てくる人を見守った。  
俺はいつの間にか手を組み、心で祈っていた。

困った時の神頼みってどうか・・・迷える子羊になっていたとい  
か・・・。

若い綺麗な女性が通過するとレイラが探るように兄貴を見る。

兄貴は平然と構えている。

ハノイ便は既に到着し入国手続きが終了している。

出てくる人もまばらになった。

「待ち人帰たらず」レイラが呟いた。「いや、もう少しだけ！」兄  
貴が答える。

15分が経過し、ゲートは人が殆ど通らない。

「帰ろう！」俺が言い、兄貴も頷いた。「母さん！」兄貴の声に俺  
達は振り返った。

ゲートからザツクを背負って早足にお袋が出てくる。一回り小さく  
なったような気がする。

「ママ！」レイラが固まっている。「母さん。こっち！」兄貴に呼  
ばれて母が立ち止まった。

兄貴は母の荷物を受け取り、「何があつたの？」一番聞きたかつた  
事を尋ねた。

「ママ」兄貴を押しつけてレイラが母に抱きつく。

「何？皆で迎えに来てくれたの？」「皆でじゃないぜ！全く・・・。  
」

「ホテルに帰ってゆっくり話を聞くから・・・！」という兄貴にお  
袋は・・・。

「あら、ホテルを取ったの？悪いけど、私は今日中に家に戻らない  
と明日の仕事が・・・」

兄貴の握り締めたこぶしが震えている。

「母さん、兄貴は心配していたんだ、俺達も・・・」

「えっ？ばれちゃったの？」

「バレンタじゃないだろう、レイラだって倒れるほど心配したのに！」  
兄貴の感情を抑えた低い声にお袋は全てを察したようだった。

「ナオ、パソコン持ってきた？」「ああ」

「判った、今日は一緒に泊まる。後でパソコンを貸して！明日休むから・・・」

母は泣きじゃくるレイラの頭をなぜながら兄貴に回答した。

車では俺が前に乗った。レイラは母をしっかりと掴んで離れない。

ホテルに戻り、部屋に入ると・・・

「何があつたのか、説明してくれないかなあ」と兄貴が言った。

「5分、待つてくれる？シャワー浴びさせてよ！お願い！」

「シャワーぐらい待つから10分でも20分でも浴びておいでよ！」  
兄貴も一寸、顔がほころんだ。

お袋がシャワーを浴びている間にレイラがルームサービスで珈琲と  
サンドイッチを頼む。

コーヒーが届くのお袋がバスルームから出るのと同じぐらいだった。

珈琲を飲みながら「ああ美味しい、ホツとするわ。ところで何処から  
情報が入つたの？」

逆に兄貴にたずねた。

現地のガイドと名乗る男性から電話が入ったが、状況がよく判らな  
かった事。

ハノイからだという女性の電話の件、兄貴が説明した。

「そう、心配を掛けて悪かったわね。ごめんなさいね。」

お袋は事の次第を語り始めた。

どうしても見たいクレール文明の遺跡があった。

その遺跡はカンボジアから向かうよりベトナムから入った方が近か  
った。

そこで現地のガイドに案内を要請した。

最初は期間が7日では厳しいと言ったが、結局は引き受けてくれた。現地に着くと乗り物を準備してガイドが待っていた。

その乗り物は馬だった。馬に乗ってジャングルと草原を移動した。ジャングルや草原と言っても地雷があるので道は外せない。

くねくねする道をひたすら進んだ。ジャングルは日陰もあるがデルタ地域は日陰がない。

熱帯では12時から16時ごろは気温が高いので普通は外には出ない。

早朝と日が傾いてから異動するのが鉄則だ。

期間が短いのとルートに日陰が少ない事から日中も異動する強行軍になった。

水分は意識して摂取したが、オフィスはコンピュータを使うので冷房が強い。

冷房環境で生活しているので汗がかけない体質になっている。

乗馬は好きだから馬での異動は全く苦痛ではなかったが暑さが厳しかった。

二日目の異動中に意識が朦朧として来た。

それでも、頑張っていたのだが、そのうち意識が遠のき落馬した。軍隊の施設に運び込まれて、救急処置を受けた。

「飛行機でハノイに運んでやろうか？」と言われたので賄賂を渡して乗せてもらった。

ハノイの病院に収容された、水分を点滴で補った。

体調が戻ったのに退院させてくれなかったから賄賂を渡して退院した。

仕事に間に合うようにリミットで戻ってきた。

飛行機まで看護婦が送ってくれたのは賄賂を受け取った病院の手配だった。

日本に連絡が入っていると思わなかったので電話はしなかった。

看護婦が心配してくれたので女性の電話は彼女だと思う。

「二万円で2日間の乗馬異動が1時間になるなら、次は2万円払うわ！」  
「というお袋に兄貴が言った。  
「俺達がどんな思いで連絡を待っていたと思うんだ。こんな無茶な事」

兄貴の声が震えている。

お袋は叱られた子供のようにはぐり下を出しうつむいた。

「ごめんなさい。もうしません。次は別のルートを探します。」

きつと、本人が無茶だと思っていないからこの人はまたやらかすの  
だろう。

俺はお袋の「もうしません」を俺の「もうしません」と同程度と理解した。

レイラが泣きながら「もう嫌だから・・・」とお袋にしがみつく。

お袋は判ったというようにレイラの頭をなでた。

こうして、俺達の素晴らしい夏休は幕を閉じた。

お袋は約束どおり次の日は休み、職場に電話とメールで指示を出していたが、

休む理由は俺が手を切ったので病院に連れて行くという理由だった。その翌日は職場に出かけ、夜中まで戻らなかった。

疲れたとは意地でも言わないが、お袋の体力は落ちているように思う。

兄貴や俺、レイラの心配をよそに、鬼婆はマイペースを取り戻している。

俺たちは相変わらず婆の奔放な性格に振り回されている。

## 天使の置きみやげ（前書き）

進学に悩み、スキー選手としての可能性も試したい俺。とりあえず、スキーシーズンが終わってから・・・と考えた俺たちに降りかかる運命。10年ぶりに抱き合って泣いた俺たち。

## 天使の置きみやげ

俺たちの秋は短い。

早い年では11月末には雪が降る。

雪の季節になると俺たちは試合を転々とする。

本格的なスキーシーズンが12月には始まる。

進路も決定しなくてはならない。

俺は内部進学クラスだが、クラスメイトの4割は受験する。

進学と言われても人事のようだ。

妹のレイラは俺よりも成績も良いが学校も名門だ。

そのまま大学に行くのだろうか？

何でも知っているようで進学の事など話したことがない。

最近では家でもあまり話をする時間がとれない。

何時か聞いてみようと思いつつ、シーズンに入った。

12月の北海道キャンプに俺たちは参加した。

試合前日のチューンをしながら俺は思いついて声をかけた。

「レイラ、お前は進路、決めた」「ウン」

「受験か？」「ウン」「どこを受けるんだ？」「T大」

俺は驚き、危うく手を滑らせそうになり、作業を止めた。

俺の慌てふためく様子を見たレイラはクスクス笑いながら……。

「ウツソ！オ！嘘だ。ピョーン！」「こいつ！」

俺が頭を殴るフリをすると、「ごめんなさい、もうしません」

と俺の何時もの台詞を言い、舌を出した。

「レオは決めたの？」レイラに聞かれて俺は首を横に振る。

「私はこのシーズンが終わったら決める」

なんだ、レイラも決めていないのか……。

「工学部だったら受験しないと学部がないから・・・」  
確かにレイラの通うお嬢様学校に工学部はない。

何だと、工学部だ！女だてらに工学部を受けたいと・・・。

「工学部に決めたのか？」「べつについ！まだ決めていないって！」

俺はなぜかそれを聞いて安心した。そして進路の件はしばし封印した。

俺にはもう一つ、試したい事があった。

自分がスキーで何処まで通用するのを知りたいと思った。

冷静に考えてみて、俺のレベルは国内の大会までだと思っていた。

どんなに頑張っても世界に通用するレベルでない事は判っていた。

ベストが何処まで通用するかを知り、納得したかった。

例年通り、北海道シリーズから俺たちのシーズンは始まった。

インターハイ予選、国体予選と俺もレイラもそれぞれの県で代表権を獲得した。

関東大会では、レイラが回転競技で優勝、大回転で準優勝と抜群の成績。

俺も回転で6位、大回転では3位と実績をあげた。

しかし、インターハイや国体では地元の強豪、北海道勢の中では上位に食い込めない。

レイラが13位に入賞したが、俺は18位と入賞を逃した。

シーズンの終わりには進路も出さなくてはならない。

スキー競技での成績でスポーツ推薦が取れると思う。

確かに好きなスポーツではあるが大学の4年間を競技スキーだけに明け暮れるのか？

と聞かれると、俺は肯定する自信がない。

好きなスポーツに進路を絞るべきか？体育を選考するべきか？それ以外を選ぶか？

他のことをやってみたいという気持ちも強い。

兄貴に相談すると・・・自分とは条件が違い過ぎると言う。

「俺は好きな科目から進路を決めた、お前の好きな科目は体育だろ？条件が違うなあ」

確かに体育を専攻せんこうすれば進路は決まるが・・・就職も限られる。

体育は好きだが体育の教師になりたいわけではない。

アスリートとして自分の可能性を世界に求めるだけの技量があるとは思えない。

もっと、別の分野で自分の可能性を知りたい。自分に何ができるのか・・・。

レイラは好きな科目から方向を出す心算らしい。

シーズン終盤しゅうばんになると、方向の決まらない自分に焦りあせりを感じ始めた。

仕方なく、俺は最後の手段としてお袋に意見を求めた。

「何処どこでもいいよ、入れる大学に入って、それからやりたい事を探せば！」

俺はガーンと頭を殴なぐられたような気分だ。

大学に行くには方向を決めて学問の分野を決め、目的を定めるべきだと思い込んでいた。

婆に言わせると、高校生で自分の人生目標や、やりたい職業など見つかる人は少ない。

社会人になってから方向転換ほうこうてんかんする人も居る。今、決まらなければ大  
学で探せばよい。

やりたい事が見つかったら、卒業するまでに準備をすればよい。  
更の上に進むもよし、やりたい仕事を求めて就職するもよし。

一つだけ条件をつけるならば、大学に進学するなら4年で卒業する  
のが学費を出す条件。

お袋の意見を聞いて何だか、気持ちが楽になった。

俺は腹をくくって高3でもスキーを続けようと決めた。

お陰で、おれは高校2年の大会を楽しむ事ができた。

去年は悪夢を見た期末試験も今年は少しづつ準備を進めていた。  
去年のような修羅場にはならなかった。ヒマワリの援護射撃にも助けられた。

期末試験後にキャンプに戻り、気が付くと3学期は終わっていた。  
春の新人戦とFISの最終戦が終わり、俺たちは家に戻った。

戻った翌日が始業式というか、新学期初日に間に合うように切り上げたって所だ。

いよいよ、高3である。

今年は俺もレイラも始業式が同じ日だった。

暦の関係でそれぞれが月曜日の始業式だった。

最も、試合が終わって日曜日の深夜に帰宅した俺達だ。

始業式では校長の子守唄を聞き、寝なおしたくて悪友の誘惑を振り切り帰宅した。

レイラより先に家に着いた俺はまずは食料を漁る。腹が減っては眠れない。

俺が好物のフライドチキンを温め終わったところにレイラが帰宅する。

「ただいま〜あ」「お帰り!」タイミングが悪いなあ・・・。

俺は気が進まなかったが、一応、レイラにもチキンを勧めた。

「食つか?」「ありがとう、でもお腹が空いていないから・・・」  
ラッキー、全部食べるぞ!(心の声!)

レイラはテーブルの上に置かれた自分宛の手紙を嬉しそうに手に取った。

手紙を手に、窓に近づくとカーテンを開けた。

ポストから俺が持ってきたので、誰から手紙が届いたのかは知っている。

レイラの若いボーイフレンド、アキラからの手紙だ。  
ボーイフレンドと言っても4歳年下の車椅子くるまいすの天使てんしである。  
高1の時にボランティアキャンプで担当した少年アキラである。  
あの時は付き添った俺たちがアキラから多くを教わった。  
アキラとはその後も病院や自宅を訪ねて、何度か会っている。  
3月にも試合の合間にレイラとアキラの家を訪ねた。  
レイラはアキラの誕生日祝たんじょうびいにアキラが欲しがっていた聖書をプレゼントした。

俺は最近流行の音楽をピックアップしてCDに焼いて持って行った。  
アキラが俺の好きな音楽を聴ききたいといったからだ。  
俺はアキラに頼まれて彼の弟とキャッチボールをした。  
自分は相手をできないから、代わりに相手をして欲しいと言っのがアキラの頼みだった。  
キャッチボールをしている俺たちを、レイラと車椅子のアキラが見ていた。

ゾクッと寒さむけ気を感じて、俺は我に返り（チキンをくわえたまま）レイラを振り返った。  
レイラの手から手紙が離れてひらひらと落ちた。  
レイラが両手で顔を覆おほって、スローモーションのように座り込む。  
ヤバイ！咄はな嗟なげに俺はダッシュしてレシーブし、レイラを支えた。  
俺はレイラを抱かかえて、ソファアに寝かせる。顔が青ざめ、呼吸が速い。

冷やしたタオルを持ってきて、レイラの額ひたいに当てた。

「どうした、貧血か？寝不足だろう！」

「アキラが・・・」レイラ目から涙がこぼれる。

俺はレイラが落とした手紙を拾い、二人宛てに書かれているアキラのママの手紙を読んだ。

-----

試合でお忙しい時期にアキラのわがまままでご訪問いただきありがとうございます

うございました。

今回のアキラの退院は本人が希望した「家に帰りたい」という最後のわがままでした。

私達、家族もアキラの最後の時間を家で過ごさせてやりたいと考えておりました。

お二人に無理をお願いして、お尋ねいただいたのもアキラがお会いしたいと申したからです。

アキラはレオ様に自分の代わりに弟とキャッチボールをお願いいたしました。

あの子が弟と一度もできなかったキャッチボールの夢を叶えていたかったです。

アキラは、お二人の公式戦の結果をインターネットで調べ、一喜一憂しておりました。

「お二人に連絡して呼んであげようか？」とたずねて、私はアキラに叱られました。

試合が続く時に余計な事を気にしたら、成績が出ないからと申します。

あの子は自分に縁の無い世界で活躍するお二人の成果を自分の事のように喜んでいました。

この手紙はアキラが送ると言っていた、その日に、私が投函しました。

アキラの中学校は3月24日が終業式でした。

在籍する養護学校の先生が成績や連絡書類を持参して尋ねて見えました。

アキラは車椅子に座る事もできないほど体力が落ちておりました。家族と先生に見守られ、アキラはベットの上で嬉しそうに成績を受け取りました。

殆ど授業にも出席できない一年間でした。4月からはアキラも中3です。

普通であれば進学について相談する時期なのでしょう。高校入試を控えています。

幸せな事にアキラの場合は現在の養護学校の高等部への推薦がいただけることになりました。

先生はその進学希望書類をお持ちになり、私とアキラはその場で記入しました。

早く高校生になってネクタイをしたいとアキラは楽しみにしていました。

そんな日が来れば良いと私達家族も夢に描いておりました。

その夜、アキラは旅立ちました。

「ママ、ごめんなさい、僕、高校の制服は着られない。ママお願い泣かないで。」

悲しまないで、僕は神様のところに行くんだよ。天国で走るんだ」

あの子の目は澄んでいました。私と夫が手を握り見送りました。

私があキラを丈夫な体に生んでやれなかったのに、あの子は謝って、笑って去って行きました。

最後まで辛くと言わずに、静かにアキラは神様の元に旅立ちました。

枕元にはレイラ様から戴いた聖書とお二人のお写真がありました。

お二人に出会ったのはアキラが小学6年生の夏でした。

そのとき既にアキラは「来年はない」と医師に余命を通告されておりました。

少しでも普通の子供と同じ体験をさせたいと危険を承知で送り出したキャンプでした。

お二人との出会いがあキラにとって、どれほど支えになった事でしょう。

夜、外に出て眺めた満点の星空。風を切って走った忘れられない思い出。

嬉しかったのでしょうか。何度も何度もあの日のことを思い出しては話してくれました。

アキラはお二人のファンであり、お二人はアキラの憧れでした。

レオ様を兄のように慕い、弟に自分が兄らしい事ができないと心を痛めていました。

弟とのキャッチボールをお願いしたのもアキラの最後の願いでした。アキラはレイラ様に少年として憧れておりました。

体格は小学生と変わりませんが、アキラも中学生です。

美しいレイラ様に淡い恋心を戴いたのでしよう。

レイラ様のことを頬を染めて話す時、あの子の目は輝いておりました。

お二人と知り合ったことであの子は短くても輝く人生を送る事ができました。

親にできない多くを与えていただきました事、感謝しております。

- - - - -

俺は一度読んだだけでは意味が判らず、二度読み返しやっと理解した。

アキラが死んだ。3月には元氣そうにニコニコと笑いかけていたアキラ。

最後の退院だったなんて・・・俺たちは何も気付かなかった。

俺たちが尋ねたのはアキラが亡くなる数日前である。

既に車椅子に座っているのも苦しかったに違いない。

アキラからレイラと俺のそれぞれに宛てた手紙があった。

俺には、自分の代わりに弟とキャッチボールをしてくれた事の礼が書いてあった。

他の人には頼みたくなかったけど、俺だから自分の代わりに頼めたと書いてある。

何度も尋ねてくれたことへのお礼が書いてある。

僕達の話を書くことで自分も普通の中学、高校の生活を疑似体験した。

試合で活躍したことを知るのが自分の事のように嬉しかったこと。

自分が死んでも悲しまないで欲しいと、自分は天国に行くと自由に

なる。

神様が自分に与えた使命を果たせたのか不安だけど、自分の仕事は終わった。

神様に命を返して天国に行くのだと・・・。  
自分が病気だったために母を取り上げ、可哀相だった弟のこと。  
キャッチボールの思い出を弟に残したかったこと。

心配してくれた父と母には自分は天国に行けば走れるようになる。  
「何もできなかったけど僕の人生に価値があったのでしょうか？  
僕が死んだ事で悲しまないでください。僕は幸せでした。」

アキラの手紙に俺は涙が止まらなくなつた。  
辛かつたらう、苦しかつたらう、そんな状態なのに・・・。  
アキラは試合で疲れている俺に弟の相手を頼んで良いかと気遣つてくれた。

車椅子に座っているだけでも辛かつたに違いないのに・・・。  
「握手して！」別れ際にアキラが言った。

力なく握り返したアキラの小さな手のぬくもり。  
レイラの手を握り、頬を染めたアキラの思い。

アキラは最後の別れをしたかつたのかも知れない。  
気付いてやれなかつた、自分の不甲斐なさを俺は情けなく思つていた。

俺は10年ぶりにレイラと抱き合つて一緒に泣いた。

悲しくて、辛くて、泣くなんて久しく無かつた。

俺たちはアキラを思い、声を上げて泣いた。

俺たちは泣きたいだけ、泣いてすこし気持ちが悪く落ち着いた。

「顔を洗つて来る」俺はレイラに声をかけて洗面所に向つた。  
冷たい水が泣いた後の目にしみる。

何度か水を顔にたたきつけ、まぶたの腫れも落ち着いた。  
レイラの元に戻ると、奴はほんやりと宙を見ている。

「立てるか？」レイラは焦点の合わない視線を俺に向けて頷いた。

「顔を洗って来い。出かけるぞ!」「えっ?」「アキラの家に行く」

レイラは驚いたように俺の顔を見ると直ぐに洗面所に向った。

俺はアキラの訃報と、レイラとアキラの家に行く旨を兄貴とお袋にメールした。

お袋からは即答で直ぐにタクシーで向うように指示があつた。

俺は家の近くでタクシーを止め、レイラとアキラの家に向った。

アキラの家は電車では遠回りになるが、自転車なら山を越えて15分である。

今のレイラを見ると、とても自転車に乗せられない。流石、お袋は判っている。

タクシーの中でレイラは俺の手を握り締めていた。

奴の震える心が俺に伝わってくる。必死で保っているレイラの気持ちを感じていた。

何故か俺にはレイラの不安や苦しさが伝わってくる。それが嬉しくもあり辛くもある。

双子と言つのは皆、そうなのだろうか?今の俺にはレイラの心が重かつた。

玄関に立つ俺たちの姿に、アキラのママはちよつと驚いたようだった。

後ろから走り出てきたアキラの弟が、振り返つて大声で告げた。

「お兄ちゃん、レオ君とレイラちゃんが来たよ!」

俺たちもアキラのママも固まった。叫んだ本人も固まった。

「ごめんなさい。まだアキラが居ないことに慣れていなくて・・・」  
ママが言った。

ママの目に涙が浮かぶ。「おば様」レイラがママに抱きついた。  
抱き合つて泣いている。二人を悲しい顔で弟が見上げた。

俺は彼を抱きしめた。きつとアキラなら兄として弟を抱きしめたに

違いない。

彼は「お兄ちゃんが僕は泣いたら駄目だって、ママが悲しむから・・・」と俺に言った。

「いいよ。泣いてもいいよ。悲しい時は誰でも泣くんだよ」俺の腕の中で泣きながら語った。

「お兄ちゃんが僕にゴメンねって言ったんだ。ママを独り占めしてって・・・」

僕はいろんな所に遊びに行けるのにお兄ちゃんはいつも病院で・・・

┌

アキラのママがレイラの肩を抱くようにしてリビングに案内した。リビングにはアキラの写真が飾ってある。

この写真は、アキラが俺のネクタイをレイラに結ばせて得意な顔して写した。

あの時の「ねえ、ネクタイすると僕も大人みたいでしょ」という声が聞こえてきそうだ。

「僕ねえ、早く大人になりたいんだ」とアキラが言った事がある。

その時には、何も急いで大人にならなくても・・・と思い、深く考えなかった。

アキラはきつと自分で判っていたに違いない。自分が大人にならない事を・・・。

最後にアキラに会った時、愚かな俺はアキラが回復して退院したのだと思っていた。

今までも、体調が良いと病院から外泊で帰宅していたアキラだった。俺はアキラが退院したと言った時に「外泊じゃないの帰らなくてもいいの？」と尋ねた。

「ウン、もう病院には帰らない」アキラが強い口調で俺に言った。

「そうか、じゃあ、無理をしないでママの言う事を良く聞いて・・・」

┌

俺は何ということを彼に言ったのだろう。

帰らないというより帰ることがもう無いって事だったのか……。

アキラのママが入れてくれた紅茶を口に入れた。

とても良い香りだ。「あれ、これはローズティ……」レイラが言った。

「そうなの、ローズティ」俺は庭に咲いているバラの花に目を移した。

「綺麗なバラがたくさん咲いていますね。アキラから聞いています。」

「そうなの、そんな事も話したの？」

アキラが小さい時に両親が病室にバラの花を飾った。

看護師さんから「お花の持ち込みを小児科ではお断りしています」と説明があった。

パパが持ち帰ろうとすると、アキラが嫌だと、飾ってくれるように懇願した。

「ママと同じ匂いだ」って、アキラに聞いたことを彼のママに話した。

それを聞いたパパが家の庭をバラだらけにしたことも……。

アキラから聞かされたバラの花の話……。

何時、お見舞いに行ってもアキラの病室にはバラが飾ってあった。退院して家に居る時にも彼の部屋にはバラが活けてあった。

「あの子が私の匂いだって言うから香水が変えられなくなって……」

ママが寂しそうに笑った。レイラが思い出すように言った。

「彼は私が大学を卒業する時に赤いバラの花束を持ってお祝いに来るって……」

「あら、あの子はレイラさんにそんな事を言ったの？」「ええ……」

「私には大人になって、恋人にプロポーズをする時は赤いバラを持

つて行くつて……」

「まあ！……」 「あの子はレイラさんに憧れておこがいたから……」

「えっ、私に……」 「そう、初恋の人だったかも……」

俺もアキラがレイラを好きな事は気が付いていた。

レイラの手を握りたがる友達が多いが、兄貴の俺が許可したのはお前だけだぞアキラ！

俺はアキラの写真に話しかけていた。お前は全部知っていたのか？  
自分に残された時間が短い事を知って、俺たちを呼んだのか？  
俺たちを呼んで別れを告げたのか？自分だけ……。

「ただいま」アキラのパパが帰宅した。

「お邪魔しています」 「ありがとう来てくれて、驚いたでしょう？」  
レイラが泣くむ。

「パパ、駄目よレイラさんを泣かせたらアキラに叱られるわ」  
パパがアキラの事を話し始めた。

「あの子がお二人には自分の病気の事を言わないで欲しいと言った  
のです。」

賢い子でした。自分の残された時間が少ない事も気付いていました。  
自分の苦しさよりも、私達に心配をかけまいと気を使う子でした。  
今回の退院も彼が望んだことです。

自分の命が残り少ない事を知って帰りたいと言ったのです。

あの子は帰宅した翌日、『神父様とお話したい』と言いました。

神父様にお願いで、直ぐに訪問していただきました。

あの子が神父様と何をお話したのは知りません。

神父様も何も言われませんでした。

あの子の葬儀のときに神父様が彼が全ての準備をして旅立ったと話  
してくれました。

大人でもできないことをこの小さな兄弟が自分の意志で行ったのだ  
と……。

俺の魂は震え上がった。準備して旅立つなんて子供にできるのだろ

うか？  
いや、彼が純粹じゆんすいだったから神を信じて自分を委ねることができたの  
かも知れない。

あの子は次に貴方達あなたたちに会いたいと言いました。

無理をお願いして来ていただきました。

アキラはベットではなく、車椅子で貴方達を迎えむかえました。

あの子があんなに長い時間を車椅子くるまいすに座すわっていられるとは思いません  
でした。

アキラの最後のやせ我慢がまんだったのでしよう。

愛する女性の前では虚勢きよせいを張かつて、格好かっこうをつけるのです。男は……  
」

「あつ、そうだ！」パパが何かを思いついたらしく話を中断ちゆうだんして部  
屋を出て行った。

彼が戻ってきた時、手には金色のサッカーボールを持っていた。

「これはね、ワールドカップの時にアキラが欲ほしかったものです。

友人に無理を言いって手に入れたのですが、これを君に渡すように言  
われました。」

「ええつ？これって……」ワールドカップの記念ボールである。

世界に限られた数しか作られていない筈はずだ。

「僕、こんな大事な物を戴いたくわけには……」

「いや、貰もらつてくれないか？あの子が君に渡したかったんだ。

これはレイラさんに！」

レイラが渡されたのは病院でもアキラが常つねに枕元まくらもとにおいていた天使  
の写真立てだ。

二人の天使が両側で写真を支えている。

中には写真が……あの時のキャンプで写した写真だ。

アキラを真ん中に俺とレイラが左右に並んだ、あの日の思い出の写  
真だ。

「レイラさん、お願いがあるのだが……」

パパが俺たちに向って座りなおした。

「アキラが誕生日プレゼントに貴女あなたから戴いた聖書を私がいただいても良いだろうか？」

あの子に持たせようかとも思ったのだが、本当に必要なのは私達だと思つて残したんだ。

アキラを偲しのぶために……後で開いてみたら、何時、読んだのだろう……。

どのページも開かれたらしく、線のひかれた言葉もある。」

「どうぞ……お手元に置いてください。」

パパはアキラの残した小さな聖書を愛いとおしそうになぜた。

あの聖書はレイラが体力の無くなったアキラの為に小さくて軽い品を探した。

大人になるまで使えるように皮表紙の何年も使える丈夫な品を選らんだ。

ベルが鳴った。玄関で声が聞こえる。母と兄だった。

母はバラの花束を抱えていた。

「この色は……」アキラのママが声を詰まらせた。

「薔薇ういばの花をお持ちして良いのか迷ったのですが……子供達に聞いた話を思い出して……」

以前、アキラはレイラには赤いバラが似合つと言った。

「俺は？」と尋たずねると何の迷いも無く「白バラ」と言った。

「じゃあ、君は？」

「僕はね。青バラだよ。」

「ええつ、青い薔薇バラなんて聞いたことがないよ」

「青い薔薇バラは人が作つたんだよ」

「本当にあるの？」

青い薔薇ういばに自分を例えたアキラだった。

ブルーローズと言えば英国では不可能を意味する諺だ。  
俺はアキラに担がれたのかと思っていた。

母に渡された青い薔薇をアキラの両親はじつと見つめた。

「これが、あの子の言っていたブルーローズなのね」ママが言った。

「僕はアキラが英語の諺を言ったのかと、冗談だと思っていた」

パパも同じことを考えたのか。俺もレイラも本物の青い薔薇を初めて見た。

ママの目に涙が溢れた。お袋が言った。

「子供達からブルーローズの話聞いたときに、最近、専門誌で読んだのを思い出したの、

遺伝子組み換えで作られた青い薔薇です。中学生が良く知っている  
と関心しました。」

アキラ君が自分を奇跡のブルーローズに例えた事をメッセージだと思いました。」

「ありがとう、アキラの気持ちを教えてくれて・・・」

ママの肩をお袋がそっと抱いた。母親の気持ちは母親には伝わるのだろう。

俺に背を向けたお袋の肩が震えているのが見えた。

アキラの死は俺とレイラには重かった。

今までの人生で正面から死と向き合った事がなかった。

アキラの死を事実と認めたくなかった。逃げ出したくなるほど辛かった。

彼のことを考えたくないと思い、一方で彼の死に向き合わ無くてはならないと考えた。

レイラも俺も言葉が少なくなった。

アキラとの出会いを無駄にしないために、何かをしなくてはいけない  
と思った。

しかし、何ができるのか？何をすれば良いのか？俺には判らなかつ

た。

無力な自分に腹が立った。情けなかった。

学校が始まったのに俺はエンジンが掛からない。

休み時間にサッカーボールを蹴っても、ついアキラのボールを思い出す。

彼は俺にサッカーボールと共に何を託したかったのだろうか？

昼休みにヒマワリに声をかけられた。俺が元気が無い事を気にしている。

「弟みたいに可愛がっていた子が死んだんだ。」

「えっ、交通事故？」

「ううん、病気で……。長くない事は両親は知っていたみたいだ、僕は後で聞いたけど」

「そう、辛いね。私も昔、弟が居たんだ。」

「居たんだ……。って、そのう……。」

「ウン、3歳の時に交通事故で死んじゃった。まだ、私も幼稚園の年長さんで……」

私は友達と遊んでいて、河川敷の公園に行こうと堤防の道路を渡ったんだ。

トラックがキーイって停まって、振り返ったら弟が倒れていて……。後ろから付いて来たなんて知らなくて、私は青信号を走って渡ったから……

弟は私と一緒に遊びたくて、付いて来たんだと思う。「……」  
俺はヒマワリの思いがけない告白に言葉もなかった。

「私はびっくりして立って見ていたの。トラックの運転手さんが弟の横に座っていて、

大人がいつぱい集まって来て、救急車が来て、お母さんが怖い顔して走ってきて……」

「そう、驚いたろう……。怖かったろう」俺はやっと言葉を挟んだ。

ヒマワリはユツクリ左右に首を振ると話を続けた。

「お母さんが弟と救急車に乗って行ってしまつて、私はずっと立っ  
ていて、

近所のおばさんに連れられて病院に行つたら、弟は死んでいた。

お母さんが気が狂つたみたい泣いていた、私を見て『どうして』  
つて、

『どうして、手を引いてやらなかったの？』つて・・・言つたわ。」  
俺はヒマワリの顔を見つめた。ヒマワリはブルッと震えるように頭  
を振り続けた。

「私、まだ小さかつたから良く分からなくて・・・。

死んだつて事が良く分からなくて・・・家に帰れば元気な弟に会  
える気がして、

弟が頭に包帯ほうたいを巻かれて寝かされているのを見ても治れば帰つて来  
ると思つて・・・

だんだん、判つたわかたの、私は大変な事をしたつて、弟に取り返しが付  
かない事を・・・。

弟はもう帰つてこないつて知つたの。弟が急に居なくなつて家中が  
寂しくなつた。

お母さんが私を許ゆるしてくれない気がして・・・辛つらいかつた。

急に身近な人が死んでしまつと、それが現実と思えないよね。認め  
るの苦しいよね。

でも、残り少ない時間と判つていて生きていくのは辛いよね。

周りで見守るのも、とても辛いよね。」

ヒマワリは俺の顔をちらりと見て立ち去つた。

俺はヒマワリの語つた話を自分の中で繰り返く返していた。

思い出すのも嫌いやな記憶きおくに違ちがいない。奴は何故、それを俺に話したの  
だろつ。

ヒマワリが言つていた言葉がおれの中で響ひびいていた。

もう直ぐに死ぬと判つて生きる事。見守る事。残された者の辛さ。

レイラは家では口数が少なくなり自分の部屋にこもる時間が増えた。4月末から5月の連休は最後の春キャンプである。

レイラが「参加したくない」と言い出した。模擬試験があるという。俺は模擬試験は受ける心算だが、前半だけ参加することに決めた。高3でも、俺は引退する心算は無かった。

体を動かすことで、夢中になる事で辛さを忘れたかった。

しかし、現実にキャンプに参加してもレイラの居ないことで空虚感を強く感じた。

体も気持ちもちぐはぐで落ち着かない。

滑っている時はまだ良いが、チョツとした時間の空白が不安感を高める。

自分の中に焦りを感じていた。俺は合宿中に暇があると参考書を開いた。

「レオさん、受験ですか？」後輩達が俺の珍しい姿を見て驚いている。

合宿からもどり、俺は連休だというのに真剣に勉強した。

模擬試験が終わり、翌日には結果を受け取った。

進路を提出しなくてはならないリミットだった。

しかし、俺は何も決めていなかった。

模擬試験の成績は今時の言葉で言えば「ビミョウ」って所だ。

内部進学クラスではそれなりだが、受験できる成績ではない。

とりあえず、エスカレーターコースに丸をつけるしかない。

その夜、食事の後で何時もは部屋に戻るレイラがコーヒーを入れてくれた。

何かある。嫌な予感。俺の勘は当たる。きっと、俺も巻き込まれる。コーヒーを片手に部屋に撤退する事も考えたが、そんな雰囲気ではない。

「ママ、話があるの。」レイラが口を開いた。

お袋だけに話をする時は奴は母の書齋しよさいで話をする。

兄貴や俺に聞かせたいに違いない。嫌な予感はずます強くなる。

「進路の事だけど……。」それ来た。やばいぞ、俺にも降ふってくる。

「決めたの?」「決めたかと思っっています。」「そう、学部を決めたの?大学を決めたの?」

「私、医学部を受けようと思います。」「えっ!医学部ってお前、工学部じゃなくて?」

兄貴が驚おどろいて口を挟はさんだ。俺は頭が真っ白である。お袋だけが動じていない。

「そう、受験校は決めたの?」「一応、受けたい大学はあります」「聞かせてもらえるのかしら?」「K大学です。S大学も考えたけど……。」

何い!国立の医学部を狙ねらうというのか?幾らお前でも無謀だろう!レイラが続ける。「これから、頑張つてセンター試験の成績で決めます。」

「判はつたわ、頑張りなさい」「レイラ、かなり厳しいぞ」兄貴が心配して口を挟はさむ。

お袋は平然としている。俺は固まっている。奇妙な風景である。

その夜、俺は眠れず、夜中に飲み物が欲しくなり1階に下りた。

お袋が一人でリビングでビールを片手にパソコンをたたいていた。

「あら、レオ、どうしたの?」「喉が渴いたんだ!」

俺は冷蔵庫から牛乳を出して、コップを片手にお袋の前に座った。

「母さん、話してもいいかな?」「ええ、どうぞ」お袋はパソコンを閉じた。

「母さんはレイラの進路決定に驚いていないの?」「うん、驚いてはいない」

「レイラは母さんに医学部進学しんがくの相談していたの?」「いいえ、今日始めて聞いたわ」

「どうして、驚かないの?」「そんな気がしていたから・・・」

「アキラの事が原因かな?」「うん、それもあるかな?でも、それだけではないわね。」

「それだけでないって・・・?」「障害児しょうがいじの為に何かできることを探していたから!」

「・・・」「工学部に進めば技術的支援だけど、医学部だと直接関わることになるわね。」

「レイラがアキラのような子供達こどもたちに関わるために医学部に進学したいって?」

「多分、それを考えていると思うわ。K大もS大も医学部は小児科が有名だから。」

「レイラは精神的に務まるの?成績は?」「さあ、それは本人の問題でしょ?」

母は本人の問題だと突き放すように言った。

無理だ、無茶だ、滅茶苦茶だ。

あんなに繊細せんさいでナイーブなレイラが人の命を預かるなんて絶対に無理だ。

俺はレイラの悲壮ひつじょうとも思える決断けつだんが痛々しく思えた。

「お休み」おれはリビングにお袋を残して部屋に戻った。

兄貴の部屋の前を通りかかると兄貴に呼び止められた。

「チョツと入れよ」「ウン」「シヨックだろ」「・・・」

「実は、俺もレイラが後輩になるものだと思っ込んでいた。」「えっ、そんな話してたの?」

「ああ、レイラは工学部に入りたいと言っていた。コンピュータをやりたいと!」「・・・」

「お前はレイラが医学部に行きたいと言ったことに驚いているんだろ!」「ウン」

「レイラには医者が務まらないと思っている。」「うん、まあ・・・」

「レイラは精神的に弱すぎるって?」「うん、そう」  
「やって見ないと判らないうろ?」「えっ、だって……」  
「今から、医学部に進路を変更して受かると思うか?」「そりゃ難  
しいと思うよ」

「受かるかも判らないのだから、今から心配するなよ!」「落ちれ  
ばシヨックだろう!」

「受かるかも知れないぞ!あいつは根性があるから……」「……」

「支えてやつても無理なら辞めればいいさ、患者と向き合うだけが  
医者じゃない」

「……」「レイラが逃げ込める場所で居てやれ!」「うん」

確かに今、レイラに何を言っても聞こうとは思わないと思う。

気の済むようにさせるのが一番だろう。結果がどうであれ……。  
医学部に入っても、臨床だけが、医学ではない事は俺でも知ってい  
る。

自分の枠を超えて飛び出そうとする妹を俺に支えられるのだろうか?  
俺は兄として見守ることしかできない。それも避難場所として……。

自分自信の進路も決められない俺にレイラが支えられるのか……。  
部屋に戻った俺は推薦希望用紙と朝までにらめっこをしたが……  
結論は出なかった。

## 悩める受験生達（前書き）

高3一学期の半ばで医学部受験を希望する妹。

今だ、進路も目的も決まらない同じ年の俺。

俺たちツイインズの共通点は奇想天外ってところか？

流石の俺も焦りと苛立ちが・・・。

## 悩める受験生達

高3一学期の半ばで医学部受験に切替えた妹。

今だ、進路も目的も決まらない同じ年の俺。

俺たちツイインズの共通点は奇想天外つてところか？

今の時期に医学部に進路変更をしたレイラも進路の決まらない俺も規格外きかくがいと言われている。

まず、妹のレイラの担任は……。

3者面談でレイラの進路に関する意思表示いしひょうじを聞き白黒させたらしい。奴の場合は進路希望しんろけいぼうではない、意思表示である。

そこで助けを求めた相手がお袋では……相手が悪すぎる。

「お母様はどのようにお考えで……」

訴えるように話を振った担任の思いは気の毒にも裏切られたらしい。

「娘の人生ですから、本人の望むようにと考えています。」

「で、志望校も決まっているの？」「目指すはT大です。先生」

「ええっ！幾ら君の成績でも……」「無理ですか？」

「だって、医学で……」

「まあ、センター試験の成績を見て最終的な判断はんだんをしますから……

レイラのペースにすっかり巻き込まれて、持ち時間は終了した。

夕食の時に、レイラが楽しそうに三者面談のことを話している。

内容の報告というよりも、担任の観察記録かんさつきろくとでも言ったところだろうか？

お前の事なんだぞ！判っているのか？他人事のように楽しんで……

お袋がレイラに声をかけた。

「レイラ、貴女はサイを投げたのよ」「ウン」

「後には引けないのよ!」「判っている」

「ならいいわ! 応援するから!」「ありがと!」

「俺も支援は厭われないぞ。数学と物理なら任せろ!」と兄貴。

「は〜い! 頼りにしています。」

俺もレイラの兄貴の一人なのだが・・・。「沈黙」

年も同じ、成績は妹の方が数段上ときている。

教わる事は多々あっても、教えられるのは体育だけ!

・・・と言ってもレイラの通うお嬢様学校では奴でも体育はトップだ。

精々、塾で遅くなった時のお迎えぐらいなら俺にもできるか・・・。

お袋が俺の方を向いた。

「ところでレオは来週の月曜だったっけ?」そら来た!

「ウン! 忙しければ来なくても良いよ!」恐る恐る答える。

「お袋の変わりに俺が行ってやろうか?」と兄貴。

とんでもない、兄貴になんぞ来られたら、担任にまた、比較される。

「お前の兄貴は良くできたな!」と毎年のように新しい担任に言われ続けた12年。

兄弟で同じ私学というのも良し悪しである。

私学の先生は異動がほとんどない。教師の10人中9人は兄貴を知っている。

俺がどんなに体育ができてても兄貴とは比べられないが、主要な学科では全科目で比較される。

あまりにレベルが違って比べようが無いと思うのだが・・・。

新しい担任は必ず兄貴と比較する。

「レオを一人で三者面談に行かせて、また、担任から電話が掛かってくると困るから・・・。」

ヤバイ、古傷に触れられた。

「あれは、有名な話だぞ、伝説になっているなあ〜」と兄貴に言われてどきりとした。

「何で知っているの？」俺は兄貴が知っているとは思わなかった。  
「文化祭の時に話を聞いて、凄い奴がいると思っただら弟だった。俺の身にもなってくれ！」

妹と違って、成績が芳しくなかった俺は小学校の時に担任によく言われた。

「皆と一緒に中学校に上りたいならもう少し、頑張つて勉強をしないと……」

小学校6年生の受験期に成績が悪い俺は先生から「公立に転校するの？」と脅された。

中学3年においても成績は低迷し、同じような状況であった。

3者面談の日程をお袋には知らせず（どうせ忙しい）、俺は担任と二人で話し合った。

担任が余りにしつこく「この成績では高校への進級が難しい！」を繰り返すので俺はキレタ。

「もういい！頼まれたって行くものか！」俺は格好よく捨て台詞を残して教室を後にした。

その後が大変だった。担任は校長ではなく俺のお袋に電話で話し、泣きついた。

お袋は担任とかなりの長時間、話をする事になっただらしい。

俺は帰宅したお袋に久しぶりに叱られた。

しかし、その叱り方が少し違っていた。

「レオ、貴方は何年、生徒をやっているの？」

「先生は初めて担任を受け持って、本当に一生懸命やっているんですよ！」

「中学の教師になったのだから、貴方より後輩でしょ！」

「一生懸命にやっている人の気持ちには真っ直ぐに答えなくては駄目、卑怯よ！判る？」

「はい」  
確かに担任は張り切り過ぎて、女子からはウザイと言われていた。

俺も一生懸命の押し売りにいささかウンザリしていた。

俺は担任が俺の思いがけない反撃にすっかり自信を失くしたことを、お袋に言われて知った。

お袋は「いろんな経験を積んで自分を鍛えて行かなくては本物の教員にはなれない」と慰めたらしい。

「ねえ、レオだったら、高等部に進学できなかったらどうする心算だったの？」とレイラ。

「俺、公立に行けば良いと思っていたから・・・」

「そうよねえ！流石、私の子だと思ったわ。受験があることも知らずに・・・」

お袋も笑っている。

「うん、だって高校って誰でも何処かに入れるって思っていたから、駄目なら、公立があるって・・・」

「教師の自信を失くさせる息子も息子だけど、その相談に親が乗っているのだから・・・」

兄貴に至っては呆れているという処だろうか？

「でもね、生徒と一緒に経験を積んで、教師も育って行くものでしよう。最近は何でも完成品を求めて、人を育てる環境が無いから・・・」

「今、思えばお袋が先生と同じことを言ったら俺はますます意地になっただけだと思っただろう。」

確かに生徒から見ていると、若い先生が一生懸命すぎて、生徒に伝わらずに空回りという事は多い。

当時の担任も初めて受け持ったクラスで、一人の落伍者も出したくないと必死だったのだろう。

お袋の話は幼いときにも聞いた。スキー場で小さい時に言われたのと同じ意味だった。

気持ちよくゲレンデを飛ばしていて、接触しそうな時に言わ

れた言葉が印象深い。

「大人だから避けてくれるんじゃないの。技術があるなら貴方が譲りなさい」

お袋は年齢とは関係なく、一生懸命に精一杯取り組む相手とは正面から向き合わないと卑怯だと叱った。

その代わり、どんな事をした場合でも必ず俺の話聞いた。

例え、上手く説明できなくても「卑怯な事していない？」と俺の目を見て尋ねた。

俺が「ハイ」と言えば、お袋はそれだけで「わかったわ」と信じてくれた。

いよいよ、3者面談の当日……指定の時間ぴったりにお袋は現れた。

お袋が間に合わないといけないので順番は一番最後に入れてある。

俺が最初に最終枠に名前を書いたら、全部が埋まらず一人前は空白になった。

俺の担任はお袋が怖いのか、前に詰めるとは言い出せないらしい。

俺は廊下の椅子に座っているが、担任は教室の中で座っている。

教室のドアが開いているから俺と担任はしばしば目が合う。

お袋の姿を見て俺は担任に合図を送った。彼は頷いた。

俺とお袋を前にして、担任の第一声が……。

「小柳君からは進路希望が出ていないけど、決まったかな？」

何とセンスのない振りなんだ。決まっていれば出している。

「いいえ！」「もう決めないと間に合いませんね。お母様はどうお考えでしょうか？」

俺の担任も助けを求める相手を誤ったようだ。

「先生、息子の成績でも進路の希望が決まれば今から間に合うのでしょうか？」

担任は思わぬ、発言に目を白黒である。

「そりゃあ・・・可能な範囲があると思いますが・・・」

「そうでしょうね。今から医学部とか、国大受験とか言い出しても無理ですよねぇ」

「おいおい、レイラと俺は違うぞ！混同しないでくれ！」

「流石の俺でも今から国大受験とは言い出さないよ」お袋を咎めると・・・。

「あゝ良かった。少しは現実が見えているようですね。先生！」  
担任はコメントもできずにオタオタしている。

結局、担任は準備をしていた資料を俺に渡して、言った。

「内部推薦が欲しければ締め切りはここに書いてあるから・・・」  
「なんだ、最初から内部推薦しか無理だという事か？」

いや、逆に内部推薦をもらえる成績だという意味かな？  
ノー天気な俺は何でも良い方に解釈するのが得意だ。

「先生、俺、どの学部でも推薦してもらえないの？」

「成績が基準を満たしていれば推薦は可能だけど、希望学部があるのかな？」

「例えば、工学部とか・・・」  
「プツ」お袋が吹き出した。失礼な奴だ！

「えっ、法学部に行きたいのか？」  
「いいえ、工学部と言いました。」

「君が工学部???工学部は確か数学が・・・」

俺は物理は好きだが数学は苦手だ。大体、高1で懲りてからは数学は取っていない。

ヤッパリ工学部は無理だろう。

「君は理系への進学を希望しているのか？」  
「いいえ、まだ、何処とも・・・」

彼にはジョークが通じないらしい。

「推薦の希望を仮登録して、成績の上位者から大学の受入人数分を推薦する仕組みだから」

担任は内部推薦の規定を一旦に言い切ってホツとしたらしく続けた。

「得意科目は確か・・・」「体育です。」俺は彼の言葉を引き取った。

担任は次の言葉を見失ってオロオロしている。

そこで婆が見事なホローだ。

「まあ、何も無いより良いですよ、先生！」

「はあ！」彼は返事とも溜息ともつかない音を発した。

「良く考えて、ご家族とも相談して方針を決めてください」

と間の抜けた言葉で会話が終了した。

婆の車に便乗して帰る途中で尋ねられた。

「レオはまだ、方向が決まらないの？」「ウン」

「そう、焦る事はないけど、受けたい大学が決まったら教えてね」

「はい」と答えて俺は固まった。

焦る事はないって、どういう意味なんだ？誰もが方針を決め、受験体制に入ったのに！

これだけ出遅れているのに、お袋は何故、焦る事はないというのだ？

その晩も食事の席で3者面談が話題となった。

俺はとうとう我慢できなくなって尋ねた。

「かあさん、車の中で焦る事ないって言ったでしょ？どうして？」

「だって、決めるのは貴方だし、貴方の人生だし、人生80年もあるのに・・・何を焦るの？」

「はあ？だって、皆、大学決まっているよ、もう決めないと遅いって言ってるよ！」

「人は人、別に大学だけが人生じゃない」

「俺だって、大学に行きたい！」

「何しに？」兄貴に聞かれて俺は言葉が詰まった。

「就職って選択肢はないわけ？」レイラまでが便乗している。

「就職は嫌だ！（大学に行って遊びたい！）」俺は後ろ半分を飲み込んだ。

どうも形勢が不利だ。「受験を前提とした場合にたしかに時間が厳しいな」と兄貴。

「それは、日本の大学に進学する場合でしょ?」・・・何い!何を考えているお袋は!

「そうか、レオ留学すれば?カツコイイじゃん!私、休みに遊びに行くから・・・」

なんだか、家族全員から俺はいい標的にされているみたいだ。

その夜、俺はお袋の書斎を訪ねた。

パソコンに向って機関銃のようにキーボードを叩いていたお袋が手を止めた。

「かあさん。俺、やりたい事を見つげるために大学行きたい」「そう」

「何になるかも決まってないし、やりたい職業も特にないけど大学に行つていいかな?」

「うん、いいんじゃない!18歳で本当にやりたい事が決まる方が少ないでしょ!」

あまりに、あつさりと答えられて、俺はホツとしたというより、力が抜けた。

何だか、明日の事でピリピリしていた自分が馬鹿みたいに思えた。

兄貴のように好きな科目があるわけではない。レイラのように希望する職業もない。

凄く半端で何も決まらなくて、俺は自分が情けない。

でも、お袋の言うように高校生の何割が自分の将来の職業や方向を決められるのだろうか?

好きな科目は体育だけだが、嫌いでない科目はある。

大学に進んで専門的な講義を受けるには嫌いでない科目を選択する必要がある。

俺は担任から受け取った資料を広げた。

大学の学部だとか学科だとか言われても何が何だか判らない。  
もう少し判りやすい命名だと良いのだが……。

A大学の 学科とB大学の 学科は教育の中身は似ているのに  
名称はまるで違う。

大学の学部とか学科は好き勝手に付けても良いのだろうが高校生に  
は理解しにくい。

高校だと工業高校とか商業高校とかわかりやすい。

経営学と経済学の違いは判らないが、工学部のように機械とか建築  
だと想像はできる。

俺としては珍しく夜中まで文字を読み続けたが、あまり自分では納  
得でずに資料を閉じた。

学校に行っても何となく落ち着かない。

回りの誰もが目的に向かって、進んでいるように見えるのは俺の欲  
目だろうか？

今まではスキーという部活のせいにして逃げていたのだが、もう逃  
げ場が無い。

英語は嫌いではないが、文学には興味が無い。

体育は好きだが「体育を職業にするのか？」と聞かれるとその気は  
ない。

何もかも思い通りに行かないような気がする。

周囲の誰もが上手く行っているように思える。

家に帰れば、兄も妹も母親も夫々が目的を持って生活している。

嫌だ！嫌だ！何もかも面倒くさい！

「ウザイ」という言葉が今の俺の気持ちだ。

昼休みにサッカーボールを蹴るのが俺の目下の気晴らしだ。

それも、だんだんメンバーが減ってきている。

下級生達からは「なんで高3が居るんだ！」と疎まれてるのは判  
るが……。

それでも俺達は昼休みにコートせんきょを占拠し続ける。

夕食では久々に家族全員が揃った。  
食事の後、珍しく部屋に戻らずにレイラが兄貴を捕まえて話をしている。  
加わろうかと覗き込むと、数学の証明方法を議論しているではないか……。  
数学なんて……とんでもない。俺はソファーに座り、テレビを付けた。  
リモコンをもて遊び、チャンネルをくるくる変えたり、音声を切り替えたり  
洗い物をしながら、婆が声をかけた。「レオ！良かったら珈琲を入れてくれない？」  
「何で俺なんだよ！」思わず言い返した俺の声は自分でも驚くほど大きかった。  
全員の視線を感じながら、俺は自分が居場所を失った事に気付いた。「ちょっと出かけてくる」俺は飛び出した。  
「レオ、どうしたの？」妹レイラの声がドアのむこうに消えた。  
自転車に乗った俺は何となく隣町に向かっていた。何がしたかった訳ではない。  
自分がコントロールできずにいる、そんな自分に嫌気がさしていた。  
走り始めて直に俺は財布も持たずに飛び出した事に気付いた。  
まあ、いいだろう。頭を冷やして帰れば……居間の電気が消えた頃に戻る。  
家の前の道を何時もとは反対の方向に何となく走り続けた。  
風を切って走っているともやもやしたものが吹き飛ばすような気がする。  
俺はひたすら自転車を漕いでいた。

あれっ？前を歩く制服は俺の学校の生徒だ！俺は速度を落とすとした。

ユツクリと俺が近づくと前を歩いてた女の子は走り始めた。  
ヤバイ、驚かせたかな？俺はチョッと焦ったが、後姿に見覚えがある。

「ヒマワリ、誰かと思ったらヒマワリじゃないの！」俺は大声で呼び止めた。

彼女が止まって振り返った。やはり同級生のヒマワリだ。

彼女のこわばった顔が、俺だと判って、ホツとした安堵の表情に変わった。

「どうしたの？こんな時間に？」「うん、ちよつと・・・」

「こんな人気のない場所を女子が一人で歩いていたらまずくない？」

「・・・」

「まあ、言いたくないなら無理に聞かないけど・・・送るよ！」

俺は自転車を降りてヒマワリと並んで歩き出した。

「お家を探していて、迷子になっちゃった！」ヒマワリが笑った。

「誰の家？」「ウン、ちよつと・・・」

「で、見つかったの？」「駄目、見つからなかった」

「そう、一緒に探そうか？」「ありがとう、でも、いいの」

「本当に？」「うん、この時間に訪ねたら迷惑だし・・・」

「そりゃ、この時間に尋ねるのは迷惑かな？」「明日、会えると思っから・・・」

「えっ？明日会えるならいいじゃない！」「うん、できれば今日、謝りたかったから・・・」

「そう、許してくれるよきつと！」「うん」

俺はそれ以上、聞いては悪い気がして話を変えた。

「進路は決めた？」「言ってしまったから、墓穴を掘ったことに気が付いた。」

「別にいい！」「えっ、決まっていけないの？」

「だって、私、勉強できないから選べないよ」「・・・」

確かにヒマワリは学校の成績が良い方ではない。

でも、サボっていてできないと言うわけではない。

要領リョウリョウが良くない。勉強に対して熱心でない事は俺と同じだ。

「小柳君は？」それ来た！「俺も決まっていけない」

「それって、まずくない？」「お互いにね！」

何時もの明るさを取り戻したようにヒマワリが笑った。

「アツ、笑った」「えっ！バカみたいに笑っていないと私らしくない？」

「い？」

「違うよ！ヒマワリの笑顔えがおを見ていると、ホツとするというか・・・

「「ぶ〜ん」

「この辺で大丈夫だいじょうぶだから・・・」「でも、今日は遅いからもう少し

近くまで・・・」

ヒマワリは一寸、躊躇とまどったようだがそのまま一緒に歩き続けた。5

分近く歩くと、

「家、此処こゝだから」と小さな平屋ひらやの家の前で立ち止まった。

俺は真つ暗な家を見て少し驚いた。

「あんまりボロイから驚いた？」「そうじゃなくて・・・誰も居ないの？」

「いの？」

「ウン、お父さんは何時いつも遅いし、帰ってこない日もあるから・・・

「

俺はヒマワリの家庭をのぞき見たような居心地いこゝの悪さを感じていた。

「じゃあ、俺帰るから、入って電気をつけてよ！その方が安心して

帰れる」

「判った。ありがとう。暗くて怖こわかったから嬉うれしかった。じゃあ入

るね！おやすみなさい」

「うん、おやすみ。明日またね！」

ヒマワリが玄関げんかんの鍵かぎを開け、中に入って扉とびらを閉め、鍵をかけた。

ガチャリと鍵の掛かかる音を聞いて、俺はちよつと安心した。

部屋の明かりがつき、窓が開いた。俺はヒマワリに手を振った。

ヒマワリは丁寧ていねいにお辞儀おじぎをしてから俺に手を振った。

俺は自転車に乗り、来た道を引き返した。

自分のモヤモヤよりもヒマワリとの会話が頭の中で回っていた。家に着くと俺は誰にも気付かれないうようにそっと玄関を開けて中に入った。

「レオ、何処に行っていたの？」暗がりからいきなりレイラに声を掛けられ驚いた。

「何だ、お前はこんな暗がりで・・・」「馬鹿、心配したのに・・・」

いきなりレイラに飛びつかれて俺は焦った。

泣きじゃくるレイラを抱きとめる。体が冷たい。

ずっと此処に居たのだろうか・・・多分、そうだろう・・・。

俺はレイラの肩を抱き、居間に入った。

「ずっと、玄関に居たのか？」

「うん。外で立っていたらナオが窓から見ていたから・・・中に入ったの」

ヤバイ、兄貴の怖い顔が脳裏を横切る。

妹を泣かせて怒られるのは久しぶりだが、きっと何か言われそうだ。

「ゴメン、レオの気持ちも考えずに私・・・」

「何でお前が謝るんだ、俺がちよっとイラついていたただけなのに・・・」

「だって・・・」「もう、いいだろ！風に当たってすっきりしてきただけなんだ」

「本当？」「そう、ココア飲むか？俺の特性の！」「うん！」

俺達はキッチンに入り、俺は特性のバター入りココアを作った。

「美味しい」レイラがホツとしたように笑った。

「アッ、笑った」と言ってから今日、二回目である事に気付いた。

「えっ、笑ったら変かな？」「違うって、女の子は笑顔が一番のこと！」

「ふん」俺はレイラと二人で黙ってココアをすすった。

熱いココアを飲んだら、冷たくなっていった心も溶けたような気がし

た。

「さあ、やるか?」「何を?」

「何って、受験勉強だろうが・・・」プツとレイラが吹き出した。

「ゴメン、レオに勉強しようか・・・なんて言われたの初めて!」

「そうだっけ?俺たち、受験生だけ・・・」

言いながら俺は笑った。レイラも楽しそうに笑った。

レイラと俺はそれぞれの部屋へやに戻った。

俺はベットにひっくり返って、ヒマワリとの会話、レイラの反応について思い返した。

今日の俺はどうかしていた。いや、今日だけではなくこのところおかしい。

コンコン、ドアのノックだ。この時間に・・・レイラではない。

兄貴かな?おれは「どうぞ!」と声をかけた。

「寝ていた?」と入ってきたのはお袋である。俺は慌あわててベットに起き直った。

「レオ、一言だけい、いかな」「ハイ」

「自分の苛いらだ立ちだや焦あせりを八やつ当あたりで解かい消しょうするのは辞やめなさい」「

ハイ」

最もな話だ。俺も言われなくても理解りかいはしている。しかし、この苛いらだ立ちだ・・・

「何か言いたそうね?」「何で俺だけ出遅おそれたんだろ?レイラは・・・」

「本当に仲がいいのね。何でも同じが良いの?」「そりゃあ・・・」

「レオ、貴方はずるくない?レイラよりも優すぐれた物を沢山持もっているのに!」

「そうかかなあ、レイラの方が勉強もできるし、美人だし・・・」

「レイラは女の子なんだから美人でもいいんじゃない?貴方も美人と言いわれない?」

「そ〜ゆ〜事じゃなくて、レイラばかりがいい所を持っていて・・・おれは出来損ないで」

「それ、レイラが同じことを中学生になった頃に言っていたわ!」

「えっ?」「中学生になって男女の体力差がはつきりした頃に・・・」

「何で?」「レオが一日で覚える技を自分は3日掛かるって!レオばかりが優れているって」

「そうかなあ?何時も、同じぐらいのペースで練習していたように思うけど・・・」

「それはレオが知らなかっただけ。レイラは貴方よりも多くの時間をかけている。」

「気が強いから、見つからないように練習していただけ、あの子の部屋のカローゼット見た?」

「バーベルが置いてあるわよ。知らなかったでしょ。そんなトレーニングしていた事」

「俺は本気で驚いた。レイラが俺に隠れてトレーニングしていたなんて・・・」

「何故?」「なぜって、男女の体力差は生物学的に明らかでしょ!それを埋めるのは至難の事。」

「レイラは貴方についていくためにどれだけ努力をしてきたか・・・どれだけ泣いたか」

「俺は次の言葉が出なかった。何も気が付かずに俺は自分の才能に酔っていたわけだ。」

「妹は同じ年の俺に遅れじと、男以上のトレーニングをして付いてきたんだ。」

「それなのに俺は「センスが無い」とか、「下手クソ」とか平気でレイラに言っていた。」

「自分の欠点に気付くのも大切だけど、自分の長所も知らなくてはね!」



俺は何と言いたかったのだろう。もう少し、一緒に居て欲しかったのか？小さな子みたいに。

幼い日に俺とレイラはよく母を取り合った。その時の気持ちがあふれ出し出された。

幼い時には母を奪い合ったが、本当に母を必要とした時、母は自分を置いていたように思う。

今、母は俺を見ている。レイラよりも俺が心配なのか？・・・そうだろうなあ・・・。

俺は天上を見ながら母との会話を思い返した。天上が落ちてきて潰されそうな気分だ。

レイラが俺に隠れてトレーニングをしていたと知ったこともショックだった。

俺は男女差と言う意味では男に有利な筋力で成果を出し、レイラは男女差に泣いていた。

それを埋めようとした奴の努力と一緒に居ながら気付いていなかった。

俺は自分が情けなく、俺に必死で付いて来た妹が無性に愛おしかった。

「人に映して自分を知る」という母の言葉が俺の中で膨らんでいた。

何時のまに眠り込んだのか、気がつく朝になっていた。

どうやら俺は、眠れないような悩みとは無縁らしい。

学校でヒマワリに会った。彼女は俺の顔を見てニコリと笑った。

何時も、静かで自立つ存在ではないが、ヒマワリのにこやかな表情にホッとすることが多い。

今日は何となく元気が無いように感じるのは気のせいだろうか？

俺はヒマワリの様子が気になった。時々、何かを考え込んでいるように見える。

放課後に近づくに連れてヒマワリが考え込む時間が増え、心が此処

にないように思える。

俺は心配になった。授業が終わると、彼女は直ぐに学校を出た。何時もだと女子は数人でおしゃべりをしてズルズル、だらだらと動く事が多い。

今日のヒマワリは近寄りがたい雰囲気がある。どうしたんだろう？俺は何となく、彼女の後を追った。

彼女はカバンを抱えて俯き加減で何かを考えながら足早に進む。俺は声をかけるタイミングを見つけられずに追いかける。駅に向う途中で彼女は左に曲がった。

角から数メートルの所に最近できたデイケア施設があった。施設の前で入り口を見つめて何か躊躇している様子だ。

俺は息を吸い込み、声を出した。

「ヒマワリ！」「あああ・・・」彼女は驚いたように俺を見た。俺を見て怖い顔が少しほころんだ。

「此処に用があるの？」「ウン」「何だか、躊躇っているみたいだけど・・・」

「ウン、入る勇気が欲しくて・・・」「どうしたの？」

「昨日、高山さんのおじいさんを怒らせてしまったから・・・」「何故？」

「判らない」「判らないって??????」

「だから、昨日、謝ろうと思って家を探していたの・・・」

「そうなんだ・・・」「だから・・・入りにくくて・・・」

「聞いてみないと、何を怒っているのか判らないジャン！」

「でも、触れられたくないことを私が言ったから怒ったんじゃないかなあ・・・」

「そうかあ・・・」確かに蒸し返すのは得策ではないかも・・・。

「どうしたの君達！」俺達の様子を中から見ていたのか、窓をあけて声をかけた人が居る。

「あつ、柴田さん、こんにちは」「こんにちは、ヒマワリ君。事務

所で話そうよ！」

彼に声をかけられて俺はヒマワリについて事務所にお邪魔した。柴田さんがお茶を入れようと急須と湯飲み茶碗を並べている。

「私が・・・」とヒマワリが声をかけた。

「じゃあ、お願いするかな、ヒマワリ君の入れたお茶は美味しいから」

ヒマワリがお茶を入れているのを見ながら、彼女が初めてではないことを気配で感じていた。

お茶を飲みながら、ヒマワリの話を聞き、柴田さんが説明をした。どうやら、高山さんはヒマワリが家族の話に触れたことが気に障ららしい。

彼は一人暮らしをしている老人だそうだが、このセンターには毎日顔を出す。

家族の事が話題になると不機嫌になる。

ヒマワリが知らずに家族の話題に触れたので機嫌が悪くなったらしい。

昨夜、ヒマワリが謝りに高山さんの家を探した事を知り柴田さんが恐縮している。

「僕が最初に話して置けばよかったね。」

柴田さんは自分の机の引き出しからA4サイズのファイルを取り出してめくった。

「高山さんには息子さん居るけど、奥さんが亡くなってからは会っていないらしいよ」

「そうなんだ、寂しいですね。私、悪い事を言っちゃった・・・」

「本当は個人の情報を明かしてはいけないのだけど、知らない話ができないよね」

柴田さんは一人ひとりの情報をファイルに閉じて保管しているという。

「人生の年輪を刻んでいる人たちが此処に来られるから、皆、いろ

いろあるんだよ。

ちよつとしたことで気に触ることもあるし、嫌いな食べ物が出ると怒り出す人も居る。

でも、我慢しないで怒ってもいい場所にしたいと私は思うのだけど、ヒマワリ君には気の毒な事をしてしまったね。申し訳ない。」

「でも、私は高山さんに何て謝ったら・・・」

「謝らなくてもいいよ!」「えっ?」

「気にしているようなら謝ってもいいけど、きつと、忘れて欲しくないかな」

「そうでしょうか?」「嫌な事は思い出さたくないっていうのかなあ」

「俺、じゃなかった、僕はその気持ち判ります。男のプライドって言うか・・・」

「そうだね、本当に忘れていかも知れないけど・・・」

「そうかなあ、昨日は怒って口も利いてくれなくなって・・・」

「普通に接してご覧、高山さん、今日も来ているから・・・」  
俺達は柴田さんに付いて二階に上がり、談話室に入った。

「高山さん、ヒマワリちゃんが来たよ!」「おう、こんにちは!」

「こんにちは」

今日は気分が良いのだろうか? 昨日、機嫌が悪かったと言う様子は見られない。

彼は一人で将棋の駒を動かしている。「詰め将棋ですか?」「俺は尋ねた。

「おう、お兄ちゃんは将棋ができるのか?」「ええ、駒の動かしか方は知っています」

「どうだい!」「高山さんは駒を打つマネをした。俺はちらりとヒマワリを見た。

彼女が俺の目を見てにつこり笑った。

「いいですねえ」俺は高山さんの前に座った。

彼は俺の顔も見ないで、サッサと駒を並べ始めた。

俺は将棋には多少、自信があつた。

俺はニュージージーの遠征で将棋を覚えた。

小学生の頃はニュージージーで大人に混ざつても遊ぶ物が何もなかった。その中で大人を相手に覚え始めたのが将棋だ。最近ではキャンプで無敵といわれる。

腕はそれ程悪くないはずだ。俺は高山さんを相手に駒を進めた。

・・・約一時間後・・・「負けました」頭を下げたのは俺だった。

爺さん、めっちゃ強い。ところが・・・爺さんの口からは「兄ちゃん、強いなあ」・・・。

俺はちよつと驚いて、高山さんの顔を見た。

「筋もいいし、なかなかいい手を打つなあ」高山さんはご機嫌である。

幾年寄り相手とは言つても、負けた俺は悔しい。

「へえ、このお兄ちゃん強いのか？」気が付くと柴田さんが後ろに居た。

「うーん、強いよ！筋もいいし、あんたとは比べものならん」

「いやあ、高山さんが強すぎるから・・・、有段者の相手なんて、とてもとても・・・」

「えっ！有段者なんですか？うっそ」

俺は正直、脱帽だ。勝つ心算でいたなんて・・・恥ずかしい。

「高山さん、お兄ちゃんに施設を案内してくれませんか？」柴田さんが頼んだ。

「いいですよ！じゃあ、此方へ」

俺は高山さんについて施設を見学した。

お年寄りが集まって、時間を潰す場所くらいに思っていた俺は驚いた。

講習会では老婦人たちが和紙をつかつて、造花を作っている。

展示してある書道の作品も水彩画も水墨画も、ちよつとしたギャラリィだ。

施設の雰囲気がとても明るく柔らかい。・・・理由は、あちらこちらに置かれている花だ。

日本的な器に由緒正しく？生けられた花もあり、籠にはいったアレシジフラワーもある。

「凄いですね。」と驚く俺に「いやあ、年よりは時間があるから・・・」と高山さん。

「下の階はね、体が思うように動かない人たちが来て、入浴サービスを受けたりするんだよ」

「デイケアという設備ですか？」「そう、見るかい？」「ハイ」

俺は高山氏について1階に下りた。

使用中の入浴設備は流石に見学を遠慮したが、車椅子に座って友人と話をしている人たちも居る。

バリアフリーで部屋が結ばれ、車椅子でテレビを見ている数人の老人達もいる。

食事の介護を受けている方達も、お茶を飲みながら折り紙を折るお婆さんも居る。

「よう！」車椅子の老人に声をかけられて高山さんが立ち止まった。

「一局、どうだい？」「・・・いま、若い客人を案内しているから・・・」

高山さんがちよつと残念そうに答えた。「あつ、僕なら、一人で見て回りますから」

「大丈夫かい？」「ええ、大体教えていただいたから・・・」

「じゃあ、やるうか？」高山さんは嬉しそうに顔で笑った。

俺はしばらく、老人の食事を介護しているヒマワリの様子を眺めていたが、柴田さんに声をかけられて事務室に戻った。

「どう？」「中がこんな所だつて知らなかったから、勉強になりました」「そう、良かった」

「作品を沢山見ましたが、どれも凄いですね」「そりゃ、人生の先輩達だからね」

俺達がお茶を飲んでいるとヒマワリが戻ってきた。  
黄色のエプロン姿がまぶしい。生き生きしているヒマワリの姿がまぶしいのだろうか？

ヒマワリを送りながら、彼女が3ヶ月前から週に一度、手伝いに言っている事を聞いた。

昨日が手伝いの日だったらしい。

「今日は飛び入りだったけど・・・たまに時間が空くと他の日にも行くから・・・」

楽しそうに話す積極的なヒマワリを俺はまぶしく感じていた。

内気で自分から意見を言う処を見たことがないヒマワリだが芯は強いのかも知れない。

俺の知らなかったヒマワリの一面を知り、ちよっと嬉しくなった。

学校の成績を上げるために躍起になっている同級生達とヒマワリの生き方にギャップを感じた。

俺は成績や点数に拘るクラスメイトよりも、今できることをやって  
いる彼女に好感を持った。

価値観は人それぞれ違うけど・・・俺は何に価値を求めるのだろうか？  
だから、それを探しに大学に行く。自分の道を決めるために・・・。  
今の自分には何がやりたいのか、何に価値を求めるのか決められない。  
い。

でも、大学に行ったから見つかるのだろうか？何か大切な事を見逃  
していないのか？

正体の無い不安と焦りが広がる。

そんなことがあってから数日が経過した。

俺は変わりなく高校生活を送っていた。

考え出すと出口の無い迷路に迷い込んだような気がして、不安と焦  
りが溢れる。

しかし、何時もの通りに時間だけは過ぎていく。何となく過ごしているうちに時間だけが過ぎ去っている。それを考えると、また、不安に陥るのだが、考えても結論はでない。俺は出口を見つけようと躍起になっている。イライラが強くなり、自分の中で不安と焦りが渦巻き始める。イライラが表に出そうになり、何度か自分を押さえ込む事があった。まずい、このままでは爆発しそうだ。レイラにはこんな事は無いのか？ 奴は目標を持っている。兄貴のナオにはこんな事が無かったのだろうか？

最近食欲も落ちた、普段は2人前から3人前を軽く食する俺が2人前をもてあます。

これでは体が持たない。俺は兄貴のナオに尋ねてみる事にした。

兄貴は普段から夜中まで自室でパソコンを打ち込んだり、資料をひっくり返したりしている。

おれは普段から早寝早起きの健康的な生活だ。

最近遅くまでレイラの勉強を見ているときがある。レイラに気付かれたくない。

俺は真夜中の0時になるのを待って兄貴の部屋をノックした。

「なんだ、お前か？」 ナオは俺の顔を見て怪訝そうに言った。

「どうした？ 英語なら教えられるけど、社会と国語は国大の最低ライン迄だからな！」

「聞いて欲しいんだ、兄貴がどうだったか教えて欲しいんだ」

俺は兄貴のベットに腰掛けると兄貴に向って、自分の不安や悩みをぶちまけた。

一人で喋り続ける俺の話を、兄貴は頷きながら聞いていた。

俺が喋り疲れるように話を終わると、「それだけか？ 他には？」と

兄貴が聞いた。

俺は進路も決まっていけないのに、施設を訪問しているヒマワリのこと話した。

ヒマワリは兄貴に家庭教師をしてもらったこともある。兄貴は良く知っている。

「へえ、ヒマワリちゃんはそんなことをしているんだ。彼女らしいねえ」

「そうなんだ、それに対して俺は何もしていない」「すれば、いいじゃないか」

「何を？」「何をって今、やりたい事をさ・・・」

俺は目が点になった。「進路を決められなくて悩んでるんだ、俺は！」

「じゃあ、悩んで見つかったのか？」「いいや」

「でも、勉強をしなきゃ、俺の成績じゃ大学は・・・」「厳しいだろうな！」

「そうだろう、好きな事はできないじゃないか」「そうかなあ」

「兄貴とは違って俺は勉強ができないから・・・」「やらないだけだろう」「・・・」

「俺だって、同じだったよ」「えっ！」「俺は正直、兄貴の言葉が以外だった。

「俺だって何がやりたいか判らなかつた。今でも何になりたいかも、なれるかも判らない」

「だって、兄貴は何か研究で夢中むちゆうになっているじゃないか？」

「確かに、興味きょうみを持った課題かだいについて研究はしているさ、でも、これが最終目的さいしゅうもくてきなのか？」

「俺に聞かないでよ」「研究したから何になれるんだ？」「研究者じゃないの？」

兄貴は俺の顔をみてクスクスと笑った。

「サッカーをやっていればサッカー選手だろ」「でも、プロになるのは一握ひとつかいりです・・・」

「同じさ、研究をしたからといって、それで食べて生けるのは一握りさー！

お袋のように研究所で研究を続けられる例は少ないよ。それだって

企業の価値観かちかんが変われば、自分の研究が全く相手にされなくなる可能性もあるさ」

「兄貴は何をやっているの?」「まあ、色々だな。まだ、基礎的な研究でしかない」

「ふーん、研究にも色々あるんだ」「そうだな」

「でも、それと、俺が方針を決められないのは話が違つと思つただけど・・・」

「方針つて、進路か?それとも職業なのか?」「・・・まずは進路だな」

「進路の選択肢はいくつあるんだ?今から医学部を受験するとか・・・」

「止めてよ!お袋みたいなことを言うのは・・・」「なんだ、ヒントを貰もらっているのか!」

「えっ?ヒントなの?」「そうだろうなあ、選択肢を絞しぼれと言つてとだろう」

「あつ」俺は迷路めいろから抜け出すヒントが判らなかつた愚おろかな自分に気付いた。

「選択肢が整理せいりできれば、それを視野やしに入れて今すべきことが判るだろ、

自分がやりたい事があれば選択肢のどれを選ぶかのできる範囲も見えるよな」

「兄貴はそれを考えて、それでも国体に行ったの?」

「うーん、そこまで立派りっぱじゃないな、予選よせんに出る時間が取れそうだった、それだけかな?」

「それで、予選会よせんかいで優勝ゆうしょうしたから本線にも出場したわけ?」

「そうだな、だって、試合に出た以上は勝つた者の責任せきにんがあるだろ」

「それで、大学受験は不安じゃなかった?」「そりゃ、不安はあつたさ。当たり前だろ」

「良く、試合に出れたね」「それは切替えの問題だろ」「えっ?」

「試合の初戦でミスったからって、次の日に気持ちを切り替えなきゃ勝てないだろ。」

同じ事さ、受験勉強に集中するのと試合に集中するのと、切替えは切り替えだよ」

「・・・」俺の心に光が差したような気がした。

俺は部屋に帰って兄貴の言った言葉を反芻はんすうしていた。

あんなに自信に満ちているように見える兄貴が不安を感じていた事。俺と同じように受験を前に不安があったことを知ってホッとした。

おれは受験という漠然ぼくぜんとした壁かべをすっかり見ようともしないで怖こわがつていたのかも知れない。

大体、おれに選択せんたくできる道は現状から条件で絞り込めば数本に成るはずだ。

その中から、選べばよい。受験があるからやりたい事を諦める必要はない。

受験を前にしても、やりたい事は実現する方法を探さがし、試ためしてみた。

何となく、自分の道や方向性が見えてきたように思えた。

俺は改めて大学の資料を見直した。全部を読むのではなく、自分の条件でまず選り分けた。

選んだ幾つかの資料をもう一度読み直して見ると大体の方向性が残ってきた。

毎日、少しずつ資料を読み、自分の焦る気持あせちを抑えながら、宿題やレポートの少ない日を選んで手を進めた。

レイラを泣かした日から一月近く立った頃に俺なりの方向が見えてきた。

日曜日の食事の後で、「俺、珈琲コーヒーを入れるから」と宣言せんげんした。

「じゃあ、私手伝うね。」俺が珈琲メーカーをセットする横でレイラがカップを並べた。

珈琲を入れると、家族が何となく、俺の口の開くのを待つ気配を感じた。

「俺、院内推薦を受けようと思うんだ。」「そう」「お袋が頷いた。

「学部は社会科学の方向で考えている」

「具体的に学科はまだ決めていないってことだろ?」「兄貴の質問に俺はうなずいた。

「いいんじゃないか?まだ時間はあるんだろ?」「兄貴の言葉に俺はホツとした。

「そうね、学内締め切りまではまだ、2ヶ月あるわね」とお袋も同意した。

「それまでに大学で習う科目を調べて決めようと思うんだ」

「レオは他の大学は受けてみないの?」「レイラが尋ねた。

「俺の成績だと、今から、受験勉強で外部を受けるのは厳しいし、自分のやりたい事ができないから・・・」

「やりたい事って?」

「俺は高3で、インターハイと国体に行く。3年連続の県大会優勝記録を狙う」

「そうなんだ・・・私は・・・」

「レイラは無理をすることは無い、俺とお前は同じではない。価値観も違う」

「そうね、レイラはその時になってから考えればいいんじゃない?二人とも自分にとって大切な方を優先すれば・・・」

「そうだぞ、レイラ、俺のように、ギリギリになってエントリーってことも有りだからな」

「えっ、だって兄さんはそれで優勝しているんでしょ」

「負けたら、引退試合になっていたんだ。納得したくてエントリーしたのだから・・・」

「えっ、そんな心算だったの?」

「そうさ、勝てるとは思って無かったよ、練習も殆どしてなかった

だろ！」

「でも、試合前の一週間、兄貴の練習は半端はんぱじゃなかったな、目が怖こわかったもの」

「だから、集中する先の切り替かえて事だよ」俺はナオの顔を見て笑った。

「あれ、何か二人で・・・変だなあ、私の知らない秘密があるとか・・・」「ないない！」

レイラの声に俺と兄貴が同時に答え、手を振った。何時いつもの双子の同期どうきのように・・・。

「では、レオはこの夏も海外のトレーニングキャンプに参加するの？」とお袋に言われ・・・。

「まだ、決めていないけど、推すい薦せんを狙ねらうなら次期が早いから、夏は・・・」

「そうね、良く考えて決めなさい」「はい」  
珈琲を飲み終わった俺はレイラに声をかけた。

「おい、そろそろ、勉強をはじめの時間だ！」「ハイ！」  
レイラがはじかれたように立ち上がって、皆で大笑いになった。

「受験生は勉強しなさい、私が片付けるから。美味しかったわありがとうレオ」

俺はちよつと満足した気分になって席を立った。

そして『受験生は勉強』・・・などと言う言葉をお袋が言ったのは初めてだと気付いた。

悩める受験生達（後書き）

家族の温もりを実感した俺だった。

岐路へきろく：それぞれの道へ（前書き）

俺とレイラはそれぞれの目標を見つけた？・・・と言っても俺の場  
合は「人生の目標を探しに大学に行く」って感じたが・・・。

自分達の目標に向って順調な滑り出し・・・になるはずもなく、最  
初から事件勃発だ。

## 岐路へきろく：それぞれの道へ

写真の裏に名前を書き、貼り付けて完成である。

俺は願書を書き上げた。俺は出来立ての書類を持ってお袋の書齋を訪ねた。

お袋は機関銃のような速さでPCを叩いていた手を止めて振り向き、俺の顔を見た。

「願書を書きました。提出しようと思います。」俺は改まった言葉で母に話しかけた。

「書類を確認しましょうか?」「お願いします」母も他人行儀な話し方だ。

俺はお袋に書きあがったばかりの願書を手渡した。

お袋は俺に背をむけ、机の上に書類を開いて目を通した。

次に俺を振り返り、「社会学を専攻することにしたのね」と口を開いた。

「はい、一番、自分で興味を持ってそうな内容だったので・・・」

「そう、受験費用は?」「受験料を振り込んで控えを入れます。」

「私が行きましょうか?」「自分でやらせて下さい。明日は3時間で終わるので行って来ます」

「判ったわ、お願いします。チョツと待ってね。」

お袋は机から封筒を出し、受験料を俺に手渡した。封筒に何かメモをしている。

「レイラは推薦を考えていないのですか?」

「ええ、学校からはお話を戴いたけど、本人が受験するって言うから・・・」

「そうなんだ、推薦が受けられるならその方が楽なのに・・・」

「レオは楽だから、推薦を選ぶの?」

「それも有るけど、今、やりたい事があるからって言う方が強いかも知れない。」

「そう、やりたい事はできそうなの？」

「はい、高校最後の大会に全力でぶつかりたいから、大学を早く決めたいと思います」

「判ったわ、貴方の気持ちは、いいんじゃない」

「本当に？レイラみたいに受験したほうが良いと思いませんか？」

「いく ツインズ 幾ら双子だつて、レオとレイラは別の個性こせいを持っているのよ、同じであるはずが無いわ」

「よかった、それを聞いて・・・ヤッパリ、同じでないことに不安があつたから・・・」

「そうかも知れないわね、本当に貴方達あなたたちは仲が良いから・・・」

「そうかなあ、普通だと思っていたけど・・・」

「小さい時から何時も一緒に居るといふ事は、普通じゃ中々できないことだわ！」

「そうだね。ツインズ 双子だから歳も一緒だし・・・」

俺とお袋は一緒に笑った。

「レイラは不安に思っていないのでしょうか？」

「多分、貴方以上に不安を感じているだろうと思うわ」

「アイツは俺に何も言わないけど・・・」

「受験勉強に自分を追い込む事で忘れようとしているんじゃない？」

「アイツは夢中になると他が見えなくなるから、気がつくこわと怖くなつて泣くくせに！」

「そうね、貴方の言うとおり。小さい頃ころに迷子まごになつた時も・・・」

俺は幼い頃に迷子になったことを思い出した。

レイラが「お母さんはこっちに行った」と俺の手を引っ張り、俺を引きずる勢いきいで歩いた。

追いついた人が母ではなく、よく似た服装をした知らない女性だと気がつくつと、

俺にしがみついて泣き出した。俺も泣きたい気分だったが、泣く事もできず・・・。

レイラをなだめると、どうしようかと悩むのと少ない脳みそをフル回転で使った。

近くの人が気付いて、迷子のアナウンスを頼んでくれた。

俺はお客様相談窓口でもきちんとなを名乗り、母の名前を言った。

母が息を切らせて走りこんできた。レイラは母に抱きつきワンワン泣いた。

「しっかりしたお兄さんですね。きちんとお名前もお歳も言われませんでした」

「ありがとうございます。レオ、偉かったわね。レイラを守ってくれたのね、ありがとう」

お袋に言われて、俺も泣き出した。俺は鈍いのだろうか？

その頃のお袋は今のように入禄も無かったから、俺とレイラを両手に抱えるのは辛かったに違いない。

俺は大学推薦入試の手続きを完了した。

ヒマワリも推薦枠内ギリギリの点数で同じ学部に入書を出した。

試験は面接だけだ。・・・と言っても同じ敷地内にある大学なので緊張感が低い。

試験当日の10時に高校に集合して、10時半までに大学に移動する。

わざわざ、高校で集まらなくてもと思うが、俺達の信用が無いのか？教師が心配性なのか・・・。

当日、何時もはチャイムと共に教室に滑り込むメンバーも早めに着いている。

ネクタイを緩めている奴もいないし、Yシャツの裾を上着からはみ出す奴もいない。

学年主任の国本と各クラス担任が現れた。

俺は周囲を見回し、ヒマワリの姿が無い事に気がついた。

国本が学年で一番先に入試を受ける俺達に今更のように注意を始める。

俺は机の下でヒマワリにメールを打った。どうした、ヒマワリ？寝過ぎしたのか？

ヒマワリはたまに遅刻することが有ったが、マークされるほどではない。

担任もヒマワリが来ていない事に気付き、連絡を取るために教員室に戻った。

俺達は大学に移動し、控え室で面接試験の手順について説明を受けた。

まだ、開始までに時間がある。

「トイレに行つて良いですか？」おれは担当者に告げてトイレに向つた。

ヒマワリに電話をかける。電源が切られているらしく電話に出ない。どうしたんだ、事故か？トラブルか？俺はヒマワリに状況を知らせるようにメールを打った。

部屋に戻ると、直ぐに3グループに分かれて面接会場に案内された。

3名ずつ、順番を待ち、呼ばれたものが面接を受ける。

俺のポケットで携帯が震える。

俺は、「ちよつと・・・トイレ！」と担当に声をかけて移動した。

ヒマワリからである。「どうしたんだ」

「高山さんが倒れたの・・・駅で人だかりがしてたの。高山さんに似ていたから覗いたの。」

高山さんが倒れていて、救急車が来て、一緒に病院に来たの」

「何処の病院に運ばれたの？」俺は病院の名前を聞いた。「どうするんだ入試は！」

「私はもう間に合わない。小柳君は頑張つて！試験が終わつたら来てくれる？」

「判つた」俺が電話を切ると案内の担当者が怖い顔で後ろに立つて居た。

「君の番だよ」

俺は案内された面接室に入室した。高校で習ったとおりの手順で挨拶をして席に着いた。

3名の面接官が向かい側に座っていた、成績について若い面接員がいきなり、突っ込んだ。

「スポーツも良いけど学業も大事だから・・・」

もう一人の先生がさらに質問を追加した「何をしたいくて大学に来るの？部活？」

俺は「やりたい事を探したくて大学に行く」と説明した。

・・・ヒマワリは大学で何をしたいんだろう・・・？

俺の言葉が途切れたのを見て、一番、年長の先生が質問した。

「どうしたのかな？何かいいいたいことがあれば話してご覧」

俺は一瞬考え、3人の面接官の顔を見てから、息を深く吸い込んで一気に話し始めた。

「実は、今日、アクシデントがありました。

先ほど、一緒に受験を予定していたクラスメイトから電話が入りました。

ボランティアで訪問している、施設に通っている老人が駅で倒れたという知らせでした。

自分は救急車で病院に同行したと言っています。私もその老人を知っています。

家族と離れて一人暮らしの老人です。

今日の面接に向けて大学への志望動機を話そうと色々と考えて、まとめました。

でも、今は老人のことが気がかりでもとても上手く説明できません」

「そうなの、大変だ。救急車で友人は付き添ったのかい？」「はい」

「誰なの？受験に来ていないんだろ？」「同級生の山崎君です」

「そうか、病院は何処なのか聞いたんだね？」俺が頷くと老教授は俺に言った。

「直ぐに行きなさい。そして、その方が落ち着いたら、僕の所に友

人と一緒に報告に来なさい。

僕もその老人の事が気がかりだから……。早く行ったほうがよい」  
「はい。」

「僕は藤崎という。必ず報告に来なさい。大事にならないと良いが、  
……。直ぐに行きなさい」

「ハイ、藤崎先生ですね。判りました。失礼します。」

若い先生が何か言おうとしたが、俺が背を向けるほうが早かった。

俺はドアまで戻り、振り返ると、3人の先生にお辞儀をして部屋を  
後にした。

……。藤崎先生……。」部屋の中で先生方の話し声が聞こえる。

俺の退室が早かったからか、案内の担当者が驚いたように俺の顔を  
見た。

親友のタカとすれ違った。彼が何か言おうとしたようだが、俺は先  
を急いだ。

大学の前で運よくバスに飛び乗れた。何時も駅まで15分を歩いて  
いる。

小学生しか乗らない通学バスである。しかし、バスなら5分で駅に  
着く。

俺はヒマワリにメールを打った。

駅では電話を試してみたが、ヒマワリは電話を切っているようだ。病  
院なら仕方ない。

電車の中で、再度、メールを打った。

市民病院に辿り着いた俺は、受付で救急車で運ばれた老人について  
尋ねた。

受付で案内されて俺は処置室に向った。

処置室の前のベンチに制服姿のヒマワリが座っている。

「ヒマワリ、高山さんは？」驚いたようにヒマワリが顔をあげた。  
硬い表情が少し、和らいだ。

「小柳君、どうしよう……。高山さんは私が判らないかも……。話

せないみたい……」

「意識はあるの?」「判らない、目は開くんだけど、何処どこを見ているのか……」

「今は?」「検査中けんさちゆうだつて、手術になるかも知れないから家族を呼ぶように……」

「家族と言つても困つたね」「柴田さんに連絡取れなくて、病院でも連絡してくれてる」

俺はヒマワリに並んでベンチに腰こしをかけた。

ヒマワリは膝ひざの上でハンドタオルをギュツと握り締しめた。

「俺、電話してこようか?」

ヒマワリからデイケアセンターの連絡先を聞くと俺は救急用玄関きゅうきゅうぎんかんとくから外に出た。

センターに電話をしたのだが「今日は訪問先ほうもんせんに柴田所長は出かけています。先方に連絡を取っていますが、2件目の訪問先に移動中のようにです」と言う返事である。

ヒマワリが状況を知らせたので大体のことは判っているようだ。

万一、手術と言う話になつても俺達では何も判断できない。

柴田さんが捕つかまらなければ、どうして良いかが判らない。

俺はとりあえず、婆おばあにメールで状況を伝えた。知恵ちえがあれば拝借はいしやくしよう。

病院なので携帯の電源を入れられないことも書いておいた。

ヒマワリのところに戻り、俺は黙だまって横に腰を下ろした。

俺の様子からヒマワリは連絡が着かなかつたことを悟さとつたらしい。

俺は小さい声で今日の状況をヒマワリから聞きだした。

中から出てきたナースが「高山さん」と俺達を呼んだ。

「ご家族ですか?」と尋たずねるが、残念ざんねんながらご家族ではない。

「違います。付き添そいです」「ヒマワリが説明にならない理由を言いつた。

「ご家族はお見えじゃないの?」「高山さんは一人暮らしなんです」

「そう、それでお知り合いの貴女が・・・？」

「先生から病状の説明があります。お聞きになりますか・・・？」  
ヒマワリが不安そうに俺を見た。

「お願いします」俺が答えた。「此方へ」

俺達が部屋に入り、医師が説明を始めた処へ柴田さんが飛び込んで来た。

柴田さんが来た事で俺達の肩が軽くなった。

医師の診断は「脳梗塞」であつた。脳の血管が詰まつたために意識障害が出ている。

詰まつた血を溶かす薬を使うと言う説明だ。

危険な状態なので家族を呼ぶようにと言われ、ヒマワリが青ざめた。

柴田さんが看護婦さんと、家族への連絡方法について相談している。

高山さんは病室に移された。ICU（集中治療室）とかで付き添いはできない。

ガラスの向こうで点滴や酸素吸入など多くの管に取り巻かれ治療を受けている姿が見える。

『高山さん頑張れ！』おれは声に出さずに応援した。

柴田さんは高山さんの息子さんに連絡を取ろうとしたが、電話が通じないという。

「失礼ですが、高山さんの付き添いでしょうか？」

ICUの前で小柄で地味な中年の男性から声をかけられた。

地域の福祉を担当する公務員で、地域担当者とな乗る人が俺達の相談に加わった。

どうやら、俺とヒマワリでは役不足と考えたお袋が手配した援軍らしい。

役所の方で家族に連絡を取ってくれるようだ。

家族に連絡が着かない場合の手続きも代行してくれそうだ。

高山さんの容態は変わらない。呼吸と心拍数は落ち着いている。意識がはつきりしない、うとうととしているようだ。当分はICUで治療が行なわれるらしい。

医師に「直ぐ急変する事はなさそうだから、暫く様子を見ましよう」と言われた。

俺達は大人二人に手続きを任せて病院を出た。病院を出ると大きな不安に襲われた。

「試験どうだった?」「判らない、途中で出てきたから・・・」「えっ!」

俺は面接の時のいきさつをヒマワリに説明した。

「学校に戻るうか?」「学校って・・・?」

「面接の時に、担当の先生から友人と報告に来るようになって言われたんだ」

俺達はいつもなら下校する時間に登校した。高校の門を通り過ぎて大学の正門に着いた。

正門の守衛室で藤崎先生に呼ばれてきたことを話すと、守衛が電話で連絡を取ってくれた。

俺達は守衛室で渡された地図を片手に研究室を探した。

大学の構内には幾つかの殺風景な建物が建っている。

その中から、地図を頼りに先生の居る場所を見つけなくてはならない。

古いコンクリートの建屋に着いた。此処に先生がいるらしい。

入り口のガラス戸を押して中に入った。場所が正しいのか?誰かに確認しようにも人氣が無い。

俺達は4階まで薄暗い照明の階段を上った。

両側にドアの並ぶ廊下がある。部屋番号とネームプレートを確認しながら進む。

奥から一つ手前で藤崎先生の名前を見つけた。

俺はヒマワリの顔を見て頷いた。ヒマワリはコクリト首を振った。

俺はドアを3回ノックした。「はい」中から返事が聞こえる。

「小柳です」「山崎です」俺が大きな声で名乗ると、ヒマワリが続いた。

「どうぞ」「失礼します」

ドアを開けて中に入り立ち止まった俺は部屋を見回した。

細長い部屋の両側に天上までの本棚が並び、びっしり本が詰まっている。

入り口の近くに長い机があるが、その上にも本が積んである。

「此方へどうぞ」と言いながら本の向こうで先生が立ち上がった。

俺達は積まれた本を崩さないように進み、勧められた折りたたみ椅子に座った。

本棚が迫ってくるので先生とは膝がくつきそつだ。

「ご老人は落ち着かれたのかな？」先生は最初に尋ねた。

俺は高山さんが意識ははつきりしないが心臓と呼吸は落ち着いていると報告した。

「そう、それは良かった。君達も疲れたらう。コーヒーでも入れようか。インスタントだが」

先生は俺達の脇に置かれたテーブルに種類の違うマグカップを3個並べた。

「私が・・・」「嬉しいなあ、君が入れてくれるの？」

ヒマワリは砂糖とミルクを尋ねると手早くコーヒーを作った。

「どうぞ！入れてもらってどうぞは可笑しいか？」先生に言われて、ヒマワリの顔が和んだ。

「老人が倒れた時は驚いたらう、よく付き添ってあげたね。」「ハイ、夢中でした」

「不安だったらうに・・・」「はい」ヒマワリは涙ぐんだ。

「ゴメン、泣かせてしまったかな、でも、素晴らしいよ君達は・・・」「よく、施設には行っているのかな？」先生は高山さんの事だけで

なく施設のことを聞いた。

ヒマワリと俺が説明すると、ボランティアの関わり方や、仕事の内容を尋ねた。

将来、福祉しゆふくしに関係する仕事をしたいのかとも聞かれたが、ヒマワリは「ハイ」と言ったが、俺は「判らない」と答えた。

ヒマワリが将来のことを考えて施設に通っているとは俺も初耳だ。

一時間以上、先生と話はなしたろうか……。

先生は帰り際に俺達が報告に来た事に礼を言い、高山氏が早く良くなるように祈っていると付け加えた。

俺達は、先生と話したことで何だかとても暖あたたかくなった気がした。大学入試に備えて、QA対策を考え、面接の練習をしたことが馬鹿ばかみたいに思えた。

俺は見事に面接を放棄ほうきし、ヒマワリは受けなかった。

それでも、俺達はそんな自分に納得なっとくしていた。

俺達は大学の門を出ると駅に向って歩き始めた。

俺達の横を車が通り過ぎようとして、ブレーキをかけ、停とまった。

「レオ！」窓をあけて怒鳴どなったのはお袋だった。

お袋はバス停に車を止め、俺達を乗せた。そして、チョツと待つてと電話をかけている。

漏れ聞もくところでは、どうやら、俺達の事を話しているらしい。

「……今日は疲れているようですので、明日、改めて……失礼します」

「高山さんは意識いしが戻ったそうよ、麻痺まひは出ているようだけど……」

「えっ、本当ですか？」ヒマワリがホツとしたように叫んだ。

「誰から連絡がはいったの？」「柴田さんって言う方からよ！」

「今日のことをきちんと報告しないとイケないけど、ヒマワリさん、

お父さんにお会いできるかしら・・・？」

「いえ、父は出張に出ている、来週まで帰りません。」

「そう、ではお父様には電話で了解を戴くから、うちにいらっしや  
い」

ヒマワリはチョツと考えてから答えた。「はい、でも父にはメール  
で知らせます」

「判ったわ」お袋はそのあとは家に向って車を転がした。

家に帰ると、台所には兄貴が居た。

「おや、ヒマワリちゃん、久しぶりですね。」「はい、こんばんわ」  
兄貴は手際よくサラダを作っていた。

「ヒマワリちゃんはビーフシチューは好きですか?」「はい、大好  
きです。」

俺達は、手を洗うと、兄貴を手伝って食器を並べた。

「言い匂い!」レイラが現れた。「こんばんわ」ヒマワリが声をか  
けると、

「こんばんわ!来てくれたの、嬉しい!!」と声が高くなる。

「レイラ、ヒマワリさんに後で着替えを貸してあげて!」「は〜い  
!今、着替えない?」

「いいえ、大丈夫です。」「俺も腹ペコだ〜!」俺達は制服のまま  
食卓についた。

俺達は食事をしながら、今日のいきさつを話した。

大学の先生に報告に戻った事を話すと、お袋が「先生は何と言った  
の?」と尋ねた。

高山さんの事を心配して、良くなるように祈っているとされたこ  
とをヒマワリが報告した。

母が、高山氏が意識を回復したという情報が柴田氏から入った事を  
告げると、皆もホツとした。

「あれ!」レイラが素っ頓狂な声をあげた。「どうした?」

「あの、ヒマワリさんもレオも今日の入試は・・・どうなったの？」  
「私はパス」「彼女はDS（棄権）、俺はDF（途中棄権）」  
「何なのそれって・・・」

「でも、済んだ事だから・・・」ヒマワリはあっけらかんと答えた。  
俺も、同じような気持ちだった。

「ところで、お袋はなぜ、あんなところに居たわけ？」俺が尋ねると・・・。

「学校から呼び出されたのよ！中学の3者面談以上のヒットだったわ！」

入試に来なかったヒマワリと、面接を途中で飛び出した俺のことで高校は大騒ぎとなったらしい。

「で、どうなった訳？」俺は他人事のように母に尋ねた。

「どうやら、柴田さんから連絡が入り、初めて事情が高校に伝わったらしい。

事情は判っても、肝心な俺達が無処に居るのか判らない。

先生達は俺達を探して、大騒ぎでになった。同じ校地に居たのに・・・。

いずれにしても明日は大変そうだ。明日に備えて、腹ごしらえだ！  
考えてみたら、朝食食べたきりで何も口にしていない。

俺は兄貴の作ったビーフシチューを3杯もお変わりし、ヒマワリもお変わりをした。

「だって、とても美味しいから・・・」ヒマワリは頬をそめて言い訳をいった。

兄貴は料理の腕を誉められてチヨツと嬉しそうだ。

でも、兄貴の料理はプロに負けないと俺は思っている。

食後の珈琲は俺が入れた。

珍しく、レイラがヒマワリと一緒にお袋の荒い物を手伝っている。

珈琲を飲みながら、俺とヒマワリの話で盛り上がった。

高山さんの容態が良い方向に向っていると聞いて安心したのかヒマワリも饒舌だった。

こんなに話ができるとは知らなかった。俺はヒマワリの別の顔を見た気がした。

「そろそろ、お風呂に入って寝なさい。明日は高校に説明に行くのでしょう」

お袋に言われるまで、俺達は話し込んでいた。

「ヒマワリさん、私のスエットでいいかな？」「ありがとう、お借りします。」

「一緒にお風呂に入らない？」「えっ！うれしい！」

「俺も！」と言った途端に二人から冷ややかな目で睨まれた。

「レオ、お前は俺と入ろう！」兄貴が言くと、二人はコロコロと笑った。

久しぶりにヒマワリの屈託の無い笑顔を見て、俺はホッとした。最近、すっかり口数の減ったレイラも今日はとても楽しそうだ。

翌日は朝早くから学校に行き、待ち構えていた学年主任と担任に事情を説明した。

俺達の報告をメモを取りながら聞いていたところを見ると報告書でも作るのだろうか。

午後の2時に合格発表がある。報告をした時に担任に帰宅してよいかを尋ねたが「NO」と言われた。

駄目だとわかつていている発表を聞きに教室に行くのは気が重かった。俺達は大学の食堂と図書館で時間を潰してギリギリに教室に入った。普段なら一緒に教室に入るなどという事はしないが、今日は別々に入っても同じだろう。

案の定、部屋に入ると俺達にクラスメイトの視線が突き刺さる。

俺もヒマワリも沈黙ちんもくを守った。

俺達が集合している部屋に学年主任が現れると、昨日の結果について話を始めた。

「今回の入試では面接で不合格と判定された者が男子に1名居る。」と言った。

男子1名と聞いたクラスメイトが俺のほうを見た。

「各担任が結果を手渡すので、合格者は大学入試課に行き、手続き書類を受け取り帰宅する事」

そして、俺とヒマワリが呼ばれた。俺達は胸を張って学年主任について部屋を出た。

主任の向ったのは教員室ではなく校長室だった。

俺達が部屋に入ると校長は机の前に座っていた。学年主任は俺達を校長に引渡して立ち去った。

俺達は叱られるような事をした覚えは無い。校長に呼ばれた理由がわからなかった。

生まれた初めての校長室で、校長は部屋に置かれたソファに座るよう言った。

「失礼します」俺達は指示に従った。校長は俺達の前に座ると口を開いた。

「試験の当日、何が起こったのか君達の口から聞きたくて来て貰ったんだよ。」

当日の話は担任や学年主任に報告している。校長が知らないのだからどうか？

怪訝けげんそうな顔をした俺達に説明した。

「報告は聞いているけど、君達の話を直接聞きたくてね。僕にも話してくれないかな？」

「ハイ」

俺は当日、時間になってもヒマワリが来なかった事から連絡が取れ

たところまでを話した。

続いてヒマワリが朝起こったことを説明した。

俺はヒマワリの話を引き継ぎ、面接の場で事情を話して病院に向った事を説明した。

その後、福祉関係者をお願いして病院を出て、大学に報告に来た事も話した。

俺達の説明を先生は頷きながら聞いていた。俺達の話が終わるとヒマワリに一言、尋ねた。

「大変だったね。君は入試の事が心配じゃなかったの？」

「気にならなかったかという嘘になります。でも、そんなこと考える余裕がありませんでした」

「そうか、そうだよ。では、小柳君は？」

「僕も大変な事が知り合いに起こっているのに山崎一人に任せおけませんでした」

「そうか、そうか、うん、うん」何故か校長は嬉しそうに頷いている。

「君達は僕の自慢の生徒だよ」と俺達を見て笑った。そして話を続けた。

「先生はさつき、大学に行って学長とお話してきたんだ。

君達は学院の望むキリスト教教育を受けて育った自慢の生徒だ。

自分の不利益をかえりみず、人に尽くした事は本当に立派だと思うよ。

僕はそれを学長にお話ししようと思ったんだ。」

『ふん、良いところあるじゃん。校長先生！』（心の声）

「ところが僕が言い出す前に、藤崎教授から君達をたいそう誉められてね！」

『なに？藤崎教授！』（俺は驚いた・・・藤崎先生は学長だったのか・・・?!）

「学長はね、人間的に立派な事をした君達を大学は喜んで受け入

「『りたい』と言ってくれたんだよ！」

校長はニコニコを通り越して、クシャクシャの笑顔で僕達の前に封筒を置いた。

「でも、私は面接にも欠席しました」ヒマワリが悲壮な声で言った。「藤崎教授は自分が君達と面談した結果を報告して教授会の承認を得てくれたそうだ。」

教授会のメンバーからも二人の扱いについて反対の声はなかったとか……。封筒を開けてご覧。」

俺達は顔を見合わせ、殆ど同時に封筒を開いた。

中から出てきた合否通知書類には受験番号と名前が記載され、「合格」と印字がされていた。

俺は校長とヒマワリに見えるようにヒマワリは俺に見えるように広げて校長に見せた。

「おめでとう」校長に言われ、「ありがとうございます」と答えたものの何か信じられない。

ヒマワリは驚きで涙がこぼれそうになっている。声が出せずに深くお辞儀をした。

俺達はふわふわした気分で校長室を後にした。

校長室から出て、事務室の前を通りかかると、お袋と担任が話をしている。

「あつ、小柳君、山崎さん」担任が俺達を呼び止めた。

「先生」俺は説明できずに、封筒から合格通知を取り出して提示した。

ヒマワリも俺にならった。

「まあ、校長先生が大学にお話してくれたの？」お袋も驚いている。「うん、学長に話に言ったら、学長が合格にしてくれていたんだって」

俺は怪しげな日本語で説明した。担任がメガネをずらせて目頭を押さえた。

「そつそつつか・・・良かったなあ。本当によかった。おめでとつ。」  
俺達は手続き書類を取りに大学に寄り、お袋の車で家に戻った。

お袋からは柴田さんから電話をもらった校長が、「大学に事情を説明に行く」と言い出したいきさつを聞いた。

再試験を受けられるように手配したいと校長から連絡を受けて高校に出向いたと言う。

「藤崎学長、流石ね！」お袋に言われて「お袋は藤崎先生が学長だつて知つてたの？」と聞き返した。

「いやだ、レオったら、藤崎教授が学長だと知らないで報告に行つたの？」

「・・・あの・・・私も知りませんでした。でも、知らなくて良かった。偉い先生だと知つていたら何も話せなかつたとおもいます。とても優しい先生でした。」

「嫌だわ、貴方達は受験する大学の学長の名前も知らなかつたの？ 呆れた！」

お袋はバツの悪い顔をしている俺達を見て、大声で笑つた。

「ヒマワリさんは、直ぐにお父様に報告しなくちゃね」「はい、さつき電話しました。父も驚いています。」

「今日も泊まりなさいよ！ 必要な物があつたら家に取に寄つてあげるわ」「いいえ特に何も！」

「そつ、着る物もレイラので間に合うわよね。私からお父様に泊まつていただと連絡するわ」

お袋は何時もと違う道を走っている。あれつと思つてしていると市民病院の駐車場に乗り入れた。

俺達は高山氏の入院するICUに向つた。

母が柴田さんから聞いた様子を教えてくれた。

高山氏は大分落ち着き、経過も良いらしいが、右半身に麻痺が出て

いる。

ICUの前に着くと柴田さんが知らない男性と話をしていた。俺達が挨拶すると、見知らぬ男性が答えた。

「ありがとう、父を病院まで運んでくれたと聞きました。本当に君達が居なかつたら・・・」

目が点になつて居る俺達に柴田さんが、大阪の息子さんに連絡が取れて昨夜、駆けつけたと説明してくれた。

お袋は面会を遠慮して外で柴田さんと話して居ると言う。

俺とヒマワリは靴をスリッパに履き替え、手を消毒して高山さんを見舞いにICUに入った。

高山さんは呼吸の補助器具のため話はできないが、ヒマワリの顔を見て嬉しそうに頷いた。

俺が左手を握ると、しっかりと握り返した。高山さんが答えてくれたことで俺は凄く安心した。

全てが良い方向に向つて居る。俺は感じ取つて居た。

家に帰ると兄貴がお袋に合図を送つた。お袋がにっこり笑つた。

「お帰りい〜！」階段を下りながらスエット姿のレイラが現れた。寝起きらしく髪がボサボサだ。

ヒマワリの顔を見ると「あっ、ごめんなさい！こんな格好で！」慌てて、髪の毛を押さえている。

「レイラ、食事に行くから、ヒマワリさんに私服を貸してあげて！」「食事に行くなんて、何かあつたっけ？」

「お祝いよ！二人の！」「えっ、もしかして合格したの？うそ〜！何で直ぐに知らせてくれないの！おめでとう！」

レイラはいつもどおり、俺に抱きつき、背中をポンポンと叩いた。「なに言っているんだ、俺が声をかけても起きなかつたくせに・・・」

「兄貴に言われ、ばつが悪そうに首をすくめた。

「ヒマワリさん、おめでとう！今後もレオを宜しくね！」「はい」

ヒマワリはあっけに取られている。  
そりゃそうだろう、若い男女が人前で抱き合っつて、兄妹でなきや事件だ。

「おかあさん！メイクしていいかな！」レイラの問いに叱り付けると思ったおふくろは意外な回答をした。

「今日だけね！」「ラジャー！！ヒマワリさんこっち来て！！」  
会話に加われずにあっけに取られているヒマワリはレイラに拉致された。女同士、任せておこう。

俺は、シャワーを浴びて、スエットに着替えた。  
まさか、スエットで行く訳にはいかないが・・・、ひとまず、俺はベットに転がった。

何だか、昨日、今日とめまぐるしく周囲が回っていて、夢でも見ているような感じで現実感がない。

頭の中が整理できずにぐるぐるしている。まあ、結果オーライって処だろうか？

俺は19時5分前に飛び起き、クローゼットを開いて、タートルのシャツとスラックスに着替えた。

チョツと迷って、上着を着ないで部屋を出ると、部屋を出ようとしている兄貴と鉢合わせした。

「レオ、上着を着て来い。ご婦人方に失礼だろう！」「チョツ！」  
俺は仕方なく部屋に戻りクローゼットからブレザーを引っつかんで居間にむかった。

母は柔らかい生地のスラックスに着替えている。婆がこんな衣装を着るのは誰かの誕生日かコンサート、クリスマスぐらいだ。

「おまた〜あ」レイラが現れた。

ピンクのワンピースに赤いボレロ、髪の毛をアップにしているためか、薄い化粧のせいかな大人の女性のような。

我が妹ながら、中々美しい。美人の妹の姿に俺は大満足である。

レイラの後ろに隠れるようにヒマワリが立っている。俺はヒマワリを見て、固まった。

「変でしょ！私に似合わないよね！」ヒマワリが俺に言った。絶句！クリーム色のワンピースが色の白いヒマワリによく似合っている。髪をアップに結っているだけでも大人っぽいのに、口紅をつけているので凄く綺麗だ。

レイラはどちらかと言えば中性的なあるいは外国人にも間違われるような、スツキリした美人だが、ヒマワリは優しいヤマトナデシコという雰囲気である。

「レオ、鼻の下が伸びてるよぉ、お口もあんぐり！」レイラに言われて我に返った。

「レオはヒマワリさんに見とれているわね」お袋にまでからかわれた。

「うん、すごく綺麗だ」俺は本気でヒマワリに言った。

「本当？可笑しくない？」ヒマワリは自信なさそうに俺の顔をみた。俺が頷くと恥ずかしそうに微笑んだ。

「おい、レオ、お前がエスコートしないなら・・・俺が変わろうか？」

「からかわないでよ兄貴まで！車は誰が運転するの？」「俺が転がす」

家の前に車が回してあった。手回しの良い、兄貴らしい。

兄貴が運転席の後ろのドアを開きお袋を乗せている。

俺は紳士らしく後部ドアを開き、レイラとヒマワリを乗せた。そのまま助手席に座る。

兄貴が車を出した。

俺達に向ったのは家族の記念日にディナーで使う、近くのホテルにあるステーキハウスである。

兄貴が予約をしたらしく、直ぐに奥まったテーブルに案内された。

窓から港が見える良い席である。テーブルの上にはキャンドルが置かれている。

ウェイターが母に何か小声で尋ねている。

母は何か小声で話していたが、ヒマワリの方を向き、尋ねた。

「特に好き嫌いがなくて前に伺ったけど、任せていただいて良いですか?」「ハイ」

母の指示なのか、直ぐに飲み物が運ばれてきた。

可愛い、カクテルグラスである。でも、ノンアルコール!何時もの通りだ。

兄貴も運転があるので同じだ。お袋は……?見かけは変わらないのだが……。

「ヒマワリさんとレオの合格を祝って乾杯!」母に言われて俺達は乾杯した。

合格と言われても、なんだか、まだ実感がわかない。

オードブルを食べながら兄貴が「実感が沸かないって感じかな?」ずばりと指摘した。

「面接も受けないで合格なんて……夢でも見てるのかな?」「ヒマワリが言った。

「大丈夫、現実だから、美味しいでしょ?」「……とレイラが言う」と、

「でも、何か竜宮城に来ているみたいで……」とヒマワリ。

「竜宮城?」兄貴に聞かれて、「だって、どれもがとても美味しく……帰るとお婆さんになっていたりして……」

思わず、笑いがこぼれた。

お袋が改まったように言った。

「レオ、ヒマワリさんも、明日は書類を確認して、手続きに必需なもの揃えなさいね。」

「母さん、俺は大学の手続きが終わったら、秋のカナダキャンプに

参加したいのですが・・・」

「3連覇目指して頑張るのね。」「はい」

「判ったわ、スケジュールを提出して、可能な範囲で協力する」

「ありがとうございます」「ただし、レオ、レイラの受験は、兄として協力してね。」「・・・」

「レオは私の邪魔をしない！ってことでしょ！」レイラに言われて俺はむっとした。

「レイラは自分のペースを作りなさい」お袋に言われてレイラは「はい」と言って舌を出した。

「レディがはしたない。百年の恋もさめてしまっ」「兄貴に言われ皆で大笑いとなった。

俺は県大会3連覇に向って始動である。レイラは受験に向けてまっしぐらだ。

今日から、俺達双子はそれぞれの目的に向って別の道を歩き始める。

## 冬：最後のインターハイ（前書き）

大学が決まった俺は本気で試合の準備に入った。

インターハイと冬季国体で上位の成績を残すのが俺の最大の目標である。練習に取り組んだ長野で妹のレイラが合流した。受験を投げ出して、一緒に試合に挑むと言う。お礼状に無茶苦茶な妹に俺は・  
・。

## 冬：最後のインターハイ

冬：最後のインターハイ

俺はカナダに飛んだ。バンフの近くの氷河<sup>ひょうが</sup>で行なわれるレーシングキャンプに入る。

雪が早い地方なので、多少の積雪<sup>せきせつ</sup>もあり、コンディションはまあまあだ。

今年は夏の合宿に参加していないので練習不足<sup>じゅうそく</sup>を実感<sup>じっかん</sup>している。

いつもなら、決してガツガツと滑らないマイペースの俺だが、今回は違う。

俺は時間を無駄<sup>むだ</sup>にしないように朝早くからリフトが止まるまで滑り続けた。

二週間のキャンプでは少し調子が上がった頃に帰国になる。俺の中にイライラ<sup>つの</sup>が募る。

日本は例年に無く雪が遅い。11月末になっても北海道でさえ滑れるゲレンデが少ない。

俺は雪の状況を調べ、開催されるレースにエントリーし、レースに向けて練習した。

11月末から北海道を回り、12月半ばからは長野でキャンプに入った。

長野でクリスマス前に行なわれる最初の大会では、ある程度<sup>ていど</sup>の手ごたえが得られた。

試合の後、掲示板で順位とポイントを確認しているといきなりレイラに声をかけられた。

何で此処<sup>こゝ</sup>にいるんだ。俺はレイラが来た事に驚いた。受験前のこの時期に……。

「どうしたんだ？レイラ、受験勉強は？」「辞めた！スキーがした

い

「何い！」「嘘だぴよ？ん。レオと一緒にでないクリスマスなんて祝えないから！」

レイラは兄貴のナオが高3で試合に出たことを理由に自分も試合に出るのだと言っ。

しかし、兄貴は国立の工学部、レイラは医学部志望だ。

学業では全く比較にならない、俺が何か言っただからって変わるわけではない。

試合に出る以上は勝たねばならない。一週間で調整である。

俺にできるのはレイラに早く勘を取り戻させる事だ。

「よし、レイラ着いて来い」俺はレイラの前をしっかりとラインを切って滑った。

レイラは最初のうちはラインを外していたが、間もなくラインを踏み始めた。

中々、勘が良い。流石は俺の妹だ。ぴつたりと俺の後ろをマークする。

お互いが信じられないとこの至近距離で同じコースは滑れない。

俺だってレイラ以外の人間とはできると思えない。

しかし、俺達は幼い頃からゲームのようにこの滑りを楽しんできた。わざと難しいコースを取り、相手が付いてこれないと先行が勝ち。

先行がバランスを崩して、ラインを取れなくなると先行の負け。

俺達だけに許されるゲームであり練習方法だ。

俺はレイラを従えてリフトが動くのを待ってスタートし、昼食も早々に夕方まで滑る。

夕食後はナイターに出て一緒に滑った。宿に戻ると板の手入れである。

風呂に入って寝るのは23時を回る。流石にクタクタだ。

俺はレイラのスキーも手入れをしてやるうと声をかけたが、アイツ

は自分でやると言い張った。

2、3日した夜中に俺は無性につめたい飲み物が欲しくなった。

俺は部屋を抜け出し、一番近い自動販売機があるホテルのロビーに向った。

ホテルのロビーは一晩中明るい。誰かが居る。

先客かと目を凝らすとレイラである。一人でテーブルに向って何やら読んでいる。

俺はそつと様子をうかがった。奴は問題集を開き、辞書を片手にノートに何か書き込んでいる。

俺は声をかけるか迷ったが、結局、何も言わずに部屋に戻った。

クリスマスも大晦日おおみそかも無く、冬休みが過ぎて行く。

俺とレイラはひたすら、朝から晩まで練習に明け暮れた。

レイラの試合日程は俺よりも数日早く始まる。

兄貴の迎えでレイラが試合会場となるスキー場に移動する。

いつもなら、見送る俺だが今回は同行した。

レイラのインターハイ予選、俺のインターハイ予選、次にレイラの国体予選と続く。

俺の国体予選は少し後になる。

例年ならばそれぞれに分かれて現地に入りレイラの国体予選で合流する。

今年はレイラのコーチとして俺は同行する心算つもりだった。

コーチを務める予定で来ていた兄貴は手続きを全て受け持ち、現場には俺が付いた。

緊張して向かえたインターハイ予選だが、思いのほかレイラは落ちて着いていた。

練習量が少なかったためか、得意の回転競技スラロームの一本目ではミスが出て、タイムが出なかった。

3位につけたレイラは13番目のスタートとなった。奴は二本目を

確実にキツチリと滑った。

スタートに居た俺は、レイラのタイムが放送されると思わずガッツポーズだ。

圧倒的に早い。次に滑った2位の選手に3秒も差をつけている。

優勝を狙っていた一位の選手は緊張からか途中でコースをそれ、D F（途中棄権）となった。

合計タイムで大差を付けてレイラの優勝が決まった。

翌日の大回転でも、レイラは落ち着いた滑りを見せた。

何時もならば俺のアドバイスなどまともに聞かない奴が俺に意見を求める。

やはり、練習不足が不安なのだろう。一本目にラップを出し、15番スタートである。

一本目でラップを取ると自滅が多いのは昔の俺だが、レイラは違う。二本目のスタートで、レイラが俺の手を握った。

レイラの目が不安そうに俺を見る。「急斜の入り口は責める？巻く？」

「そこは安全にコースを取れ、その代わりにストレートの次は責める！」「判った。」

「よし、行け！迷うな」「判った、大丈夫！」

レイラは緩斜面のスキー操作に定評がある。

急斜面で無理するよりも緩斜面の入り口でロスを最小にした方がタイムが出る筈。

俺の読みは的中である。レイラのタイムは二本目もラップになりそうだった。

俺が下るとゴールエリアの近くで上着も着ないでレイラが待っていた。

「やったなあ、おめでとう」「俺は板も脱がずに握手をしようと手を出した。」

レイラは・・・「レオ」と叫ぶなり俺に抱き付いて泣きじゃくる。ミスをして泣いている選手は居るが、抱きついて泣かれては・・・流石に恥ずかしい。

俺がレイラを受け止めスキーを履いたまま立ち往生していると兄貴のナオが助け舟を出した。

「ほら、板ぐらい外せ！」ナオに止め具を外してもらい、俺はレイラの肩を抱いて場を変えた。

「レイラも上着ぐらい着ろよ！」ナオがレイラに上着を着せ掛ける。

レイラは今年も優勝候補と言われていた。しかし、奴が練習をしていない事は誰も知らない。

例年の圧倒的な強さを誇るレイラも今年は不安だったのだろう。

「おめでとう」振り返るとお袋である。

「何時来たの？」「今朝着いた。レイラはナオに任せてレオは支度しなさい。」

「えっ？」「自分の試合に備えないと・・・」「ウン、ありがとう」レイラに俺が付いてきたことを知ったお袋が、俺を試合会場に入れる為に迎えに来たらしい。

俺はレイラの涙が乾くのを待つて、スキー場を後にした。

俺のインターハイ予選があるスキー場までは2時間程度の山道だ。

お袋は試合が行なわれるゲレンデに直行し、俺を下ろした。

「コンディションを見て来たら？」「ウン、ありがとう」

宿に寄っていたら練習時間が取れないことを計算してのはからいだ。俺は最終リフトまでを滑り、宿に戻った。お袋は宿の駐車場に車を回していた。

「これで帰るの？」「明日の試合を見ようと思うけど・・・」「了解。コーチ」

俺の返事にお袋はあれっという顔をした。俺だって不安な時もあるさ、選手だから・・・。

その夜、板の手入れをしているとお袋が現れた。  
「雪温は測ったの？」といいながら天気図を手渡す。久しぶりに見るお袋の手書きだ。

この図だと、今夜は雪になる、下手すると明日も振るかも知れない。  
「明日も雪かな？」「そうね、風もありそうだから、このバーンだと吹き上げるね」

「判った、ゴージャルの予備を準備する。試合ワックスも朝一で済ませる」

「その方が良さそうね。スタートではチューンは無理そうだから・・・、他に何かある？」

「いや、ありがとう。」「じゃあね！」「うん、おやすみ」

短い会話だった。でも、充分だった。俺は自分で可能な準備を済ませ試合に挑んだ。

当日は予想通りの悪天候だったが試合は開催された。

レイラは回転が初日、大回転が二日目だった。

俺は逆の日程である。今日は大回転だ。

レイラが兄貴と一緒に現れ、サポートを申し出た。昨夜、お袋と合流したらしい。

通常の場合は選手と引率の教師は合宿になる。選手同志の交流を深める目的らしい。

試合のサポートは俺の希望で、お袋がスタートに兄貴が中間点で待機する。

レイラは荷物の移動だ。

コースの下見で感じたが、急斜面の入り口の直下が何となくシックリしない。

前走者が通過した後で兄貴から無線連絡が入った。

雪がゆるいらしい。俺は急斜面の入り口を責めずに入り、不安な旗門の直近を通過するようにコースを取った。

一本目のタイムは勿論ラップだった。案の定、急斜面を攻めた数人がコースを外した。

二本目でも同じあたりの旗門付近が、きな臭い。

ラップの俺は第一シードの最後に滑る。15番スタートだ。2年生のエース高橋は一本目でタイムロスを出して3位につけている。

高橋はN高生だが、俺と試合で同行することが多く、俺の弟分だ。奴も俺を先輩と立ててくれるので、俺も奴を後輩として扱う。

奴がスタートして直ぐ、役員が14番のスタートを止めた。

コースを外したのか、旗門をなぎ倒したのか……。試合中のことも有るが、思いのほか時間がかかる。

「役員、選手に上着を着せても良いですか？」無線を聞いていたお袋が役員に要望した。

「結構です」お袋は自分のコートを脱ぎ、俺に羽織らせた。14番の選手にも彼の学校のコーチが同様に上着を羽織らせる。

スタートで待たされるのは結構、辛《面》い。上着を脱いでいるので寒い事もある。

何時、ゴーサインが出るか判らず、緊張が保てない。

「コース整備を5分間行ない試合を再開します」とアナウンスがあった。

14番の選手が上着を脱ぎ、スタート位置にたった。

「レオ、急斜面の下」コーチ（お袋）が声をかける。

「了解」やはりあそこが荒れている。

大雪が降ると、ピステが甘くなる。コースを外すと、ぶかぶか雪だ。コース内でも柔らかい部分がところどころに残り、溝ができる。

スタートした俺は自分で言うのもおかしいが実に冷静にコースを見ていた。

急斜面の入り口では早めにポイントを取り、嫌な旗門は前回と同様に側近を通過した。

案の定、いくつもの溝が深く彫れている。

何時もなら、第1シードで彫れる深さではない。

ゴールを切った俺は停止しながら振り返り、自分のタイムを確認した。

完全ラップだ。合計タイムで5秒の差が付いている。

俺は電光掲示板に高橋の名前が無い事を確認した。

やはり、コースを外したのだろうか……。

俺は荷物をレイラにあずけると練習バーンに移動した。

レイラと違って俺は小回りが好きでない。

スピード系といわれる種目ほど強いといわれている。

明日に備えて小回りを練習する。

レイラの練習に付き合ったので基本練習を重視してきた。

地区大会までなら基本練習をベースにした方が成績が出る。

俺はリフトが止まるまで、滑り込んだ。

何時もは試合前に滑らない俺が遅くまで滑り込んでいるので周囲が不安になっている。

翌日もあいにくの天気であるが、天気が悪い事が不利とは限らない。視界が悪ければ、滑りにくいのは誰も同じだ。

俺は3番スタートで一本目にラップを取った。

当然、二本目は15番スタートになる。

二本目のスタートで無線からの連絡を確認したコーチから声が掛かった。

「ストレートの後、雪がゆるいから飛ばされ無いように押さえて入って！」

「ラジャー」

コースが思ったよりも荒れている。

余計な溝が掘られて滑りにくい。

俺は落ち着いてキツチリと重心移動を心がけた。

このような荒れたバーンでは焦ると落とし穴にはまる。

ストレートの先で返りが悪く、遅れたが、何とか取り戻した。

カンカンカンとリズムミカルな音を立てて、最後のストレートもすり抜けた。

ゴール！俺の目に電光掲示板の文字が映った。

やった、優勝だ！

「レオ、ナイスラン！」板を脱ぐ間もなくレイラに飛びつかれた。

何でお前が泣くんだ！レイラが人目も気にせず、泣きじゃくる。

「おいおい！今日の試合は俺の試合だ！」

「一緒に行けるね。インターハイ！」レイラが泣きながら言った。

俺はレイラが試合に出てきた意味にやっと気付いた。

レイラは国体予選も通過し出場を決めた。

インターハイに出場する成績者上位者は関東大会への出場権も得られる。

俺は長野のレーシングキャンプに戻り練習を続けた。

次の国体予選に備えてである。俺の国体予選はセンター入試と重なる。

レイラの入試は間近に迫っていた。

奴は「関東大会の3日前に合流する」と言い残して、お袋と家に帰った。

センター試験受験のための準備は間に合うのだろうか？

兄貴は「本人の問題さ、気になって勉強が手に付かないなら、思い切って滑るさ！」

他人事のように話す、本人は経験者だ。

国立を受験し、更にインターハイと冬季国体に行ったのだ。

「俺は、レイラの勉強を支援するから、お前はインターハイの支援

をしてやれ」

兄貴に言われて、俺は頷いた。

国体予選にも高橋は現れなかった。

県大会でコースを外し、転倒したときに右肩を脱臼し、左足の靭帯を痛めたと言う。

シーズン最初の大会で怪我をしたら、シーズンを棒に振る。期待していた後輩だけに俺も残念だ。

高橋の居ない国体予選で、俺は圧勝だった。

俺は国体代表になったものの何となく虚しさが残った。

俺は次の焦点を関東大会に合わせ、調整に入った。

関東大会が終わるとそのまま、インターハイである。

約束どおりに関東大会の3日前に合流したレイラは俺の準備したメニユーで滑る。

俺はレイラの前を滑りコースを刻む。

俺達の会話はリフトの上で交わされる。

レイラはセンター試験の結果を「ソレナリ」と表現した。

「びみよ？、じゃ無いのか？」と尋ねると「レオとは違います！」  
と言り返す。

お袋にはセンター試験の成績でS大にするかK大にするかを決める  
と言ってるらしい。

志望校を決めたのか否か？俺からは尋ねにくい。

関東大会で俺はシャイアントスラローム

スラローム  
回転は3位だった。高校の記録としては一応、自慢できる成績だ。

去年、結構良い成績だったレイラは何とか3位と6位に入賞した。

この少ない練習量でよく、入賞してきたと感心するが、本人は不満らしい。

「だって、レオの成績の方がいいじゃない。男子は女子の倍以上エントリーしているのに！」

とレイラは言うが、『俺は練習しているんだ！お前が休んで勉強している間も！』

休んで勉強と言うのもへんな言い回しだが、俺はレイラへの反論を飲み込んだ。

俺達はインターハイへと乗り込んだ。

レイラは相変わらず、移動の車の中で参考書を離さない。

インターハイの宿は違うが、移動もコーチも兄貴が受け持つ。

試合当日はお袋もコーチとして入ってくる。

移動の車の中で兄貴が俺達に告げた。

「インターハイのコーチはレイラを俺がレオを母さんが担当する」  
レイラも依存はない。

俺がレイラのコーチを務めるのは試合時間の関係で無理がある。

「練習は俺と一緒に滑るから・・・」  
「当たり前だ、俺は支援だ。選手じゃない」

レイラの硬い表情が和らいだ。

現地に入ると俺は時間の限り、練習バーンでレイラと行動を共にした。

間を取らずに近距離で後ろをつけて滑る俺達の練習は何人かの指導者から危険と指摘された。

「この二人の普通の練習法です」  
兄がコーチとして説明した。

この時期になってやっとレイラ先行で滑る練習も可能となった。

奴の勘がすっかり戻ったと俺は知った。

初日の大回転で、何の奇跡か俺は一本目を15位に滑り込んだ。

コースが難しかったためにDF（途中棄権）が多かった事が原因だろう。

つまり、二本目はトップのスタートである。  
トップスタートは緊張緊張すると言う選手も多いが、俺は一番スタートが苦にならない。  
整地されたコースを最初に下るのは最高に気分が良い。

難コースである事は下見でわかっている。

俺は肩の力を抜いて、コーチに言われた『コースを楽しむ滑り』をした。

コーチの指示はコースセッターの思いを読めと言うことなのだろう。俺のテクニクではがむしゃらに突っ込んで完走できるコースではない。

二箇所ほど、ヤバイと思う処ところがあったが、何とかリカバリしてゴールを切った。

俺の次はゴールまで現れない。その次は現れたが爆弾ばくだんタイムだ。3名がゴールを切ったのに不思議と俺の名前が一番上にある。

何だか不思議な気分では俺は電光掲示板を眺めていた。

流石さすがに北海道のエースは俺に1秒の差をつけてゴールした。

長野にも負けた。俺はゴールから離れた。

俺は荷物を取りにスタートに向った。

リフトの上から、コースを下る雪国の強豪きょうこう達の滑りを眺めた。困難なコースに苦戦している。しかし、腰の強い良い滑りだ。

スタート地点に戻るとコーチが俺の荷物をまとめていた。

「取りに来てくれたの？」  
「コーチに運ばせる訳にはいかんでしょう！」

「中々、良い滑りをしていたみたいね。中間地点から連絡が入ったわ！」

兄貴が急斜面に居たのだろう。無線の連絡が入ったらしい。

俺がザックを背負い、板を担ぐと、お袋が俺のストックを受け取った。

「待つて！」滑り始めようとする俺をお袋が止めた。  
無線で何か話している。電波が悪いのか雑音も酷い。

「六ね。ゼクス？」「・・・」「了解」

「貴方のタイムは現在、6位ですつて！」「なに？い！！現在つて・・・」

「今、28番が滑っているから・・・表彰かもね！？」「うそ？？」

「力みの無い、柔らかい、良い滑りをしていたから・・・」

俺はお袋の言うことが信用できずに居た。

下に行くとレイラが「嘘だピョ？ン」と飛び出してきそつだ。

俺は板を担いでゴールまで指定されたサポート用のルートを下つた。  
ゴール近くの掲示板で現在の順位を確認する心算だつた。

ゴールに着くと掲示板まで行く必用がなく、俺は順位を知つた。

何故ならば、電光掲示板の最下段に俺のゼッケンが残っていたから  
だ。

難コースを攻めた結果なのか、50番までのゼッケン選手で二本完  
走した人が少ない。

翌日のレイラの試合も難しいコース設定になっていた。

レイラはコーチ（兄貴）に言われたとおり、確実に板を踏んでコー  
スを下つた。

練習量の少ないレイラに責めさせず、ミスの無いキツチリした滑り  
を指示したのだろう。

それでもレイラの気性だから急斜面の後半からは攻め込んで来る。

二本の合計で25位と全国大会規模では信じられない上出来の試合  
結果だつた。

回転競技ではリバース（15位以内）には入れなかつたものの、2  
0位以内で一本目を決めた。

二本の合計は12位とポイント圏内に滑り込んだ。

レイラも回<sup>スラローム</sup>転競技で18位とまずまずの成績である。

俺は表彰式があるので残ったがレイラは試合が終わると早々に引き上げた。

俺はレイラの道具を預かり、手入れを引き受けたいと告げた。

レイラはチョツと考えてから俺に「宜しく願います」と道具を委ねた。

俺はインターハイの終了後、長野のキャンプに戻ってトレーニングを続けた。

国体でも成績を残したかった。

俺は今回の試合で勝つために熱くなっていた自分に決別<sup>けつべつ</sup>した。

自分の最高の滑りを目指す事がタイムにつながる事に気付いた。

判ったのが高3であることは残念だが、何か悟<sup>さと</sup>りを開いた気分だ。

コーチの言い続けた「自分で納得できる滑り」「いい滑り」の意味がやっと掴<sup>つか</sup>めた。

国体に向けて、俺は自分を仕上げ、レイラの道具も調整した。

冬季国体では少年の部は最後に日程が組まれている。

多くの選手は開会式に出て、自分の試合が終わると引き上げる。

社会人である成人男子の試合日程が先に組み込まれる理由である。

国体は県単位で選手団を派遣<sup>はけん</sup>するので成人に混ざって高校生も一緒に行動する。

俺は15歳から参加して、大人の先輩<sup>せんぱい</sup>達に色々なことを教わった。凄<sup>すご</sup>くよい経験をさせてもらったと感謝<sup>かんしゃ</sup>している。

今年は2年生のエースが出場できなかったので高校生は3年1名、一年3名だ。

俺は初めて、下の連中の面倒<sup>めんどう</sup>を見ると言う立場に立たされた。

高一ははつきり言って餓鬼<sup>がき</sup>である。一言で指示が伝わらない。

準備も自分でできない。忘れ物はする。間違いは多い・・・俺はなんだか懐かしかった。  
最年少で加わる事の多かった俺には新鮮な経験だ。

レイラは開会式には出ずに試合の前夕日に宿舎に入った。

国体の選手団の中では勉強もできない。

ギリギリまで家で勉強して試合が終わると直ぐに帰宅することが了解されたらしい。

受験生と言ったことが考慮されたのだろう。

通常のレースは2本滑って合計タイムで争うが、国体は一本勝負である。

インターハイの場合は前年の成績で出場人数が変わるが国体は変更が無い。

成績が良いと出走順位が早くなるくらいである。

国体会場に現れたレイラは一回り小さくなったようだ。

痩せて、顔色も悪い。

それでも、あの意地っ張りは32位と言う順位をたたき出して帰った。

俺はそれに負けるわけに行かない。

俺のゼッケン番号は42番、割とよいスタートだった。

お陰で何とか20位に滑り込むことができた。

一年生に対しても、一応、手本を示す事ができたと思う。

俺は国体の終了でスキー部を引退する心算だった。

試合には出ても、高校の部活としては行動する心算はなかった。

キャンプで世話になったスキースクールからも手伝いの要請が来ていた。

スキーとも大人の付き合いを始めなくては・・・俺は漠然と考えて

いた。

卒業：俺達のゴール（前書き）

レイラに連れ戻され、卒業式に出ることになった俺。

ヒマワリは謝恩会に出ないと言い出し、やっと説得して出席した謝恩会ではクラスメイトをはめられ……。

俺とヒマワリは余興を披露する羽目に……絶対絶命、ピンチに立たされた。どうする俺、どうするヒマワリ。

## 卒業：俺達のゴール

妹のレイラは何とK大の医学部に合格した。

第二志望にS大の医学部を上げていたらしいが、第一希望校に合格とは……。

恐れ入ったと言うのが俺の実感である。

奴が合格して俺が落ち込むと言うのはおかしな相関関係だが、現実だ。

双子なのだから共通する遺伝子は多いかと思うのだが……頭の出来に大きな差がある。

レイラは合格発表があると直ぐに、俺のバイトしているスキー場に現れた。

本人は国体から帰って直ぐに受験した、前期日程で合格するとは想定してなかったらしい。

「前走というか、予行演習のつもりで受験したのに……」だと、勝手にしろ！

俺だって、早々簡単に合格するとは思っていなかった。

レイラの命令で俺は3月1日の卒業式に出席すべく家に戻る事になった。

俺としては中学時代も試合で欠席したので、卒業式が何時なのかも知らなかった。

レイラに引かれて（売られていく子牛のように）、家路についた。

大学生活が夢、理想で、現実感のない計画性がないレイラに俺はイライラした。

俺自身は大学生になるといわれても、あまり実感が無い。

小学校から中学、そして高校と進学した時と大学進学も同じ感覚なのである。

校舎も同じ敷地とくれば、変化も感じられない。違いと言えば制服

が無くなることぐらいだ。

レイラは何で遠方の大学を受けたのだろう。

兄の俺としては妹が家を離れて遠方で一人暮らしする事は賛成できない。

大学なら東京にも沢山あるではないか！医学部は金がかかるから国立を受ける。

確かに奴の主張は正しい。しかし、医学部のある国大は関東地区にも複数ある。

家に戻った日に、お袋から「明日の卒業式に主席するから」と言われた。

「だって、レイラの卒業式が・・・」

「レイラは午前中、貴方は午後から、両方出られるわ！」と嬉しそうだ。

「あゝそう！」「山崎さんから頼まれているし・・・」

「山崎って、ヒマワリが何か・・・？」「いいえ、ヒマワリちゃんのパパからね！」

高山氏の事件で山崎の親父と連絡を取って以来、お袋と山崎パパの間で会話があるらしい。

親同士のホットラインはいただけない。しかし、山崎パパは仕事で国内外を飛びまわっている。

山崎パパとすれば娘が心配で様子を知りたいのだろう。

宣言どおりにお袋は兄貴と共にレイラの卒業式に出席し、その後、

俺の卒業式にも現れた。

俺達の卒業式は礼拝堂で賛美歌で始まる。祈祷や聖書朗読など、他の高校とは少し違うらしい。

レイラの学校もミッションスクールなので殆ど同じ、俺達はこれを普通の式典だと思っていた。

式が終わると教室に戻って書類（誰の目にも触れない成績票）を受け取り、帰宅となる。

正門から出た所で俺はスキー部の後輩達に囲まれた。休みを返上して来てくれたらしい。

自分の練習と試合に明け暮れて過ごした中学、高校の6年間だった。先輩から習う事も無かったが、後輩に教える事も無く、面倒は全く見なかった。

それなのに後輩達が花束を持って祝いに来てくれるなんて……。俺の心の中で暖かいものが広がった。同時に面倒を見なかったことが悔やまれた。

後輩達と少し、話をしてから俺は駐車場へと向った。

校門の少し先でヒマワリが花束を胸に抱き、男と話している。誰だ！その後ろにお袋を発見して俺はホッとした。兄貴と俺の合流を待っているのだと気付いた。

俺達は兄貴の運転で、一緒に家に戻った。

レイラの謝恩会も、俺の謝恩会も夕方から行なわれる。

卒業式の後で一旦、帰宅して出直す事になる。何故か場所が同じ港の見えるホテルである。

もともと、奴は格調高き本館で、俺達はリーズナブルな別館である。ホテルの都合か開始時間まで同じだ。

家にはレイラが先に戻っていた。

「ヒマワリさん！待っていたのよ。一応、準備したけど、合わせてみてくれる！」

いきなりレイラに声をかけられてヒマワリが戸惑っている。

「準備って・・・？」「謝恩会の衣装よ！」「えっ、私は謝恩会には出ません」「えっ?!」

レイラとヒマワリの会話を聞いていたお袋が口を挟んだ。

「ヒマワリさん、お父様から聞いていないの？」

私、お父様に頼まれて貴女の支度を手伝う事になっているのだけど・・・」

お袋はヒマワリの父親から電話があったことを説明した。

お父さんは帰国後、謝恩会で着るドレスを貴女と一緒に選ぶ心算だったんですって。

仕事が遅れて、間に合わないので変わりに衣装を見立てて欲しいと頼まれたのよ。

でも、お父さんからのプレゼントは一緒に選んだほうが嬉しいですよ！

そしてね、この前、レイラには小さくなったワンピースを着てもらった事を思い出したのよ。

娘が発表会で一度しか着ていない、小さくなったドレスが何枚があるからってお話したの。

良かったら今回はそれを着てもらえないか？ってお父様をお願いしたのよ。

お父様はヒマワリさんが良ければ、宜しくって言われたのよ・・・。貴女にもお話されたかと思ってる・・・。

「父がそんなことを言ったのですか？」

「ごめんなさい、新しいドレスが欲しいわよね。勝手なことをお勧めして・・・」

「いいえ・・・、違うんです。私、謝恩会なんて・・・」

「どうしたの？」「私、そんな贅沢はできないんです。」

ヒマワリはチョツと考えて、俺達家族を見回すと一気に喋った。

卒業式までに帰国できない様子では、父親の仕事はあまり順調ではなさそうだ。

父に余計な負担をさせたくないから、謝恩会は欠席したいと考えたらしい。

それに対して母は冷静に説得した。

謝恩会の費用は学費の一部として支払い済みである事。

レイラの学校行事（演奏会や音楽発表会）で作ったけど、小さくて着られないドレスのこと

今回はそれを使って欲しいとお父さんにお話し、了解していただいた事も……。

「ヒマワリさん。貴女はとても優しいのね。でもね、お父様の気持ちを考えてあげて欲しいの。」

貴女の晴れの場をきつと見たかったと思うわ。娘の晴れ姿は父親にとって嬉しいと思う。

お父様は貴女の希望を叶えるのが嬉しいの、それで良ければって言うてらしたわ。

貴女が嫌でなかったらレイラのドレスを着て謝恩会に出てくれないかしら……。」

下を向いてお袋の話を聞いていたヒマワリの肩が震えている。

「お願い。貴女が欠席したらお父様だけでなく、レオもがっかりするわ。」

俺は大きく頷いた。しかし、ヒマワリはチラリとも俺を見ない。

「おばさま、私、恥ずかしいです。本当は着でいく物が無いから欠席しようと思ったの。」

父にドレスを買って欲しいなんて言えなくて……父がおば様に見立てを頼んだなんて……

別に制服で出席したって良いのに、私に勇気がなくて……。」

しゃくりあげたヒマワリをお袋が抱きしめた。

「貴女は優しい。本当に心の優しいお嬢さんだわ。」

貴女が制服で出席したいならそれでも良いのよ。

でも、お父様は美しく成長した貴女の晴れ姿を楽しみにされていた

様子よ」

俺は思わず、話に割り込んだ。

「ヒマワリ、遠慮えんりょしないでいいぞ！」

レイラには小さく着られない洋服なんだから、好きなのを貰もらえば！  
レイラのお古いやが嫌いやなら制服せいふくで行こう。俺も付き合あうから！」

「私の思い出のある物を着ていただけると嬉しいのよ。姉妹みたいに……」

レイラも口を添える。

「すみません。皆さんに優やさしくしていただいて……ご迷惑めいわくをかけた……」

「迷惑なんてとんでもないわ！貴女は大切なレオとレイラのお友達よ。」

そして、私も貴女が大好きなの。娘が増えたみたいで！着て貰もらえる？  
本当に失礼かも知れないけど、勿体もったいないもの。

レイラには小さくなったスーツやドレスを貰もらって欲しいわ！」

ヒマワリが母の顔を見て頷うないた。

母はヒマワリの涙を指でぬぐうと、もう一度抱きしめ、背中をポンポンとたたいた。

「顔を洗ってらっしゃい。美人びじんがだいなしよ」

「ヒマワリさん、此方こなたへ、シャワーを浴あびた方が早いわ！」レイラが声をかけた。

ヒマワリはレイラに呼ばれて二階に上がった。

「レオ、チョツと来て！」

スエットに着替かえてベットに転がっていた俺はレイラに呼ばれて起き上がった。

レイラの部屋のベットには何枚かのドレスが広げられている。

このブルーかピンクか迷まっているの……。

レイラはヒマワリにドレスをあてて鏡かがみに映うつした。

ブルーは大人っぽく見える。ピンクはかわいらしいデザインだ。

一目見て俺はピンクを指差した。

「そうか、大人の女よりも可愛い女が好みなのね！」とレイラに言われ、むっとした。

「用が済んだら俺は戻るぞ、忙しいんだ。」「えっ！ベットでごろごろするのが忙しいの？」

「俺の勝手だろ！」「やっぱ、ごろごろしてたんだ！」「このやるう！」

「ヒマワリさん、良かったね。レオもピンクが良いって！好みがピツタリね」

ヒマワリは恥ずかしそうに微笑んだ。

「もう良いよ！あっちに行つて・・・」「呼んでおいてなんだ。我が俵またなんだから・・・」

「幾いくら妹だつて、兄の前では着替きがえませんか！」レイラがアカンベーをした。

全く可愛かあいげのない奴だ。

シャワーを浴びて、着替えようとした俺はやばい事に気が付いた。

スーツが小さい。慌あわてて、兄貴の部屋に飛び込むと・・・兄貴のベツトには・・・。

ドレスではなく、スーツが広げてあった。

「ソロソロ、現れるかと待っていた。お前なら着れるだろう。俺には小さいが・・・。」

兄貴はそう言つて笑つた。「ドレスは？」「ピンク」合言葉に答える。

兄貴は黒いストライプのスーツの上に白い襟のついた黒いシャツとピンクのスカーフを乗せた。

着てみるように言われて、シャツを着ると、兄貴が俺の首にチェーソンの首輪くびわを付けた。

これに引き綱づなを付けられたら・・・俺はレイラに引かれる姿を連想れんそう

し、ゾクつとした。

首輪のリングに首に巻いたスカーフの端を通す。

上着を着ると襟元にスカーフがフワリと出て、中々、カッコイイ派手な着こなしである。

「兄貴はこれを謝恩会で着たの?」「NO」「入学式?」「いや、演奏会だよ。大学の・・・」

そっぴいえば兄貴は大学でもクラシックをやっていた・・・なるほど・・・。

「一応、コートも出しておいたが・・・靴は?」「ヤバイ!」

「お前の方が足が小さいが、紐靴なら5mmぐらいは許容だろう、ほれ!」

兄はクローゼットから靴箱を引っ張り出した。

「何から何まで・・・」「本当に全く、世話が焼けるぜ!」

俺は兄貴の部屋からスエットズボンに上半身はスーツという姿で衣装を持って引き上げた。

俺が支度を済ませてリビングに下りると母がスーツ姿になっていた。

「母さんも出かけるの?これから仕事なの?」

「友人が来日しているから、ホテルでお食事よ。ナオも紹介したい

の・・・」

「何処のホテル?」「港の見えるホテルよ。行き先がまちまちだと面倒くさいじゃない。」

「・・・」「ところで、貴方は財布を持っている?」「どうして?」

「二次会は無いの?」

「ナオは私と一緒にだから、ホテルで合流するなら良いけど!」

「うん、二次会に出たとしても、ヒマワリと一緒にだから遅くはならないよ」

「わかったわ。合流できなかったら電話ちょうだい。一応、タクシ―代は預けるから・・・」

「サンキュー」「今日は食事が出来ないから、明日、中華料理を予約したわよ！」

「えっ?」「今日は3月1日よ!」「そ〜か!俺たちの誕生日だ!」  
(心の声)

兄貴が現れ、俺の姿を上から下まで眺めて言った。「馬子にも衣装だな」失礼な奴だ。

「あれっ、レオの着ているスーツ!」お袋はやつと気付いたらしい。「俺がやった」「えっ、貸してくれたんじゃないの?」

「もう、小さくて着られ無いからやる!他に2着あるから持って行けよ!」「ラッキー!」

「新しいのが欲しいって言わないの?」・・・とお袋に聞かれた。

「何で?兄貴の貰ったし、スーツなんてあまり着ないから要らないよ!靴だけ買ってよ」

「判ったわ」

「レディの登場だ!」兄貴に言われて振り返るとレイラとヒマワリが立っていた。

レイラはシルバークレイのロングドレスにラメのシヨール、同系のバッグ。

大人の女性みたいだ。

ヒマワリはフリルが優しい、淡いピンクのドレスに白いファーのケープ。

赤いエナメルのバッグ。素敵だ、めっちゃ可愛い。

「美人の姉妹だね。昔はよく間違えられたが・・・」兄貴がからかった。

小さい頃に俺とレイラを女の双子と間違える人が多かったからだ。

「でも、私が妹かも・・・」レイラが言うと、「多分、私が妹です。」とヒマワリ。

「私、3月生まれよ!」「あら、私もです。」「俺達は1日生まれ」「じゃあ、今日がお誕生日ですね。おめでと〜ございます。私は3日です」

「えっ!桃の節句なの!」俺は今までヒマワリの誕生日を知らなかった。

年下か・・・思わず顔が緩ほろんだ。同級生は年上ばかり・・・初めての年下の女だ。

「そろそろ、出かけますか?」兄が先に部屋へやを出て行った。車を回すのだろう。

玄関をでて兄の停とめた車に着くと、後部ドアを開けて二人の妹を乗せ、助手席じゆうせきに座った。

ホテルに着いてロビーの片隅かたすみで兄貴が写真を撮ってくれた。

俺は兄貴からそのままカメラを借りて謝恩会に持ち込んだ。

俺はヒマワリに別々に行こうとは言わなかった。ヒマワリも一緒に歩く事を拒き否ひしなかった。

俺は普通にヒマワリと歩き、クロークで荷物を預けると、謝恩会会場に入った。

謝恩会の会場では、俺がヒマワリと一緒に現れたことで案の定、注目が集まった。

それよりも普段は目だたない、ドレスアップしたヒマワリ的美しさが目を引いたのだろう。

「小柳!山崎と付き合ってるの?」ダチに聞かれて、俺は躊躇ちゆうじゆ無く「ああ」と答えた。

ヒマワリが頬ほほを染めた。「山崎、美人だな」「おう、すげ〜可愛いだろ!」

俺はからかう友人に切り返した。

ヒマワリは女子の中に居ても口数が少ない。

普段は目立たない彼女があまり華麗かれいに変身したので、チョツと話題になっっている様だ。

俺の目にはクラスで一番の美人だと思っただが……。  
学年主任からは「いや、よく来た。最後まで、ハラハラさせられたよ」と声をかけられた。

俺って、そんなに危あぶなっかしかつたのだろうか？

担任は俺が出席した事に感激かんげきしていた。「試合は大丈夫か？この時期に学校に来ていて！」

俺だって卒業式が無ければ山を下る事はない。試合を転々とするのがこの時期だ。

会は順調に運び、会食をしながら、校長の祝辞や来賓の挨拶が行なわれた。

進行係りが花束と記念品の贈呈を行なうとアナウンスした。

「一組、山田さん、村上君、二組……四組、山崎さん、小柳君、五組……準備して下さい」

なに！聞いていないぞ！……チキシヨウ、はめられた！クラスメイトの悪戯である。

既に決まっていた担当者から俺達に変更したのだろう。

俺はヒマワリと指名を受けた他のクラスのメンバーと共に裏に回った。

幹事が各クラスで準備した記念品と花束を用意していた。

「記念品と花束を渡してから、各クラスで準備した余興をお願いします。」

俺は焦った。ヒマワリは泣きそうな顔をしている。一組はクラスで歌を歌うらしい。

二組は詩の朗読、三組は……。どうする俺達……絶対絶命だ。係りからは「歌を歌うなら、ピアノを使いますか？」と聞かれた。俺は施設で聞いたヒマワリの歌声を思い出した。

「ヒマワリ、アベマリアを歌えるか？」「えっ？」「グノーの！」

「どこで？」

「そうだ、此処で歌うんだ。俺が伴奏する。」「えっ、伴奏？」

「俺の唯一演奏できる、バッハのインベイションだ。アベマリアの伴奏だ」

「歌えるかなあ」不安そうなヒマワリ。俺だって中3でピアノを辞めてから弾いていない。

そんな不安を捻じ込んで、何時もの試合と同様に腹を決め、にっこり笑った。

「俺が間違えたらゴメンな」「・・・判った。歌う」

ヒマワリの表情が硬い。「気にするなヒマワリ、からかわれたんだ。

」「・・・」

「俺とお前が一緒に来たから・・・奴らは焼きもちを焼いている。

俺では不足か？」

「いいえ、そうではないけど・・・」

「なら、胸を張って行こう。ヒマワリは笑顔が一番素敵だ。俺はお

前と組めて良かった」

ヒマワリは頷いた。

幹事から校長と学年主任に花束と記念品が渡された。

一組の男女代表が記念品を担任に渡し、ステージに上がる。

山田さんがピアノの伴奏を村上君がタクトをふる。一組の歌声が響く。

二組が去り、三組が控え室を出る。ヒマワリを見ると、緊張で震えている。

「ヒマワリ、大丈夫だ。俺と一緒にだ。」「ヒマワリは俺の目を見て頷いた。

「4組準備して！」世話役が声をかける。

俺はヒマワリに「行こう」と声をかけた。「はい」「ヒマワリの声はしっかりしている。」

会場入り口の扉が開き、全員目が俺達に向けられる。

俺はヒマワリを見た。ヒマワリは笑って頷いた。

俺達はヒマワリを気遣いながら並んで担任の前まで進んだ。

「先生、お世話になりました」と俺が記念品を、ヒマワリが花束を渡した。

俺とヒマワリは並んで深くお辞儀をした。次に俺はヒマワリに手を差し伸べた。

(お姫様此方へ……といった大げさな身振りだった)

ヒマワリは動じることなく俺の右手に自分の右手を乗せた。

俺はヒマワリをステージに誘導した。会場がザワザワしている。

「何をやる気だ？」小声でダチが声をかけた。俺はウィンクで答えた。見ておれ！

グランドピアノの横にヒマワリをエスコートした。

ヒマワリは右手をピアノにかけて立った。中々、堂々とした動きだ。俺はピアノに向かい、椅子の高さを調整した。誰かの楽譜が置きっぱなしだ。

不思議と落ち着いている自分に驚いている。俺はヒマワリの顔を見た。彼女が笑って頷いた。

俺は鍵盤の上に手を乗せた。深く息を吸い込み、ヒマワリの目を見て、鍵盤に指を落とした。

俺の伴奏が続いてヒマワリの澄んだソプラノが響いた。

彼女の声は静まり返った会場に、優しく響いた。

最後の音の余韻が消えるまで、俺はヒマワリとピッタリ息を合わせた。

一瞬の空白があり、会場から拍手が沸きあがった。

俺はヒマワリの手を取り、ステージ中央に導くと二人で深くお辞儀をした。

俺は二人で成し遂げた共同作業に満足していた。陥れた友人へのわだかまりも無かった。

担任が涙を浮かべて感動してくれた。(どうも、彼は涙もろい)  
「随分、練習したんでしょう?」「いえ、初めて合わせました。」「  
山崎君にこんな一面があるとは……」「私も知りませんでした。  
」  
何故か、話がかみ合わないが喜んでもらえて、良かった。

その後も先生やクラスメイトと話が弾んだ。  
旧友のタカが俺に近づいて尋ねた。

「オイ、余興の練習してたのか?」「いんや、卒業式に出る予定も  
無かった」

「じゃあ、即興か?」「ああ、俺達、はめられたらしい」「……  
しかし、見事だった」

「うん、ありがとう」「山崎、美人だな!」「性格もよいぞ!」「  
言ってる!」

タカの目は笑っていた。奴とは大学でも一緒になる。小学校から1  
2年間の付き合いだ。

終了間際に司会者が4組実行委員から一言お話したいと告げた。

「実行委員の武田です。私達から懺悔です。」「武田瞳と宮下弘子が  
マイクを持った。

「今日はチョツと悪戯をしました。小柳君と山崎さんが余りに素敵  
なペアだったので……」

「申し合わせて、二人をからかおうとしたのです。」「

「申し合わせて、4組のイベントを二人に押し付けました。」「  
二人を困らせて、どうするか見たかったです。」「

「お二人の演奏を聴いていて、私はとても恥ずかしくなりました」  
「穴があつたら入りたいです。とても素敵でした。」「

「お二人にお詫びします。ごめんなさい。」「許してください」  
二人が俺に頭を下げた、次にヒマワリのほうを向き、もう一度、深

く頭をたれた。

マイクが俺に向けられた。俺は焦った。ピンチ！何か言わないとヒマワリが困るだろう。

「俺も、最初ははめられたと思いましたが、山崎君の歌声が聞けてラッキーでした。」

俺は山に居たから知らないけど、4組の出し物は皆で練習してたのではないのでしょうか？

勝手に演目をかえてしまい、此方こそ申し訳なかつたです。」

「練習と言っても楽譜がくばられただけだよ」「タカが割り込んだ。」

「最後に皆で歌わない？」ヒマワリが言った。

「えっ、良いの？怒ってないの？」と驚いたように宮下が尋ねた。

「最初はびっくりしたけど、素敵な思い出になりました」「ヒマワリの返事に拍手が沸いた。」

「皆で歌おうぜ、『世界に一つだけの花』。宮下、伴奏して！」

宮下がピアノの前に座った。前奏が流れる。皆も良く知るメロディだ。

歌詞カードを頼りに歌う奴もいる。この曲を知ってる奴の多いだろう。

いつの間にか全員が歌っていた。皆の声が会場に響いた。

校長から「こんな感動的な謝恩会は初めてだ」と言葉を貰い、無事閉会した。

俺達は何組かに分かれて二次会に繰り出した。

二次会と言っても高校生だから、飲みには行く事はない。

カラオケかボーリングかケーキでおしゃべりである。

俺達はカラオケの誘いを振り切り、校長やスキー部の顧問と女子の多いケーキ組に加わった。

皆で思い出を話し合ったり、将来の夢を語ったり・・・。

まだ、大学の決まっていな奴は流石に謝恩会だけで引き上げた。

ケーキ組みの殆どは推薦入試で短大や女子大に進学する奴とそのまま内部進学する連中だ。

スキー部の顧問に聞かれた。「小柳はこの6年間に何度、表彰された？」

「判らないなあ、数えていないよ先生、中学時代は冬の朝礼では良く呼ばれたけど・・・」

「表彰状を渡されて、呼び出したら当人が居なかった事が何度あったかなあ」と校長。

「3回です。先生」ヒマワリが答えた。「おつ、よく覚えているなあ！」

「しかし、小柳君は何時から山崎さんに目をつけていたんだ？」と校長。

「目をつけるは酷いなあ先生。」「山崎は大人しい美人だからなあ、何時、アタックした？」

「何時って・・・、彼女は俺の女神だったから・・・。」「おいおい、お安くないなあ」と

ヒマワリが真っ赤な顔して俯いている。ヤバイ、調子に乗りすぎた！「俺が無事に卒業できたのは山崎君のノートのお陰と、彼女に感謝しております」

俺は立ち上がり、ヒマワリの方を向くとぺこりとおどけて頭を下げた。

「何だ、あ、ノートが縁か！貸してくれたのは彼女だけか？お前はろくな友達がいないなあ」

「だって、試験前に久しぶりに学校に行くと先生達に呼び出されて教室に戻ると皆は帰った後ですよ。全く・・・」

「おお、そうか！それは気が付かなかった」「素敵な女性だ。大切に付き合えよ！」「はい！」

俺は大きな声で返事をした。校長が俺の目を見た。ジョークでは無いと判ってか優しく笑った。

席を替わったり、話相手を変えて、俺達は楽しいひと時を過ごしていた。

携帯が胸で震えた。「失礼」と話していたタカに声をかけてメールを見ると兄貴からだ。

『ソロソロ、帰宅する。合流するの？』俺は『今行く！』と返信して、タカに言った。

「ソロソロ、失礼するわ」「そうか！」

「先生、俺、そろそろ失礼します」「私も・・・」とヒマワリも続いた。

「小柳、ちゃんと送れよ」「ハイ、お任せ下さい。紳士のたしなみですから」

俺達は挨拶をして店を後にした。

兄貴に拾われて合流した俺たちにレイラが「どう、楽しかった？」と尋ねる。

「ええ」と答えたヒマワリ。俺はホツとした。

「レイラは？」「ちっとも面白くない、ドレス自慢か、彼氏の自慢ばかり・・・！」

内部進学をしなかったからって・・・素行が悪かったわけじゃないのよ。

着るものの話ばかりで中身は何もない癖に！

レイラの鼻息が荒い。「何か言われたのか？」

「クラスメイトから『入れてくれる大学があつて良かったわね』って言われたわよ」

「それで何と言い返したんだ？」「国立大学は寛大ですからって言うてやったわ！」

「ふ〜んそれで？」「『あら、体育で入れる国立大学もあるのね』ですって！」

「そりゃ傑作だ。レイラが体育で受かるものか！」「レオ、そうじやなくて・・・」

「レイラ、からかわれてるんだよ。」ナオが口を挟んだ。お袋も笑っている。

「俺達もはめられたよ!」「えっ?俺達ってヒマワリさんも?」

「ああ、クラスを代表して出し物をやる担当にされた」「いきなり?」

「そうだ、寝耳ねみみに水ってやつさ」「それって、酷ひどくない?虐めいじじゃないの・・・」

とレイラが息巻いきまく。母も心配そうな顔でヒマワリを振り返った。

ヒマワリが微笑んでいるのを見て安心した様子だ・・・。

俺はヒマワリと俺の演奏の件を報告ほうこくすることになった。

## 再会・兄貴の決断（前書き）

兄貴が突然の宣言。アメリカに留学すると言う。

お袋は来日した友人を兄貴に紹介するが、そいつは有名な大学教授。

お袋にハグしたMITの教授！ いったい、どんな関係なんだ！

俺達も兄貴も目が点になった、再会瞬間・・・

## 再会・兄貴の決断

昨日、3月1日は俺達の誕生日だ。

俺達は18歳の誕生日に高校を卒業した。

レイラは女子校での12年間の努めを満了した。

価値観が違ふ、女の園での生活から開放され、レイラは生き生きしている。

卒業式が終わった途端にヒマワリも大人の顔を見せるようになった。俺は女達の変化に戸惑っている。

昨夜も遅くまで、ヒマワリや兄貴のナオと4人で話し込んだ。

俺は久々にピアノの音で目を覚ました。時計を見るとまだ9時だ。

兄貴か、レイラか、どちらが弾いているのだろうか・・・？

ピアノの置かれた居間では、レイラとヒマワリがピアノを囲んでいる。

「なんだ、レイラか？」「何だ、はないでしょ！」「何やってるんだ？」

「ヒマワリさんと昨日のレオの演奏について話していたのよ」

俺は分が悪くなったので退散しようとしたのだが・・・運悪く兄貴に捕まった。

「レオ、調度いい。珈琲を入れたぞ。一緒にどうだ！」

「うん、まあ良いけど・・・」「俺も、お前の演奏が聴きたくてな

あ！」「止めてくれよ！」

「だって、ヒマワリさんたら、私の伴奏じゃ歌ってくれないんだから・・・」

ヒマワリを見ると赤くなって俯いている。「皆さん、お上手なんですね。私、驚きました。」

「上手なのはレイラと兄貴でしょ！俺は駄目！」「えっ、お兄様もピアノを弾くのですか？」

「ええ、たしなむ程度ですが・・・」「またあ、ナオが一番、上手いでしょうが!!」

「凄い、聞かせてください。」「そうだなあ・・・」兄貴がもったいぶって珈琲を手にした。

「熱いうちにどうぞ!」ヒマワリに珈琲を勧めている。

「ヒマワリさんの声を聴きたいから、一曲プレゼントしましょうか?」

「えっ、私なんかとっても・・・」「私も弾くから、聴かせてお願い!」とレイラ。

確かにヒマワリの声は優しく美しい。俺は昨日のヒマワリの歌声を思い出してゾクとした。

兄は「貴女に!」と言ってシヨパンを弾き出した。「花の歌」レイラが口を尖らす。

シヨパンはレイラの十八番だ。ヒマワリがうつとりと聞き入っている。

ナオの気障な言葉はカチンと来たが、まあ、ヒマワリが喜んでいるのなら・・・。

兄貴は調子に乗って『月光』も演奏した。ベートーベンが兄貴が最も好む作曲家だ。

レイラが次に『子犬のワルツ』を演奏した。ヒマワリが子供のよう

に喜んでいる。曲が終わるとレイラが「次はヒマワリさん」と言ってピアノの前を空けた。

「私ですか?・・・私はピアノは弾けません」「お願い、歌って!昨日の曲を!」

ヒマワリが困ったように俺を見た。「俺もヒマワリの歌声が聴きた

い」ヒマワリがコクリと頷いた。兄貴とレイラが手をたたいた。

二人ともピアノの前に座らない。「レイラ、伴奏して」「駄目なのよ」「何で!」

「さつきも頼んだけどレオ以外の伴奏では歌わないって!」「なに  
くー!」

俺は墓穴を掘ったのだろうか・・・ヒマワリは困ったような視線で俺に助けを求めろ。

絶体絶命、昨日は二度と触れないと決めた鍵盤に早速触る事になる  
うとは・・・俺はピアノの前に座った。

ヒマワリのためでなきゃ、ピアノなんて弾くものか!

俺はヒマワリの目を見て、大きく息を吸い、鍵盤に指を落とす。

伴奏が続いてヒマワリの澄んだ声が響く。優しく、切なくアベマリ  
アが流れる。

俺はヒマワリの声を全身で吸収しながらピアノの音を鳴らした。

最後の一音まで大切に、手を抜かずに奏でた。

余韻が消えるとレイラと兄貴が拍手した。気が付くとお袋も加わっ  
ている。

「素敵だわ、ヒマワリさん、とても優しい美しい声だわ。レオは幸  
せね!」とお袋。

「何が?」「ヒマワリさんの歌を聴いて判らないの鈍感ねレオは・・・  
」とレイラ。

「俺やレイラの伴奏ではこの歌声は聞けないね」と兄貴。

「ピアノが上手いかどうかじゃないのよ。レオの伴奏は素敵ね!」  
とお袋。

なんだかよく判らないが、からかわれているのではなさそうだ。

本気でヒマワリの歌声を誉めているらしいが俺には判らん。音楽好  
きが勝手に言っている!

ヒマワリは教会の聖歌隊で小さい頃から歌っているらしい。

専門的に歌を習ったわけではない。それを知って兄貴が驚いている。

「良かったね、レオ、一曲だけ弾ける曲がインベンションで！」口の減らないレイラだ。

「貴方達に相談があるのだけど」お袋が話し始めた。

「昨日、会った友人がね、今日も一緒に食事をしたと言っててるの。

良ければボスも連れてきたいって……、どうかしら？お二人をお招きして良い？」

「昨日のお友達って大学の先生でしょ？」とレイラが尋ねた。ナオが割り込む。

「そうだ、俺が留学を予定しているMIT《マサチューセッツ工科大学》のチーフ研究員だ。

彼は大学教授だから連れてくるボスと言うのは主任教授だろう。学会で来日している」

「そうなの！えっ留学！ナオ、留学するの？」「ああ、その心算だ」「彼らは兄貴と話をしたいんだろう？どうして、俺達家族まで……？」

「アメリカでは普通だろう！家族ぐるみの付き合いは……本当のところは、安易な発想だろ」

「安易って？」「単に、一緒に中華料理が食べたいんだろ、横浜で！」

「そうね！食いしん坊のフィリップならそんな所かしらねえ！」二人で笑っている。

「母さんと彼は仲が良いんだろ！」「ええ、留学した時に一緒にチームで研究したから……」

「いいよ！俺は！」「私も！」「ヒマワリさんは？」

「えっ、私は家族じゃないのだからお邪魔になります」「何で！」

「そんなことはないわ、貴方達3人のバースディパーティーだと言つてあるもの」

「でも、外国の方と……」「嫌なら無理しなくても良いよ」

「嫌なんじゃなくて、私、英語が・・・」「日本語でいいんじゃない！」と兄。

「えっ?」「言葉なんかどうでも・・・」「ヒマワリが不思議ふしぎそうな顔で兄貴を見た。

「必用があれば誰かが通訳するだろうし、彼の日本語も楽しいから・・・」

「なんだ、日本語を話せるのですか?」「君の英語と同程度かな?」「・・・」

ヒマワリがにつこりと笑った。「賛成してくれるの?」「はい、怖こわがるのを止めます。」

「それは素敵すてきだ、ありがとう」

母は予約人数を変更するようにとナオに指示した。

ナオが店に電話をかけに部屋を出るとヒマワリが話し出した。

「私、昨日から変なんです。今までなら絶対に出来と思ってやらなかった事を試してみたり、

とても無理だと思ったことが出来たり・・・最初から出来ない諦めるのは止めます。

怖がる前に試してみようと思って・・・そうしたら、無理だと思っていた事が出来たの・・・」

母がヒマワリを見て満足そうに笑いながら話した。

「大人になるってそういう事かもね。一つずつ勇気を出してトライして世界を広げて・・・」

ヒマワリがにつこりして頷く。

俺も蛹かぶが蝶ちょうになるようにヒマワリが大人に近づいた事を感じていた。

「レオも大人にならなきゃね!」「レイラに言われたくないね」

「二人とも充分に子供に見えるけど・・・」お袋に言われて俺達は笑い出した。

「兄貴が留学するって話だけど、何時頃いつ頃から出ていたの?」「俺がお

袋に尋ねた。

「昔から、留学したいと言っていたけど、具体的な話をされたのは今年の初めよ。」

それで友達を紹介しようと思ったのよ。ナオの師事する教授と知らずに……」

「ふくん、ラッキーだね。兄貴は！大学院は卒業して来年、行くんでしょ？」

「別にアメリカでも修士の単位は取れるんじゃない？」

「そうなんだ……。でも、驚いたでしょ！」

「そうね、フィリップがナオの指導をする事になるとは……」

「フィリップさんとは留学した時の知り合い？」「そう、研究室の仲間よ」

「ふくん！向こうも驚いたろうね。」「ふふふ、多分ね」母は意味ありげな笑い方をした。

『フィリップ氏に昔の母とのいきさつを聞いてみよう』（心の声）

「でも、ナオが居なくなると困るなあ……」「レイラは何が困るんだ。」

「デートの相手が居なくなるじゃない。レオが相手じゃ、一寸ね！」

「俺だつてゴメンだ！」「昨日なんて酷い（ひど）のよ！彼氏の自慢大会（じまんたいかい）だつたのよ？」

発表会、演奏会とそのたびに衣装（いしやう）を準備する馬鹿（ばか）らしい生活とはお別れだわ。ホツとする。」

「ところで、彼氏の居ないお前は どうしたんだ？自慢（じまん）できないだろっ！」

「もち、ナオがエスコートしてくれたわ！昨日、顔を合わせたどの男性よりも素敵（すてき）よ。注目の的（てき）」

「兄貴だつて知らないのか？」「そんなのどうでも良いじゃない。」

「ナオは動きも洗練（せんれん）されているし、格好（かっこう）が良いわよ」「俺は？」「子供（こども）じゃない！」

「お前と同じ年だぞ！」「同じ年じゃ、男は幼稚だわ・・・アツ、ゴメン。」  
レイラがヒマワリに謝った。ヒマワリは微笑んでいるが・・・謝る相手は俺だろ！

「ヒマワリさん、レオはちゃんとエスコートしてくれた？」「ええ、素敵でした」

ヒマワリがはつきりと答えたのでレイラが少し驚いている。

「手を出された時は一寸、驚いたけど・・・手を引かれてピアノまで連れて行ってくれたの！」

王子様が現れたようで、夢の中に居るみたいで、不安が飛んでしまいました

ヒマワリが頬を染めて語る。今度は俺が赤くなる番だ。

「腕を組んで歩いたの？」「馬鹿、手を貸しただけだ。腕ではない。」

お前こそ・・・

「当たり前じゃない！ナオと腕を組んで見せびらかしたわよ！ナオは素敵なもの！」

全く、兄貴もレイラには甘いから、奴の言いなりである。

お袋はいつの間にか出かけたらしい。

レイラとヒマワリはお昼に何か作るのだとキッチンでこそこそ始めた。

ナオと二人になるのは久しぶりだ。俺はさっき飲み込んだ事を口に出した。

「兄貴はレイラに甘いよな。奴の彼氏のフリしてやるなんて・・・」  
「でも、変な男とデートされるよりましだろう？」「そりゃ・・・」

確かに道理！

「それより、レオ、俺が家を出たら、お前に後を任せて大丈夫か？」  
ずしゅんと響く、兄貴の一言だった。

「家を出るって、先の話だろう？」「いや、来月、渡米するつもり

だ。「……」

「まあ、相手次第だが、多分、そうなると思う」「お袋は知っているの？」

「気付いているんじゃないか？あの人は勘が良いから」「何も言わない？反対してない？」

「反対どころか、俺をけしかけている。自分も経験しているからじゃないかなあ」

「……」「お前には済まないと思うが……」「何で？」「お前に負担がかかるだろう？！」

「レイラと母さんを頼むな！」「頼むって言われても……」

俺にはまだ実感が無い。兄貴の居ない生活って……。

「レイラが泣くだろうな、兄貴を大好きだから……」「もう泣かれた」「話したの？何時？」

「彼女が合格して祝いにブレスレットを買ってやった日に、でも、何時渡米するかは言っていない」

「それで奴はスキー場まで俺を迎えに来たわけ？」「そうかも知れない」言葉が途切れた。

俺は兄貴との会話の重さを受け止めきれずにいた。俺は潰されそうな重圧を感じていた。

俺達はヒマワリとレイラの作ったパンケーキにクリームでデコレーションしたものを食べた。

まあ、味に関して何も言わんが、俺は甘い食事は好まないとだけコメントしておこう。

女達は食事と言うが、俺にとってはオヤツである。

朝がスコーンで昼がパンケーキじゃ……今夜の中華が今から楽しみである。

中華街や元町にも久しく行っていないので、早めに出かけてウィンドウショッピングを楽しむ事になった。

兄貴がスーツ姿なのに俺がセーターではまずいかと一応、ブレザー

を着ていくことにした。  
女達は色々と上下の組み合わせや色の配置を変えおしゃべりを楽しんでる。

ヒマワリがレイラの服を着るとレイラが着た時と全く印象が違<sup>い</sup>う。  
見覚えのある洋服が、今までと全く異なる着こなしをされると新鮮<sup>しんせん</sup>に感じるから不思議だ。

レイラはアクセントを使い強いインパクトを与えるか、ヒマワリは同系色で優しくまとめる。

個性か好みかは判らないが、身に付け方で衣服も別の表情を見せる。

レイラはチェックのスカートとピンクのシャツ、黒のブレザーに決めたようだ。

ヒマワリはフリルの可愛いチョコレート色のスカート、白のタートルのアンサンブル。

俺は茶のタートルに黒レザーの上着、ベージュのパンツにした。

・・・と言ってもレイラから情報を仕入れた、兄貴の見立てである。ナオはその辺がマメである。兄<sup>あにいわ</sup>曰く、同伴者を引き立てるのが男の役割とか！

だから、プレイボーイかと思うとあまり浮いた噂<sup>うわさ</sup>は聞かない。

俺は高校時代はスエットとトレーニングウェア、ジーンズがあれば充分だった。

私服<sup>ほくとん</sup>が殆どなかった、がら空きの俺のクローゼットに兄貴の部屋から引越<sup>ひっこ</sup>してきた洋服が並ぶ。

考えてみたら、大学に行くのに私服が必用な事に気付いてなかった。

兄貴の運転で山下に向う。海沿いの公園をぶらつき、元町でお茶を  
して中華街へ・・・。

「これって、デートコースじゃない？」とレイラ、「よく雑誌に載

っているコースだ」と俺。  
なのに何故か女二人と男二人がペアになる。元町で洋服を眺め、レ  
ースなどの小物を見る。  
中国の物産を扱う店では綺麗な小物を見て女性二人ではしゃいでい  
る。

俺とナオは余り近づかずに傍観するしかない。

ナオは土産の準備なのか、スワロスキーとレース小物を買っている。  
俺達が中華料理店に到着すると何時も、滑り込む母が先に着いてい  
た。

店の人が部屋で待つよう勧めるので席に案内してもらった。

丸テーブルの置かれた個室である。

部屋に着くと直ぐに兄貴の携帯が鳴った。

「店の場所を間違えて別館に居るみたいです。迎えにいつてきます。

兄はゲストを迎えに出て行った。別館と言っても数十メートル先で  
ある。

間もなく、ドアが開き「お待たせしました」「フィリップようこそ  
！」（会話は日本語である）

フィリップの巨体の後ろから兄貴ともう一人の男性が姿をみせた。

母の表情が固まった。そして・・・「リチャード・・・本当にリ  
チャードなの？」

初対面の男性は両手を広げた「マリア」?????マリアって誰だ？  
次の瞬間、俺は信じられない光景を見た。母がその男と抱き合った  
のだ。

「リチャード」「マリア」「ウエストサイド物語じゃないぜ！（ウ  
エストサイドの主人公はトニーとマリアである）

子供の前でラブシーンか？此処は日本だ！ハグなどするなよ！

こっちが恥ずかしくなるではないか！レイラもヒマワリも驚いてい

る。

沈着冷静な兄貴さえも驚きで、目が点になっている。  
フィリップが一人、悪戯いたずらっ子のような顔でニヤニヤしている。

「……此処からは英語である。俺の判る範囲で同時通訳する……  
君を脅おとかそうとリチャードを連れてきました。」フィリップが母  
に言った。

「主賓しゅひんは？」と母。フィリップは黙ってリチャードを指す。

「貴方がM.I.Tの主任教授なの……信じられないわ」と母。

「フィリップだつて教授が勤まるんだ」とリチャード。

「おいおい、それはないだろう！……それよりナオ聞いてくれ。

君のママから紹介されるまで、僕は君がマリアの子だと知らなかつ  
たんだ。」

「マリアつて？」「ああ、ゴメン、当時のママの呼び名なんだ」「  
何で？」

「リチャードは日本語が下手でね。『ミヤビ』も『コヤナギ』も発  
音できなくて」フィリップの説明。

「洗礼名でマリアと呼んでいたんだ。でも、僕だけが許されていた」  
とリチャード。

「仲が良かったのですね。皆さん」と兄貴。

「僕とリチャードでマリアの取り合い」とフィリップが言うとりチ  
ャードが咳せき払いした。

「マリアと呼ぶのは私だけだ！」フィリップが大げさに両手を広げ  
た。

クスクスとヒマワリが笑う。

……

「みなさん、席について食事にしましょう。私は空腹です。ミヤ  
ビは私とリチャードの間に！」

フィリップが日本語で言つて、それぞれが席に着いた。

紹興酒しょうじゅうを注文し、3人は再会を祝つて乾杯かんぱいした。

母が家族を紹介した。フィリップの隣に座ったレイラ、そして俺、ヒマワリ。

ヒマワリのことを母は、俺とレイラの友人と説明した。フィリップは日本語が中々上手だが、リチャードはそれ程、上手ではない。

来日経験が何度もあるフィリップと、日本へは初めてのリチャードだ。

リチャードは「マリアの国を訪れる勇気がなかった」と説明した。それでも母の母国を知りたくて日本語を独学で勉強したと付け足した。

「お母さん、もてたんだね。昔は・・・？」と俺が言うと、「『昔は』が余分よ！」と母。

「ナオ、ミヤビは研究チームの男性の憧れだった、僕も彼女が大好きだった」とフィリップ。

「私は真剣にマリアを愛していました。マリアは私を残して日本に帰った。」とリチャード。

母の昔にそのようなロマンが有ったのか・・・。

「あのリチャードがMIEIを代表する教授ねえ・・・」母が感慨深げにいう。

「僕だつてMIEIの代表選手よ！」とフィリップ。

確かに世界のトップと言える研究者達がここに並んでいる。普段見られる光景ではない。

・・・この先は英語と日本語が混在・・・

「フィリップ、貴方は私を母の知人として受け入れたのですか？」と兄貴が尋ねた。

「いいえ、先も言ったが、私は昨日まで貴方がミヤビの息子だと知りませんでした。」

久しぶりにミヤビとデートできると喜んで会いに来たら貴方がいたのです。」

「私も母の友人が貴方だと知って私も驚きました」

「君がミヤビの息子だと最初に言えば良かったのですよ、ナオ」

「フィリップ、君は昨日、僕に内緒でマリアに会ったのか？」とリチャード。

「君も誘ったじゃないか。日本の美しい女性と一緒に会いに行こうと・・・」

「昨日、アクシデントがなければ私はミヤビを我々の滞在するホテルのバーに誘った。」

そして、リチャード。君を呼び出す心算だったよ。ナオが現れて計画が狂った」

食事をしながら、話が進む。

「ナオは優秀な研究者になります。私に預けなさい」リチャードが母に言った（英語）

「貴方が言うなら、間違いはないわね」「勿論」（英語）

リチャードは兄と母と言葉を交わすことが多いが、フィリップは俺達に話しかける。

それも英語と日本語がごちゃ混ぜである。

俺は英語で聞かれると自然に英語で、日本語の時は日本語で返事を返す。

最初は少し緊張している様子だったヒマワリも巧みなフィリップの話術に乗せられている。

何時の間にか頬をそめて、英語で語っている。俺が聞き入っていると彼女も気付いた。

「あっ、嫌だ、私ったら、下手な英語で話している」「何が嫌ですか？」とフィリップ。（日本語）

「私、英語があまり得意でないから・・・」「そんな事有りません。

上手です」(英語)

「本当に?」「貴方の言うこと、私は理解できません。それでOKです。違いますか?」

フィリップの質問にヒマワリが困こまっているようなので俺が助け舟を出した。

「日本では読むことと書く事で学校の成績が決まります。

僕は幼い頃からNZに遠征えんせいに出かけています。

日常会話は出来ませんが、英語の成績せいせきとして評価ひょうかされません。」

「日本は興味きょうみ深い評価ひょうかをするのですね」

「はい、私も日本の英語教育は好きでは有りません」とレイラ。

「英語が話したければアメリカにいらっしやい。皆さんなら何時いつ来ても歓迎かんげいします」

「そうね。それが一番早いかも・・・」レイラが意気投合いきたいくわいしている。

一方では兄貴とリチャート、お袋が難しい議論ぎろんをしているようだ。

「ミヤビもリチャードも消化に悪いよ」とフィリップが日本語で水を差した。

意味が理解できなかつたらしいリチャードにナオが英語で説明する。フィリップがゲームをしようと提案した。

フィリップとリチャードは英語以外で話す。日本人のメンバーは日本語以外で話す。

「スワヒリ語でも良いの?」「俺たずが尋ねると「いいんだよ!話してご覧」とフィリップが笑わせる。

次の料理が運ばれてきた。給仕が日本語で料理を説明する。

フィリップが何かを尋ねた。給仕が驚いたように中国語でまくし立てる。

「フィリップは中国語も話せるの?」とレイラが英語で尋ねる。「少しね」

「説明がわかったの?」「半分だけ・・・」ヒマワリが楽しそうに

笑った。

フィリップは日本語が結構話せるがリチャードはかなり怪しい。独学で覚えた日本語なので会話の経験がない。母の英語の方がずっとましだ。

下手な日本語で話すのがじれったくなつたのだから。

リチャードが突然とつぜんへらへらと話し出した。「おかしい、単語か拾えない」

何語なんだ？母も同じ言語で返事を返した。

「ドイツ語だ、この速さでは聞き取れない」とナオが英語で言った。

「そうなのよ。二人は僕が居てもドイツ語で二人だけの会話を交わすの。昔から！」

フィリップが補足ほそくして大笑いだ。

「ぎぶあつぷ！」とフィリップが宣言してゲームは終わった。

フィリップが俺に「二人だけで会話を楽しまれたら面白くないよね！」と言って笑った。

普段は口にする事のないフカひれ、ツバメの巣、あわび、車えびなど豪華な料理が次々と出てくる。

俺が少々、もてあまし気味なのだから、量もバツチリだ。

レイラやヒマワリがもてあますと、俺と兄貴が加勢する。フィリップも喜んで手伝う。

フィリップは食べる事に熱心だが、リチャードは母に夢中だ。

兄貴と話したり母と話したり・・・といつても兄貴は付け足し。

いささか満腹になったところにチャーハンが出てきた。

「私、ぎぶあつぷ」「私も・・・」

俺も満腹だが・・・一口味わうと、このチャーハンが超美味い。

結局、母との話に熱中するリチャードにも分け与え、残りはフィリップと兄貴と俺で平らげた。

ぎぶあつぷと言っていたレイラもデザートは別腹らしい。ペろりと

戴く。

リチャードは母と別れがたく、ホテルで一緒に飲もうと誘っている。兄貴はフィリップと専門用語を交えて早口の英語で打ち合わせている。

母がぱちんと手を打った。「OK。うちで話しましょう」

「ナオはフィリップと何を打ち合わせるの？」

「主任教授にプレゼンするので、準備を彼が手伝ってくれる。」

「主任教授ねえ・・・」母はリチャードをチラリと横目で見た。

リチャードが早口で母に何か言っている。

どうも、「ナオの研究が価値あるものか否か、自分で聞いてみれば判る」と言ったような！

お袋はM E Tの教授と一緒に研究が議論できるレベルの技術者なのだろうか？

俺は興奮でゾクゾクした。もしかしてお袋や兄貴は凄いエンジニアかも・・・。

「じゃあ、私達は少し山下公園を歩いてタクシーで帰るから」

「了解、先に帰ってお風呂沸かす？」「お布団もお願い！」

「判った。」車に移動しようとする・・・フィリップが付いてくる。

「私はお邪魔虫ね！」とフィリップ。

リチャードがフィリップを誘った。フィリップが「僕は若い美人と先に行く」と答えた。

母とリチャードの後ろ姿を見ながら「彼らは25年ぶりの再会なんだ」とつぶやいた。

母達は船で港内観光をしてから戻ったと後で聞いた。

俺達は車内で話が弾んでいた。フィリップの話はとても楽しい。

帰るとフィリップの相手を兄貴に任せて俺は風呂をレイラは寝具を

準備した。

兄がフィリップに2階のシャワールームを使うか日本式の風呂が良  
いかを尋ねた。

日本の風呂には興味があるが、シャワーを借りたいと答えた。

フィリップに着せようと兄貴が自分の普段着を探すが、Lサイズの  
服も彼には小さい。

上着は何とかなるが、兄貴のスエットパンツでは小さいかもしれな  
い。

彼は兄貴のサッカー用の短パンを身に付け「これが良い」とくつろ  
いだ。

太目の彼はどうやら暑がりのようだ。

俺達は珈琲を飲みながら若き日の母のロマンをフィリップから聞い  
た。

「素敵すてきですね」「ママにそんなロマンがあつたなんて・・・」「女性  
たちは感激している。

「でも、何故、母は日本に戻つたのですか？」俺が聞くとフィリッ  
プが答えた。

「私は詳しく聞いていません。リチャードは聞いたかも知れませ  
んが私には語りません」

「触ふれては行けない事なのかも・・・」と兄貴。

「聞くべきでは有りません」とフィリップが強く主張した。

母達が帰宅した。

リチャードは意外な事に日本式の風呂に入りたいと言う。

入り方は知らないが興味きょうみがあると言われ、俺が付き合うことにした。  
リチャードに日本式の入浴法を教えながら、母の若いことのことを  
少し聞いた。

彼は真剣にマリアを愛した。そして、マリアも私を愛していたと言  
った。

息子に対してかなり過激な発言だが、はっきり主張するのは文化の違いかも知れない。

風呂を出るとスエットと浴衣が準備されている。

彼は迷わず浴衣を広げ、和式のローブだと喜んだ。

俺はすばやく自分の衣服を身に付けリチャードの着付けを手伝った。

母はリチャードが浴衣で現れたのを見て微笑んだ。緑茶を入れて勧めめる。

彼が日本のしきたりに合わせて日本人を知りたいという気持ちが伝わってくる。

「リチャード、ずるいね!」とフィリップがからかった。

「私は日本式が好きなんだ」「日本には行かないと言い続けたのに・

・・・」

「マリアの国に行くのが辛かったただだ」・・・本当に25年間も掛かったの???

「書齋に行く?リビングで飲む?」母に聞かれてリチャードは首をかしげた。

「マリアの仕事の話を聞けるか?」「勿論」「ならば、書齋へ」「判った」

母はナッツとチーズなどの簡単なつまみを準備して彼を書齋に案内した。

その後の二人の会話は俺は知らない。二人の25年間が埋まったのかどうかも・・・。

しかし、昔の恋人に仕事の話を知りたいと言うのでは甘い言葉は期待できないような気がする。

兄貴はフィリップと自分の部屋に移動した。プレゼンがどうのと会話している。

研究の話でもするのだろう。

翌日、彼らは母の作った味噌汁とアジの干物、ご飯、香の物という純和風の朝食を取った。一つ和式でないのは、食事の後で兄貴の入れた珈琲を満足そうに飲んだ事。布団で眠ったのは初めてというリチャードも日本式の寝具を気に入った様子だ。

「では、後ほど待っているから・・・」と兄貴に言っ二人はホテルに引き上げた。

彼らは今日の午後から講演があり、その後で兄貴の研究報告を聞くのだと言う。

「母さん、疲れているところを悪いけど、僕のプレゼン見てくれる？」兄貴が頼んでいる。

「良いけど、私が聞いても・・・」「じゃあお願い」兄貴はノートPCを持って母の書斎に入っていた。珍しく、兄貴が緊張している。

MITの教授に研究をアピールするのは確かに大事に違いない。午後からスーツを着た兄貴はパソコンを持って彼らの講演に出かけていった。

帰宅後、お袋に・・・。

「嫌になるよ。今日、母さんに『工学である以上は実現の可能性と効果を検討しなくては』

と意見されたでしょ」

「意見じゃなくて、コメントよ」「そのことを話したんだ」・・・

「フィリップはそれはそうだ、ミヤビには参ったね」だって。「リチャードは？」

「彼はマリアの意見は正しい。我々研究者は謙虚に研究に向き合わなくてはならないって」

「そう、リチャードが・・・あの、リチャードがね」と微笑んだ。  
実はフィリップに聞いたのだが、学生時代は研究に夢中になり暴走  
しがちで有った、  
方向性を失うリチャードとチームを母が現実に引き戻す役割をして  
いたとか・・・。  
母の笑いは、昔を思い出したのかも知れない。

選択：我が道を行く（前書き）

兄貴の騒動があり、お袋の思わぬ秘密を知り、彼らの青春時代と見せられた俺は自分の価値観に疑問を持ち始めた。

そんな俺にスカウトが・・・予期せぬ話は嬉しい。有頂天になって騒ぎたい自分とさめた目で見ている自分がある。それに気づいた俺は・・・。

## 選択：我が道を行く

兄貴のナオに留学の話が沸き起こり、そして続けて、俺にも事件が起こった。

アメリカからの乱入者が帰国し、我家に平穩が戻った。

お袋はもう昔の事と割り切っているのか、全く意に介さないと云った感じだ。

もつとも、家族の誰もリチャードのことに触れる勇氣はない。

レイラは勉強からはなれて自由時間を楽しむと宣言した。

兄貴は自分の大学に出かけたり、論文をまとめたり忙しい様子だ。

そんな矢先に北海道工学園大学から俺に連絡が入った。大学のスキー部監督を名乗る人は、

「君を我が大学のスキー部で受け入れたい。是非、会いたい」と言

う。

今更、とは思うが、今期の成績が評価されたと思うとまんざら悪い気はしない。

俺は直ぐにお袋に相談した。

相手が保護者同伴でお話したいと言った事もあるが、それが理由ではない。

大学の入学手続きも済ませ、入学金も納入している。

スポンサーである母が反対すれば即、断らなくてはならない。

そもそも、入学金を払って入学手続きが済んでいるのに別の大学には入れるのだろうか？

俺の話聞いたお袋は、何時ものように「それで？」と尋ねた。

昔の俺ならばそこでマゴマゴするのだが、流石に母とは18年の付

き合いだ。

俺は準備しておいた、自分の考えをはつきり伝えた。

既に大学が決まっており、手続きも済ませたのに今更、進路の変更が可能なのだろうか？

そのような事情も説明した上で、相手の話を聞きたい。それが俺の考えだった。

「判ったわ、日程調整をおねがい。北海道の方だと時間も限られるでしょう。」

明日の朝一で会議があるから、AM以外ならOKよ。」

俺は明日の午後に相手の監督と面会するべく時間を調整した。

指定された、ホテルのラウンジに指定時間の5分前に到着した。

着くと直ぐに特別大きくはないが、ガツシリした雪焼けした男性が近づいてきた。

40歳前後か、若いがエネルギーシユな感じがする。

「小柳君ですね。僕は北海道工学園大学スキー部監督の草薙です。」

「小柳レオです。始めまして、此方が母です。」

「レオの母でございます。」

監督の案内でホテルのティールームに移動し、早速、本題に入った。

監督は北海道工学園大学スキー部の強化のため、選手の獲得目的で会いに来たと説明した。

俺の今期の成績（勿論、スキーのである）を評価して、推薦入学の打診である。

大学での受入条件としては入学金免除、寮費免除の待遇である。

授業料についてもスポーツ奨学金が適用されるので半額以下になると説明した。

「如何でしょうか？進学は既に決まっていたかと思いますが・・・。」

「

といわれたので、俺はそのまま姉妹校の大学に進学することが決ま  
っている」と説明した。

「学費も生活費も援助えんじょが出ます。スキーをやるには環境も整っ  
ています」

「でも、手続きも済んでいるのに入学を取り消せるのでしょうか？  
と俺が聞くと母が答えた。

「院内推薦いんないすいせんで入学を許可されているので同義どうぎ的な問題はあるけど、  
入学辞退は可能でしょう」

「君がスキーを続けるのであれば最高の条件だと思っただが・・・  
確かに条件としては絶好ぜつこうかもしれない。条件、場所とも良い話だ。

「スキー部の条件は判りました。学部、学科の受け入れ態勢たいせいにつ  
いてご説明いただけませんか？」

母に言われて、俺も肝心な話が抜けていることに気がついた。

「大学で受入可能な学部は文学部英文学科と農林水産学部のつりんすいさんかくぶです。

しかし、農林水産学部は実習が多く練習えいぎに影響えいぎょうが出るのでお勧めし  
ません。」

「英文科か・・・」俺が呟つぶやくと、監督が説明を追加した。

「英文科と言ってもスキー部で試合成績が出ていれば、ある程度は  
単位が認定されます。

英語が苦手でも皆、スキーの成績で卒業しているから大丈夫です。」  
俺は何か説明に違和感いわかんを感じた。

「この時期にお誘い戴くとは、予定していた方が辞退したいされたのでし  
ょうか？」

俺は聞きにくいことをズバリと尋ねた。

「ごまかしても仕方ないので正直に申し上げます。

インターハイで準優勝した青森のA君に話をしていたのですが・・・  
実は彼はもう一年、高校に残る事にしたようです」

つまり、留年と言うことだろうか？どうやらA君は一般高校らしい。  
体育会系の高校であればインターハイ入賞という戦績せんせきで卒業できた

うに気の毒だ。

T学園大学は全国規模ぜんこくきぼの私立大学だ。関東地区、北海道、九州にキャンパスがある。

知名度の低い大学ではないが受入学部が限られるのは問題だ。

必要なことは大体聞いたつもりだ。母に目配せめくばせすると彼女が割り込んだ。

「ありがたいお話ですが、急なことで本人も戸惑とまどっていると思います。」

お持ちいただきました資料を読み、よく考えたいと思います。

何時いつまでにお返事をすれば宜しいでしょうか？」

「私も小柳君に断られたら次の候補者こうほしやに話をせねばなりません。

急がせて申し訳ないが、明日中に方向だけでも知らせていただけませんか？」

「明日中ですか？」俺が復唱ふくちやうした。

「お聞きする事は他に無いわね。」母が俺に確認した。

俺は頷うなずき、草薙氏に礼を言った。

「はい、ありがとうございます。」「良い返事をお待ちしています。」

「はい、よく考えてお返事いたします。」

帰りの車の中で渡された大学の資料を開いた。

スキー部寮の案内や練習場、試合成績などの資料が出てきた。

学費や寮費、選手のランク別のスポーツ奨学金の額面などの資料がある。

どうやら、俺はAクラス待遇たいぐうらしい。お袋は黙だまって運転している。

「おかしいなあ」「何が?」「大学の資料が殆ほとんどないんだ。学部とか学科の・・・」

「そう」「帰ったら電話して聞いてみるわ」「・・・」

家に着くと、珍しく明るいうちに帰宅した兄貴とレイラがリビングに居た。

俺の顔を見た途端に話を止めたところを見ると俺の噂うわさだろうか……？

「珈琲コーヒーいれようか？」レイラに聞かれた。

「えっ、レイラが珈琲を入れてくれるの？明日は土砂降りどしゃぶりだぜ！」

「もう知らない、レオの分は無し！」「ひで〜えなあ」

「ヒマワリは？」「自分の家に帰ったよ！」

「えっ、山崎パパが帰国するまでこっちに居て良いて許可されたんだろ。なぜ帰ったの？」

「胸に手を当てて、自分のしたことを良く考えてみたら！」「えっ俺何か悪い事した？」

「しらばつくて！許せない？」「ヒマワリ、何か言っていた」「

ええ」「何て？」

「教えてあげない」「そんな事言うなよ！」「酷ひどい人」「ヒマワリ怒っていた？」

「もう、会いたくないって！」「嘘うそだろ〜！」「俺が何した？？？」

兄貴とお袋の今にも笑いそうな顔を見て、俺はレイラにからかわれた事に気がついた。

「レイラ！！！」兄貴とお袋が同時に吹き出した。

レイラに飛び掛ろうとした俺を兄が手を出して遮おさえった。

「レオは何かやましい事があつたのか？」と兄。

「違うよ、思いつかないから悩んだんじゃないか！」

「そう、それならば良いけど……」とお袋。

「ひで〜なあ！皆でからかって！」「だって、レオは単純だから！」

「レイラ！」

「二人とも、いい加減かげんにしなさい。幾いくつになつたの？」「じゅーはち！」俺とレイラがハモる。

「レオ、どうだったの聞かせて」とレイラが切出した。

「T学園大学で俺に是非、入学して欲しいんだと・・・」  
「凄い、スカウト？」

「でも、時期が遅すぎるな、何か理由を聞いたか？」  
流石に兄貴の読みは鋭い。

「どうも、欠員募集らしい。卒業しそこなつた奴がいて欠員が出たんだろ」と俺。

兄貴やレイラに一時間前に草薙氏から聞いた内容を説明した。

「学部が問題だなあ」「うん」「レオは英文学をやりたいの？」

「英語は嫌ではないけど英文学は・・・それに、スキーの成績で卒業できるって言うし」

「じゃあ、スキーをやりて大学に行くんだ？」「そういう事になるのかなあ・・・」

「その後はどうする？」「それが問題だと思うんだ。あつ俺、電話しなくちゃ」

俺は母の書斎の電話を使って草薙さんに連絡した。

部屋に戻った俺はお袋に鬱憤をぶつけた。

「母さん、話にならないよ」「何が？」

「資料は不足してたんじゃないんだ、最初から準備していなかっただって」「何で？」

「逆に何故、そんな資料が欲しいのかって聞かれた、欲しければ後で送るって」

「大学の案内が、そんな資料ねえ」「酷いでしょ、学部や学科の説明もなく選べる？」

「・・・」「ふざけているよ、大学入学ではなくスキー部の勧誘じゃないか！」

「レオ、スポーツでのスカウトとはそんなものだろ、」

大学の名前と入学の条件、後は練習活動の環境で決めるのだと思う

が・・・」

「だって、大学は勉強しに行くところだ・・・」「レオは勉強しに行くのか？」

「建前をいつてるんだ。最高学府だぜ大学は！」「ほお、難しい事を言っ」

「からかわないでよ、俺は真面目に話しているのに・・・」「俺も真面目だ！」

「学部も選ばないで大学に行くなんて・・・」「レオは何しに大学に行くんだ？」

「だから、自分のやりたい事を見つけにだよ」「学部は関係ないだろ」

「そ〜いわれると・・・」「まして、やりたい事がスキーならそれが出来りゃいいだろ！」

「・・・」「ナオ、いい加減にしなさい。レオが決める事ですよ。価値観はそれぞれ違うのよ」

「だから、いうんだよ。母さん。大学に行く目的がスキーでないなら拘束されるだけだ」

「それを考えるのはレオよ。そして決めるのも・・・。貴方の価値観を押し付けちゃ駄目」

「母さんは良いと言う訳？スキーをするために大学に行っても・・・」

「良いとか悪いとか私が判断する心算はないの。人生は一度だから、今はこの瞬間しかないから」

自分で一番良いと思う道を選べば良いの。成功しても失敗しても、納得できるでしょ」

「自分で選べばと言うけど、18歳で選ぶのは難しいよ。現実には・・・」

「そうね。でも自分で選ばないと、後悔するのではないかしら・・・？」

今は難しい選択かも知れないけど・・・これも経験でしょ？」

「俺はレオにもっと広く色々な世界を見て欲しいんだ。スキーだけでなくて・・・」

「ナオの気持ちは判るけど、レオにとってスキーは大きなウェイトを持っているから・・・」

スキーをやっているから色々な世界を見られない訳ではないのよ」「俺は兄と母の話を聞いていた。他人事のように聞いていた。

二人は俺のことで真剣に意見をぶつけ合っているのに、他人事のように感じる。何故だろう。

「母さんの言うことは分かる。でも、レオにはおれのように後悔させたくない」

「貴方はスキーをやって来て後悔しているの？」

「そうじゃないけど、もっと、青春を楽しんでも良かったような・・・」

何となく雲行きが怪しくなってきたように思った。俺は口を挟んだ。「俺って十分に青春を楽しんでいるけど・・・学校の勉強がなければ最高かも！」

言うてから『しまった!』と思ったが、もう遅い。

「レオ、勉強をせずに大学を出たいなら、好きにしろ!スキーでも卒業はできるんだろ!」

兄貴にすごい形相で睨まれた。俺は思わず、首をすくめた。

兄貴が部屋を出て行った、気まずい雰囲気が残る。

「レオ、ナオは真剣に話していたと思うな。」「お前に言われなくても分かってる」

「じゃあ、本気で勉強せずに卒業したいの?」「そうは思っていない」

「なんだ、レオだって勉強しに大学に行くんじゃない」「俺はナオやレイラのようにできない」

「レオは何ができないと思うの?」「俺とレイラの会話にお袋が口を挟んだ。」

「ナオもレイラも優等生だつてこと。俺は何がしたいのかも分からない」  
「スキーがしたいんじゃないの？」  
「スキーもしたいけど他のこともやりたい」

「ならば、やってみたい事をやってみればよいと思うけど・・・」  
「・・・」それが問題なんだ。やってみたいことが何なのだから・・・？

俺は部屋に戻った。一人でベッドに転がり天井を眺めているうちに眠ってしまった。  
気がつくと22時である。ヤバいと思つてリビングに降りると誰も居ない。

キッチンには俺の食事が取り置いてある。

俺は電子レンジで温め、腹ごしらえをした。  
食べることが好きな俺だが、妙に味気なく何を食べているのか砂を噛むようだ・・・。

無意識に食べ物に口を運んだ。お腹が膨れると少しは頭も回る。  
でも、自分では考えきれない。俺は兄貴にまず、謝ることにした。  
このままでは精神的にゆつくりできない。

兄貴の部屋をノックすると「どうぞ」という間延びした返事が返った。

部屋に入ると兄貴は机に向かつていた体を俺に向けて180度回転した。

「なんだ？レオか」「今、良いかな？」「ああ」「さっきはゴメン」  
「あんなことぐらいで飯にも顔を出さないなんて、あまりに肝っ玉が小さいな！」

「いや、実はベッドで考え事をしていて、眠っちゃって・・・」  
「それは、あまりに大らか過ぎるかな？」  
兄貴に言われて一瞬考えた。

次に一緒に笑った。

「北海道に行きたいのか?」「そうでもない」「どういう意味だ?」「あまりにスキー本位で大学の説明書もくれない監督にちよつとガツカリかな?」

「ほお、お前のことだから勉強しないで卒業できます。スキーで成績がもらえます。」

その言葉に飛びつくのかと思ったけど……

「それが、釈然しゃくぜんとしないから、もやもやしているんだ。」

「なんだかんだと家の事を気にしているなら、それは構かまわないぞ! 母さんだつて若い」

「えっ?」

「さつき、母さんと話したんだ。お前もレイラも好きなところで好きな道を探せばいいって」

「何?それ」「だつて、俺が長男なんだから……」「長男つて?」

「俺が家に残れば良いんだから!」「兄貴は留学するんだろ?」

「そうだな、でも、母さんが一人で心配なら、時期をずらせようか? 母さんは良いというが」

「えっ」「俺は兄貴に言われるまでそんなことは全く考えていなかった。」

お袋がこの家に一人になる。

「どうした?」「今、気がついた。」「……。お前らしいなあ!」

「俺つて、どうして、周りが見えないんだろう……だめだなあ」

「そういうことでもあるまい。レイラだつて何も考えていない」

「お袋、一人残していくわけには行かないよなあ」「どうして?」

「どうしてって……」

「別に良いんじゃない。一人になったら羽が伸ばせるって言ってたぜ!」

「そのほうが、怖こわくない?」「その通り、あの人にこれ以上、羽を伸ばされたら大変だ。」

今でも、自由奔放じゆうほうぱんぱつ、奇想天外きそうてんがい、何を考えているか、何をするか判ら

ない人なのに……。

一人暮らしになったら、何をしでかすか？家に戻らないことも増えそうだ。

何時何処に居るのかもつかめなくなるだろう。

きつと、兄貴も同じことを考えていたのだろうか……二人で笑い出してしまった。

「俺、お袋に謝あやまってくるわ！寝過ぬごして食事に下りてこなかった事」  
「ああ、そのほうが良いな。あまり気にしていないかも知れないけど……」

俺は直ぐにお袋の書齋に向った。

ノックして入ると、「一寸待ってね！」と声だけかけて、キーボードを機関銃たのように叩く。

「後、一分！」そして、宣言どおりに手が止まった。振り返ったお袋の第一声は……。

「レオ、何？どうかした？」「謝あやまりに来た」「何を？」

「寝過ぬごして、食事に下りていかなかった。ゴメン」「何だ、そんな事でわざわざ……」

「仕事の邪魔じゃまかなあ？」「いいえ、別に……どうして？」

「何が話したいのか良く分からないけど……話して行って良いかな？」

「どうぞ、人と話をする、自分の考えがまとまるし、自分に見えないことが判るわよ」

「うん」俺はポツリポツリと話しはじめた。

スキーだけの為に大学に行くのは釈然しやくぜんとしない事。

大学への入学を勧めに来て、部活のことしか説明しない監督への不満。

「お母さんはレイラも俺も家を出て、兄貴が渡米したらどうするの？」

「どうもしないよ。何故？」「だって一人になるんだよ！」「気楽で良いじゃん！」

「気楽っていったって、寂しくない？」「別に！自由でいいじゃない」「……」

「それを気にして、決めかねているの？」「そうではないな」「なら良いけど……」

「半年前なら、飛びついていたらと思う。」「北海道に飛んでいった？」「うん」「今は？」

「あまり、魅力を感じない。何故だろう？」「大人になったんじゃない？」「そうかなあ？」

「スキー以外のものが見えるようになったのでは……」「うん」「一晩じゃ決められない？」

「いいや、断ろうと思うんだ。何だか、スキーの事しか考えていない監督じゃ不安だ」

「そうなんだ」「駄目かなあ？」「どうして？」「お母さんが意見を言わないから」

「私が決めることではないから、私は子供達が一番良いと思う人生を選べばよいと思う」

「一番って？」「それは自分で決めることでしょう。価値観は人それぞれ違うから……」

「そういう考え方でいうなら、スキーで食べていこうとは思っていない」「そうなの」

「現実問題、日本の冬は3ヶ月から4ヶ月しかないのだからスキーでは生活できないよ」「現実的ね」

「それと、何より、俺はスキーを楽しみたい」「勝つことが楽しいんじゃないの？」

「そうでもなくなってきた。自分の価値観なのかなあ。試合に出る以上は勝ちたいよ」「そうよね」

「でも、それが全てじゃないと思うんだ。やりたい事も出てくると思うし……」「……」  
お袋と話しているうちに段々と自分の気持ちが整理できた。

自分は色々な事をやってみたい、今、一つの事に縛られたくない。可能性を沢山残して、沢山の可能性を試してみたい。

その中で自分でどうしてもやりたい事が出てきそうな気がする。

「母さん、心配かけたけど、僕、やはり断ります。スキーの為に自分の他のチャンスを逃したくない」

「そう、判ったわ。私からお断りしましょうか?」「いいえ、自分でお断りします。」

「では、そうなさい」「ありがとう、仕事の邪魔をしてごめんなさい。」

「そんな事ないわ、色々と考えを聞かせてくれて、嬉しかったわ」「そうなの?」

「ええ、貴方が思っていたよりも大人になっていて、視野も広がっている。素敵だわ」

「そうかなあ……、じゃあ、明日、電話してお断りします。おやすみなさい」「お休み」

俺は自分の部屋に戻った。何だか気持ちがすっきりしていた。

次の朝、俺は9時に電話をかけた。ぴったりの時間にかけるほうが良い気がした。  
監督は俺の選択を聞いて驚いたようだ。条件が気に食わないのかと尋ねられた。

俺は正直に大学ではスキー以外のこともやってみたいと説明した。気持ちが軽くなり、何だか大学生活がとても楽しそうに思えてきた。

俺はルンルン気分でチャーハンを作っていると、レイラとヒマワリ

が現れた。

「あれ、出かけるの?」「うん、下宿の準備に行ってくる」

「下宿って、京都か?」「うん、ママが行けないからヒマワリさんに付き合ってもらおう」

「えっ、京都かぁ・・・いいなぁ、俺も行きたい」「残念でした女子寮は男子禁制です」

「何だ、レイラはまた女の園かぁ?二度とゴメンだと言ってたのに・・・」

「学校は共学が良いけど、下宿は女子寮の方が楽じゃない、パジャマで歩けるもの・・・」

「ふ〜ん、そんなもんかなぁ・・・」「じゃあ、留守番宜しくね」「ちえ!」

女二人は楽しそうに出かけて行った。

俺は一人家で留守番をするのも悔しいので、残る消化試合に出かけることにした。

俺が次に家に帰ったのは10日後であった。

家に入ると直ぐに俺は冷蔵庫を漁りにキッチンに直行した。スキーはおなが空くスポーツなのだ。

キッチンではヒマワリが何かを作っているようだ。

「ただいま、ヒマワリ!」と大きな声で呼びかけた。ガチャーンと音がした。

ヒマワリの手から皿が滑り落ちたのだ。「ゴメン、脅かして・・・」「いえ!どうしよう、壊しちゃった!」

ヒマワリが慌ててしゃがみ込み割れた食器の破片を集める。

俺が、焦るヒマワリに「気をつけて!」と声をかけた瞬間だった。

「あっ!」小さく叫んで、ヒマワリが指を押さえる。破片で指を切ったのだらう。

「見せて！」傷を隠そうとするヒマワリを流しまで連れて行き手を取り、水道水で傷を洗う。

薬指に2センチ近く傷が出来ている。

「我慢して！」俺は声をかけて、彼女の傷を抑え、破片が入っていない事を確かめた。

幸いな事に破片はなさそうだ。

俺は救急箱を持ってくると、綺麗なガーゼを出して、傷に当てた。

「しっかり押さえておいて！」ヒマワリをリビングの椅子に座らせる。

俺は手早く割れた食器をかたづけ、ヒマワリの隣の椅子にかけた。

「見せてご覧」「……………」ヒマワリは黙って俺に手を預けた。血は止まりかけている。

俺は彼女の指を消毒して、新しいガーゼを当て、包帯を巻いた。

「一寸、大げさだけど、暫く、このままにしておいて」「……………」ヒマワリは俯いたまま顔を上げない。ヒマワリのスカートにポツンと涙が落ちた。

「痛いの？」ヒマワリは頭を左右に振った。

「どうしたの？脅かして、怪我させて……………ゴメンね」

「……………」俺は謝ったがヒマワリは顔を上げない。

俺は、ヒマワリのあごに指をかけ、顔を上げさせた。

ヒマワリの不安そうな怯えた子供のような、涙の溢れた目が俺を見た。

「泣かないで……………」俺はヒマワリにキスをした。

ヒマワリは、黙って、俺のキスを受けた。

ヒマワリの唇は涙で濡れていた。

俺が唇を離すとヒマワリは驚いた顔で俺を見た。

次の瞬間、彼女は席を立ち、二階に駆け上がった。いった。

何でキスなんかしちゃったんだろう……………。

俺は柔らかいヒマワリの唇の感覚を思い出していた。  
『初めてのキスは塩味だったなあ』と俺は一人で馬鹿なことを考えていた。

夕食の時、ヒマワリは現れたが、殆ど口を開かなかった。  
俺とは目を合わせようともしない。

昼間、俺に見せたあの涙は何だったのか？

翌日、俺はレイラに叩き起こされた。

「お前なあ、幾ら兄弟だからと、寝ている所を襲うのは卑怯だろうが……」

「レオ、そんな事いえるわけ！酷い人ね！」

寝ぼけているところに藪からぼうに『酷い人』といわれ、俺は面食らった。

俺は『無芸大食人畜無害』を自負している。悪人と言われた事はない。

「レイラ、お前の言っている事が判らない。説明してくれよ」

俺はベットから飛び起きた。

「ヒマワリさんに何したの？」と担当直入に切り込まれ、俺は焦った。

昨日のキスの感触がよみがえる。レイラに何と説明しよう……。

「何した……って、俺は別に、そのう……何も……」

「それが、いけないんでしょう？」

「えっ？……馬鹿なこと言うなよ！俺達はまだ18だぜ！」

「馬鹿！何、勘違いしているの！ヒマワリさんに手を出せなんて言っていないわ！」

「……」「そんなことしたら、たたき出してやる！」「おこわ

！（心の声）

レイラの説明を聞いて、俺はやっと理解できた。

確かに俺はスカウトの話があつた事はレイラやヒマワリに話した。その後で、二人は京都へ行き、俺は試合に出向き、ヒマワリともレイラとも話す機会がなかった。

つまり、俺は二人にスカウトを断つた事を報告していない。

「で、どう決めたわけ？ 私には報告もない訳！！」レイラに凄まじ<sup>ぞこ</sup>たじたじただ。

「すみません。報告が遅くなりまして、丁重<sup>ていちょう</sup>にお断りしました。」おれはレイラに逆らわないように丁重に報告した。

「あら、レオはスキーをやりてに大学に行くんじゃないの？？」  
「？？」

「何でそんな事を言うんだ？」

「スカウトが来たつてルンルン気分だつたくせに……。」

「そりゃ、実力が認められたら嬉しいさ。でも、スキーだけで4年間を過ごしたくない」

「そうなんだ。少しは、勉強する気になつたんだ……。」

「そ〜ゆ〜訳じゃないけど……。」「じゃあ、どんな訳？」

「う〜ん、勉強以外にもやりたい事が幾つもあるような……。」

「例えば？」「いや、まだ判らないが……。」

「ところで、レオ、そのことをヒマワリさんに話したの？」

「いいや！」「何故？」「なぜつて言われても……話す機会がなかったし……。」

「ひどい！」「酷<sup>ひど</sup>いつて……何で！」「鈍感<sup>どんかん</sup>！馬鹿！もう知らない！」

「何だよ！」「ヒマワリさん、レオが北海道に行くのかと思ひ込んで夜、泣いていたよ」

「えっ？！」「彼女はレオにとってお何？」「何と言われても……友達だよ」

「大切な人ではない訳？」「大事に決まつてるだろ！」「なら、なぜ知らせないの！」

「眠れないほど気にしているのよ！彼女は……。」「ゴメン！」

「謝る相手が違つてしょ!」「ヒマワリに伝えてくれよ!」「何を!」「北海道に行かないつて!」「馬鹿!自分で言いなさい!」「だって……」「昨日のヒマワリの涙が思い出された。」「もう知らない!」「レイラは乱暴にドアを閉めて出て行つた。

朝食の時にヒマワリも一緒だったが、彼女は目を合わせようとはしない。

ヒマワリは母の寢室の隣奥にある小部屋を使っている。

昔は母の仕事仲間が終電に乗り遅れてよく泊まっていた部屋だ。

ベッドと机だけが置いてあるサブルームである。

まさか、ヒマワリの使っている部屋に押しかけるわけにも行かない。俺は、ヒマワリと話すチャンスを狙っていた。

階下で音が聞こえる。ヒマワリがリビングに居る様子だ。

俺はそつと足音を立てないように階段をおりた。リビングに居たヒマワリに声をかけた。

「ヒマワリ、話があるんだけど……」「えつ……」「ヒマワリが驚いて振り返つた。

「俺さあ……」「言わないで!」「えつ……と言われても……」「……いいの、聞きたくない!」

いき成りの拒絶である。昨日の事が気に障つたのだろうか……? 「怒っているのか?昨日のこと」「……」「ヒマワリは首を横に振つた。

「じゃあ何故?」「……」「北海道の事だけど……」「だから言わないで!お願い」

ヒマワリは顔を両手で覆つた。指の間から涙がこぼれる。

「どうしたんだ……」「良かったって思ってるのに……涙が止まらない……」

「何が良かったんだ!」「スカウト……されたこと……認められて……よか……つたつて……」

ヒマワリが泣きながら切れ切れに答える。

「待てよ、ヒマワリ」俺は思わずヒマワリを抱きしめた。

「断つたんだ！」ヒマワリが俺を振り放すように後ろに下がった。驚いたように俺の顔を見つめる。

「断つていけなかったのかな？」「なぜ？」「スキーだけで大学生活を終わりたいくないから」

「・・・」「色々な事をやってみたいから・・・」

ヒマワリの目から、大粒の涙がこぼれる。俺は思わず抱き寄せた。

俺の胸でヒマワリは泣いた。暖かく、切なく、レイラとは全く別の感触だ。

ヒマワリは泣きやむと、俺を見てひまわりのように笑った。

「私、てつきり、北海道に行く事が決まったのだと思って・・・だからキスしたのかと・・・」

彼女は『キス』と言う言葉を口にして真っ赤になった。

俺も顔が火照った。顔が赤くなったのをごまかそうと俺は言った。

「特性のココア、作ってやるよ！」「うん」「顔を洗って来いよ」  
「うん」

俺がココアを作っていると、レイラがキッチンを覗いた。

「いい匂い、私もお〜」「はいはい、お姫さま」

勘のいい俺はすっかり、3人分を作っていた。

俺達はココアを飲みながら、ほのぼのとした気分を味わっていた。



## 終章：俺は学生になった（前書き）

俺とヒマワリは入学式を迎えた。ヒマワリの父親は入学式にも参加できなかった。俺もレイラもヒマワリを気遣い兄貴も式に出席して写真を撮す。

夜には中華街で我家恒例のお祝いの食事会が行なわれる。その席で俺はとんでもない事を聞くことになる。俺の明日はどうなるのか・  
。

## 終章：俺は学生になった

何故だか知らないが、私立大学の入学式は早い。4月1日が入学式である。

中高よりも、小学校よりも、幼稚園よりも早い。

大学生になったら休みが長いと聞いていた俺達は最初から肩透かしである。

お陰で俺は県で恒例となっている春のカーニバルともいえる大会にエントリーできなかつた。

入学式は港の見える国際ホールで大々的に行なわれる。

国立大学の入学式は一週間も遅く、妹のレイラは保護者として出席すると張り切っている。

入学式と言われても、俺の場合は附属高校からの進学だから同級生も多い。

午後から入学式が予定されている当日、朝早くレイラに叩き起こされた。

昼に集合なのに煩いなあ……、仕方なく起き出しリビングに行く  
と家族は食卓に向っている。

「なんだよう！まだ、眠いの……」

俺がスエット姿でお腹をボリボリかきながら入っていくと、レイラに怒鳴られた。

「レオ、止めて！レディに失礼でしょ！」

「お前の何処がレディなんだよ！」と言い返してから、ヒマワリに  
気付いた。

俺は焦った。なぜ、ヒマワリが居るんだ。

慌ててスポンをたくし上げ、上着を引つ張った。

ヒマワリが赤くなって俯いている。ヤバイ！俺は顔がカッカと火照

った。

トーストを片手にお袋が言う。

「レオ、悪いのだけど、急な仕事が入って・・・午後までに終わり  
そうもない。ゴメン！」

「えっ？午後って、入学式に出る心算だったの？」「勿論！」

「大学の入学式だよ！」「だって、私学は初めてだもの・・・」

「全く、物好きだなあ」「レオ、大丈夫よ！ナオが行くから！」と  
レイラ。

「来なくて良いのに・・・」

「ヒマワリさんの写真も撮りたいからな！父上に報告しないとね！」

そうか、ヒマワリの親父さんは「入学式には出たい」と言っていた  
けど来れないんだ。

「ヒマワリさん御免なさいね。お父様からもよろしくと言われたの  
に・・・」

「そんな、小母さま、とんでもないです。レイラさんにお洋服を戴  
いて嬉しくて」

「そう、貴女がそう言ってくれると嬉しいわ。ありがとう。お父様  
もお仕事で残念ね！」

「私も、気に入っていたスーツをヒマワリさんが着てくれるの嬉し  
いわ」

「そうか、レイラはまた、太ったのか！」「違います、育ったんで  
すうう！」

スポーツをやっているレイラは見かけよりも、腕や足に筋肉が付い  
て太い。

一見、細く見えるが、スーツのサイズは普通の女性より大きい。

育ち盛り？の妹は新しい洋服が次の年には入らないと嘆いている。

俺はズボンの長さ袖丈が足りなくなるのに・・・レイラは横に育  
つらしい。

「俺は縦に育つけど、レイラは横に育つのか！」  
「違います、胸のボタンがとまらなくなっただんですううだ！」  
「いい加減にしなさい、二人とも！幾つになつたの？」  
「じゅうはち〜い！」俺とレイラがハモル。  
兄の俺の眼から見ても確かにレイラの胸元は育っている。  
既にかすかな膨らみではなく、存在感がありまぶしい。

「食事の予約は19時だから間に合うわ、何時もの中華街の店を予約したからね！」

お袋はコーヒークップを置き、立ち上がった。

「レイラ、ヒマワリさんの支度は大丈夫ね！」「モチ、まかして！メイクもバッチリよ！」

「ヒマワリさん、遠慮なくレイラに何でも言っ頂戴」「ありがとうございませす」

「ナオは写真をおねがいね！」「了解！」

「レオ、早く食べなさいよ！」「はい」  
お袋は慌しく部屋を出ていく。俺は何のために呼ばれたのか・・・。

俺はとりあえずレイラの隣に座った。

ヒマワリが俺の前にスクランブルエッグとベーコンの入った皿を置いた。

「おっ、俺の好きなカリカリベーコンだ！」ヒマワリが頬を染める。

「うん、レオが大好きな、カリカリベーコンね！」

「な〜んだ！レイラが作ったのか！」「私じゃ悪いの！」

俺は口にベーコンを頬張り「いんや〜、美味いよ！凄く！」

「良かったね！ヒマワリさん」「どっちなんだよ〜」

「レオの好物を教えたのは私、作ったのはヒマワリさん！」

ヒマワリは俯いて赤くなっている。ピンクに染まった頬が可愛い。

飯を食い終わると俺は兄貴に呼ばれてナオの部屋に入った。

「何か俺、まずい事した?」「何で?」

「兄貴に呼ばれたから、叱しかられるのかと・・・」「そうか?心当たりでも・・・」

「無いよ」と言いながらも俺は不安になっていた。

「お袋が心配しているじゃないかな?」「何を?」

「ヒマワリちゃんの父上の帰国が遅れるらしい」「ふうん、仕事がうまく行かないのかなあ?」

「その辺は良く分かんが・・・」「ヒマワリのパパの仕事で、何を心配するの?」

「父上の仕事じゃなくて、ヒマワリちゃんを家に置いて良いのかどうか?」

「えっ?何かまずいの・・・?」

「考えてみる!レイラが京都に行き、俺も来月にはアメリカに立つ」「うん!」

「その後、残るのはお袋とお前だけだ。ヒマワリちゃんを預あずかっていて良いのか?」

「何か困るかなあ・・・」「お前、判らないのか?」

「判らないのかって言われても、皆が居なくなつて寂さびしくなるし、ヒマワリが居た方が・・・」

「それが問題だろ!」「えっ?」

「お袋とお前と二人暮らしにヒマワリちゃんが一緒いっしょに暮くらすと!」

「何で?」

「鈍にぶい奴やつだな!お前はヒマワリちゃんが好きなんだろ?」「うん!」

「ウン、って簡単に言うなよ!結婚する気か?」「まさかあ」

「まさかしてしないのか?」「そんな事、まだ、判らないよ、考えたことがない」

「ならば、お前に言うておく。彼女に手を出すな!」「えっ!手を出すなつて・・・?」

俺は兄貴に言われた意味に気付いた。顔がカッカと火照る。きつと

茹蛸ゆでたこのようになってる。

「お前が男なら、好きな女性を傷きずつけるような愛しかたをするな」

「・・・」

「男になれ、判ったな！」俺は兄貴の言わんとすることをやっとなり解した。「判った約束する」

「よし、それを聞いて安心した。俺もヒマワリちゃんは可愛い。妹が増えたみたいだ。

将来、妹になるかもしれないが、彼女を大切にしたい」「ヒマワリは俺にも大切だ」

「兄としてお前に話したかったのはそれだけだ」「判った。ありがとう」

俺は兄貴の部屋を出て自分の部屋に戻った。自分が急に大人になつたよな気がした。

兄貴は俺を大人の男として、見ている。

俺はベッドに寝転ねころんで天上の模様もようを見ながら兄貴の言葉を何度も反芻すうした。

恋愛だとか、結婚だとか、縁の無い言葉だと思っていたのに・・・。大人の責任が急に身近に感じられる。

「支度したくできた？」レイラの声で我に返った。レイラが俺の部屋に現れた。

「何、まだ時間有るじゃん」「えっ、外でランチするって兄貴から聞いたよ！」

「俺、聞いていないぜ！」「じゃあ、レオは昼抜きで行くの？」「嫌いやだー！」

「なら、サツサと着替きがえてよ！」

レイラは俺のクローゼットを開くと勝手にスーツ、Yシャツ、ネクタイと取り出した。

俺は言われるままに出されたスーツを着こんでリビングに下りた。

リビングに入ると皆が俺を振り返った。その瞬間、俺はレイラにはめられたと思った。

ヒマワリは紺に細かいストライプの入ったスーツに白いブラウス、襟元にピンクのスカーフ。

俺は黒に細かい白のストライプのスーツ、Yシャツにピンクのネクタイ。

ピンクのアクセントが揃っている。まあ、大学生のスーツなんて同じような物かも……。

全くレイラの奴……兄貴はダークグレイ、レイラはベイジユのパンツスーツだ。

俺達は駅に向う途中で空車を見つけて乗りこみ、タクシーで港の見える国際ホールに向った。

兄貴は国際ホールの入り口にある有名なホテルにタクシーを付けさせた。

「飯をホテルで食べるの？俺、金ないよ」タクシーを降りた俺は不安になって尋ねた。

「いいや！俺もそんな予算はない！スポンサー付きは晩飯だけだ」

「でも、国際会議場に食事のできる店なんかあるの？」「黙って付いて来いって！」

兄貴は国際会議場の最上階のカフェテリアに俺達を案内した。

数種類のランチセットがあり食券を自販機で購入するシステムだ。

全部のランチが千円、セルフだが、ライスは大盛りサービスだ。

和・洋・中華と全部で5種類のランチから選べる。

単品料理も種類は少ないが、大体が千円くらいだ。

トレイにそれぞれが選んだ料理を載せて、海の見える展望の良いテーブルに付いた。

眺めも良いし、結構静かだ。味も量も、ぐ。流石、兄貴のお勧め

である。

「穴場なんだ。この近くでイベントがあると食べるところが無いから」兄貴が教えてくれた。

食事にはコーヒーも付いていて、お代わりも自由だ。

俺は食べざかり！当然、「大盛り」とか「お代わり自由」は大好きだ。

しっかりと、腹ごしらえをして、コーヒーを嗜み・・・眠気を防いで式典に臨んだ。

国際ホールの1階が満員になるほど多くの新入生が集まった。

男も女も紺のスーツ姿が多く、学生服は殆ど見かけない。

俺はヒマワリと学部学科のプレートに従い指定された場所に並んで腰をかけた。

遠方から来たのか、大きな旅行バックを持った母親と一緒に新入生が居る。

大学の腕章を付けた誘導係りの人が一生懸命に説明している。

「保護者のお席は二階になります」「私はここで良いですから・・・」

「申し訳ありませんが一階は新入生のお席になります」「でも・・・」

「式終了後の待ち合わせでしたら、メインロビーでどうぞ」

親の方が子供を見失うのを心配している様子、18歳の息子は赤面している。

「じゃあ、私、二階に行くけど・・・」「ああ」

息子は愛想無く答えて俺の隣に座った。

母親は何度も振り返りながら、案内されて後ろのドアに向う。息子は振り返りもしない。

「横浜は始めて？」俺は声をかけた。「いや、入試と手続きに来

「だから3回目だ」

「お袋さんは初めてなの?」「ああ」「それじゃ心配だろう」「うん、目が離せない」俺と初めての隣人は一緒に笑った。

大学の入学式もいきなり賛美歌で始まる。

俺は賛美歌を歌いながら、隣で目を白黒させて、口をパクパクさせている隣人を観察していた。

俺達は小学校から慣れているが、外から来た奴はここでカルチャーショックを受ける。

祝辞と賛美歌と祈祷と・・・入学式は無事に終わった。

式典の終了後、明日からの日程説明が行なわれた。

入り口で受け取った資料を見ながら集合場所や時間の説明を聞いた。隣人はキャンパスマップを見ながら校門から集合場所へのルートを辿っている。

「それは西門だよ。正門はこっちだ」「ありがとう、詳しいんだな」

「ああ、浜っ子だ!」

明日からのスケジュール説明が終わり、学生自治会の先輩が挨拶をして説明が終わる。

「お袋さんが待っているだろ」「ああ、探してやらないと・・・」「今日、お帰りか?」「うん、今夜の新幹線だ」

「新横浜から?」「いいや、東京駅まで送って行く」「大変だなあ」

「ああ、世話が焼ける」「じゃあ、頑張つてな!」

「ありがとう、俺は北村真一」「俺は小柳レオ、隣は山崎ヒマワリ」「ヒマワリが俺の横でペコリと頭を下げた。

「彼女か?」「ああ」「同じ学部か?」「一緒に受けたからな」

「そうか、凄いんだな」「普通だろう」「じゃあ、明日」「じゃあ俺との会話で目を丸くして隣人は立ち去った。ちよつと冗談が過ぎ

ただろうか?」

保護者は式典後の説明は必要がないので早く退出している。

ヒマワリとメインロビーに向う。ロビーはごった返している。

北村はお袋さんを見つけただろうか？

人ごみを掻き分けてタカが近づいてきた。タカは小学校以来の親友だ。

「よう！すげ〜人数だなあ」「本当に……」

「お前のところ、お袋さんは来てるの？」「いんや〜あ、お前は？」

「俺んち、親父とお袋が来ている。揃って来なくても良いのになあ。」

「

「でも、俺んちは兄貴と妹が監視している！」「えっ、レイラさん来てるのか？」

「辞めておけって、兄貴が一緒じゃ勝ち目は無い」「お前の兄貴、格好がいいからなあ！」

「弟もだろうが……」「お前が相手なら、勝算があるけど……」  
馬鹿話をしているとタカのお袋さんが現れた。

俺が、丁寧に他人行儀な挨拶をする。

小柄な母親をはるかに凌ぐタカが後ろでクスクス笑う。

小学生当時と全く変わらないタカの母親は「レオ君、大きくなったわねえ！」と俺を見上げて驚く。

親達には、小学生時代にチビのツートップと言われた頃の記憶が強く残っているらしい。

タカはドナドナの牛のように小柄な母親に引かれて去っていった。

解散後の流れは二方向に分かれる。

海の側に出て、港を眺める公園に向う人達、ビル街方向に出て駅方向に向う人達。

前者の多くは家が遠い人達だろう、内部進学組は駅方向の繁華街に向う。

俺とヒマワリは何となく海側に出た。

間もなくこの地を離れるレイラや兄貴が海側に向った気がしたからだ。

「お父さん、残念だったね」「うん」俺は口にしてからしまったと思うが遅かった。

ヒマワリの顔が曇り、笑顔が消えた。

「ゴメン、折角のお祝いせうかくの日に……」「いいの、仕事が忙しいから……」

「そうらしいね」「会社が上手く言っていないらしいの、それなのに……」

「それなのに?」「無理して私を大学に入れてくれたの」

「でも、会社の経営と娘の進学は……」「大変だと思うの。学費を払わせて良いのかな?」

「奨学金しょうがくきんを狙う?」「私にそんな学力があると思う?」「そうか……」

変に納得してしまった俺は、思わずヒマワリの顔を見た。

「でしょう?!」「ヒマワリの顔に微笑ほほえみが戻った。

「見て、あそこに……」ヒマワリが港を眺ながめているレイラと兄貴を見つけた。

「絵になるなあ」「本当に素敵すてきね」

海を見ながらたたずむ、大人のアベックという雰囲気ふんいきで映画に登場しそうな姿だ。

「お二人とも、スタイルが良くて、素敵すてきですね」

確かに格好が良いが、レイラの隣に立つのが兄貴だから俺は穏おだやかに居られる。

万一、知らない男だったら……何時かレイラに恋人ができるのだろうか。

間もなく、一人暮らしを始める妹。レイラは大丈夫だろうか? 離れて過ごす事が殆ほとんどなかっただけに心配だ。

兄貴が近づく俺達に気付いて手を上げた。

「お疲れ！」「ウン、何だかたびれた。緊張したからかな？」

「レオでも緊張するんだ」レイラが憎まれ口をたたく。

「今、ナオと話していたのだけど、海上バスで行かない？」とレイラ。

「海上バスって？船の便が出ているの？」

「以前、お袋がりチャードと乗船したと言っていたる！」兄貴が答える。

「聞いた気がする」「私は乗って見たいわ」とヒマワリ。

俺も異存いそんはなく、全員の意見が一致した。

デッキで顔にあたる春の海風つみかぜは爽さわやかだ。

みなとみらいの観覧車を海側から眺ながめ、ベイブリッチを見上げながら船が進む。

ヒマワリと二人だけでないのがチョツと残念だが、一方でレイラと一緒に時間を楽しみたい。

なぜか、女二人で話はなが弾はずんでいるらしい。

程なく、山下公園に到着して船旅は終わった。

普段なら公園の名物、アイスクリンを屋台のおばちゃんから買い求めるのだが……。

流石さすがにスーツ姿でアイスを舐なめるのは、格好ながつかないと思ひ断念した。

兄貴が元町でアメリカに持っていく土産みやげを買いいたいというので付き合うことにした。

レースの小物を扱っている店で、兄貴だけでなくレイラも気に入っている。

ヒマワリも大喜びでいろいろ眺ながめている。

入学記念に何か買ってやるうかと・・・値段をみてビックリ！俺では手が出ない。

「買ってやるうか？」と言う前に値段に気付いて良かった。

兄貴に美味しい珈琲を奢らせて、しばし、お喋りを楽しんでから中華街に移動した。

店の人に案内されたのは、この前、お袋がリチャードと再会した思いのVIPルームである。

この部屋をお袋が予約する時は我家の大きなイベントがある時だと俺は気付いた。

「お袋がどのくらい遅れてくると思う？」兄貴が言った。

「さあ、10分以内じゃない？俺の胃袋の感覚だと・・・」

「レオは何時も胃袋で判断するんだから！」レイラが呆れる。

「だって、中華料理は揃わないと始められないだろ」

「中華に限らず、コース料理は揃わないと駄目よ」レイラが突っ込む。

お袋が何分遅れるか賭けをしようかと話しているところに当人が現れた。

ドリンクが配られ、俺たちの3人の入学を祝って乾杯だ。

入学式の様子や、海に見える公園の桜の事を喋っていると次々に料理が出てくる。

「レイラは何時、移動するの？」「入学式の前日に移動しようと思っけど・・・」

「そう、来週ね。」「俺が送って行って、入学式にも出てきます」とナオが言った。

「判った、お願いして良いかしら？レイラ、私が行かなくても良い？」「ええ」

「ナオ、宜しくね。入学式が重なっちゃって・・・」「誰の？」「私の・・・」

「えっ？」俺は思わず酢豚すぶたを取りそこなった。

「私の・・・ってお袋・・・」「あら、この前、言わなかった？」俺達4人は揃って首を横に振った。

「リチャードと食事した時に、私も4月から大学院で研究すると言う話をしてたでしょ？」

・・・聞いていない。全員が記憶を辿たどって固まる。

「あっ」兄貴が思い出したのか声を上げた。俺たちの注目が集まる。「大学院生になったら一緒に研究できるとか言っていた日米共同研究だという話のこと」

「そう、その話」・・・俺の記憶にはない。

「レオ、お前が考えても無理だ。お袋達はドイツ語で話していた」「そうだったかしら・・・」

「俺の事を話しているのかと思っていた。そうか・・・なんか変だったんだ・・・。」

「まあ、良いじゃない。今、報告ほうこくしたんだから・・・」「いいや、ちつとも良くない。お袋が大学院に入学する？」

・・・何か大きな問題があるような気がする。俺の頭の中がグルグル回りだした。

「じゃあ、仕事は辞めるの？」兄貴たすが尋ねた。そうだよ！それは大問題じゃん。

俺やレイラはどうすればいいんだ。兄貴だって自活していない。

「辞めやないわよ。職場の了解も取ってあるから、研究するのに場所が欲しいだけ」

「学位をとるの？」「別に、今更・・・自分の得たノウハウをまとめたいだけよ！」

俺の少ない脳のうみそは兄貴とお袋の会話から状況を整理できずに沸騰ふっとう寸前すんぜんである。

レイラは驚きで青ざめている。やはり、俺と同じ状況だろうか？

ヒマワリは驚いて、目を真ん丸く開いてお袋と兄貴の顔を交互に見ている。

「そんなに大騒ぎする話じゃないでしょ。それより、ナオの予定は？」

「間もなくビザが下りると思うので5月の前半に出国します」

「そう、向こうの準備だけでなく、現在の研究室へも失礼がない様にね」

「はい、教授には挨拶にうかがいます」

「現地の準備は？アパートは見つけたの？」

「フィリップが任せて欲しいと言っているから・・・」

「そう、心配ね！」「えっ？」「フィリップに頼んだんでしょ？」

「はあ・・・」

自信に満ちた兄貴の顔が急に不安に曇った。

兄貴は何か聞きたそうにしているが、お袋は何も言わない。

お袋は不安そうな兄貴の顔を見ようともしないで料理を取り分ける。「うん、これ美味しい。あら、ナオは小食ねえ！」  
お袋が隣に座る兄貴に見えないように顔の横で親指を立てて合図をした。

俺とレイラがそれに気付いて思わず噴出した。

ヒマワリが不思議そうに俺の顔を見る。

「兄貴をからかったんだよ！」俺は小声でヒマワリに教える。

「まあ！」「ヒマワリが笑い出すと、兄貴も「ひどいなあ・・・」とお袋を見て笑う。

「ナオ、真面目な貴方は好きだけど、アメリカ人はジョークが好きよー！」

「うん、プレゼンや講演もジョークで始まるからね」「そうね」

何となくお袋は兄貴にアメリカ人との付き合い方を伝えたようだ。

「では、改めて、みんなの新しい出発に乾杯しましょう」

お袋の言葉で、俺達は二度目の乾杯を行なった。  
これからそれぞれが進む新しい道を祝して

どうなるのか・・・全員が学生になった我家は・・・。  
こうして、俺は学生になった。

終章・俺は学生になった（後書き）

こうして、俺は学生になった。

大学生としての新しい日々は決して平穏ではないが、その時のおれは知る由も無く、新生活に向って希望に溢れていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5119e/>

---

俺は学生になった

2011年4月8日19時40分発行